

平成21年度

**奈良県公立学校優秀教職員  
表彰実践事例集**

平成22年1月

奈良県教育委員会

# 目 次

## 【小学校】

### 学校教育目標の具体化の部

#### 1 「治道元気プログラム」の実践について

大和郡山市立治道小学校 竹村 晴美 1

#### 2 研究課題の実践発表を通して研修を深め、学校の活性化をめざす取り組み

平群町立平群南小学校 森口 裕美 3

#### 3 読書指導を通して、心豊かな子に - 1年生から発信 -

斑鳩町立斑鳩西小学校 賀須井節子 5

#### 4 本校の本年度の重点課題としての「食育の推進」「キャリア教育の充実」「家庭・地域との連携の強化」「ボランティア活動の推進」への取り組みについて

上牧町立上牧第二小学校 皿谷 光良 7

### 学年・学級経営の部

#### 5 コミュニケーションから生まれる、笑顔あふれる学級づくり

生駒市立生駒東小学校 石村 吉偉 9

#### 6 当たり前の継続から児童の前向きな姿勢を伸ばす学級経営をめざして

十津川村立平谷小学校 坂田 喜昭 11

### 教科教育の部

#### 7 学習意欲と学力の向上を目指した指導と評価の工夫

- 地域の特色や実生活に密着した教材と診断テストの開発を軸に -

奈良市立吐山小学校 今西 敏幸 13

#### 8 「理科が好きな子どもを育てるために」

平群町立平群東小学校 山岡 由紀 15

#### 9 言葉に着目し、確かな読みの力をはぐくむ国語科学習の構築について

- 互いのとらえを出し合いながら、考えを深め合う学びの世界の創造 -

葛城市立當麻小学校 西川 佳寛 17

### 生徒指導の部

#### 10 学校と家庭・地域をむすぶネットワークづくりについて

奈良市立椿井小学校 木村 勇 19

#### 11 学級から発信するボトムアップ型生徒指導について

奈良市立富雄南小学校 藤波 央 21

#### 12 教職員一丸となって子どもたちと向き合おう

平群町立平群西小学校 阪口 寿久 23

### 特別活動の部

#### 13 「よりよい人間関係を築く力」をはぐくむ児童会活動をめざして

斑鳩町立斑鳩小学校 吉村 孔一 25

#### 14 共に生き、共に学ぶ楽しさを育む教育の創造

- 自主的・実践的な集団活動の充実をめざして 学級活動を中心に -

香芝市立志都美小学校 森田 純子 27

### 特別支援教育の部

#### 15 特別支援学級における学級経営

- 専門性を高める為の研究テーマ設定について -

香芝市立下田小学校 大山 真人 29

### 健康安全教育の部

#### 16 小規模校の特性を生かした保健室経営

奈良市立並松小学校 北井 利枝 31

### 情報教育の部

#### 17 情報教育の推進 - 校内のIT環境の整備と推進について

御杖村立御杖小学校 南園 真純 33

#### 18 ICTを活用した指導について - 電子黒板の活用を通して -

五條市立阪合部小学校 岡橋 秀光 35

## 【中学校】

### 学校教育目標の具体化の部

- 19 新しいタイプの学校運営でビジョンを具現化  
奈良市立都南中学校 坂本 静泰 37
- 20 学校教育の活性化について - 組織マネジメントの視点から -  
生駒市立鹿ノ台中学校 尾本 潤治 39
- 21 教務主任として、特色ある学校づくりの推進について  
下市町立下市中学校 日裏 雄也 41
- 22 「学校評価を生かした学校改善の取組」  
川上村立川上中学校 前 浩輔 43
- 23 教務主任として学校教育目標の実現にむけて  
五條市立五條西中学校 小林 良樹 45

### 学年・学級経営の部

- 24 生徒一人一人が絆を感じあい、大好きと思える学級の創造  
斑鳩町立斑鳩中学校 上谷 基博 47

### 生徒指導の部

- 25 チームサポートによる不登校支援と教員コーディネーターの役割について  
川西町三宅町式下中学校組合立式下中学校 植野 幸子 49
- 26 組織的生徒指導体制の構築について  
田原本町立田原本中学校 中野 智 51
- 27 生徒がいきいきと学校生活を営むための生徒指導について  
田原本町立北中学校 植嶋 茂司 53
- 28 学校における安全教育 - 現在の子ども達をとりまく様々な危険 -  
香芝市立香芝北中学校 大西 徳彦 55

### 特別活動の部

- 29 生徒が主体的に取り組む学校創り - 生徒指導とリンクさせて -  
黒滝村立黒滝中学校 遠山 みさを 57

### 進路指導の部

- 30 学力保障を基礎とした進路指導のあり方について  
橿原市立畝傍中学校 高栄 耕平 59

### 特別支援教育の部

- 31 中学校の教科担任制を生かした支援体制について  
奈良市立平城東中学校 吉川 雅史 61

### 学校教育推進の部

- 32 図書館教育の充実をめざして  
橿原市立光陽中学校 鳥井 浩 63

## 【高等学校】

### 学年・学級経営の部

- 33 「教育コース」の学級経営について  
奈良県立高田高等学校 吉田 祥子 65
- 34 「活力のある学年集団作り」をめざして  
奈良県立香芝高等学校 田中 隆憲 67

### 教科教育の部

- 35 専門高校で学ぶ生徒と魅力ある教育活動について  
奈良県立奈良朱雀高等学校 上田 裕康 69
- 36 国語科の授業実践について  
奈良県立山辺高等学校 堤 乃扶子 71

### 総合的な学習の時間の部

- 37 特色と魅力ある人文科学科の創造 - 「総合文化研究」にかかわる取り組み -  
奈良市立一条高等学校 藤村 智子 73

### 情報教育の部

- 38 情報教育の取組について  
奈良県立桜井高等学校 中川 賀照 75

部活動の部

39 弓道部の指導について

奈良県立橿原高等学校

大西 敏彦

77

学校教育推進の部

40 広報活動の充実と開かれた学校づくり

奈良県立高円高等学校

井上 徳之

79

## 1 実践内容

4月に、校長から学校教育目標が示され、小規模校の特性を生かしながら『顔の見える学校』・『活気のある学校』づくりを目指そうと話された。私は1年生の学級担任として何が求められているかを考え、研究主題である「言語活動を効果的に位置付けた授業の創造」を頭の片隅に入れながら、地域の人たちにも本校教育に深く関心をもってかかわってもらえるような活動をしたいと思い巡らせ、実践していくことにした。名づけて「治道元気プログラム」。



### (1) テーマは「ジャンボ」

小規模校でも夢や希望をいつまでもでっかくもち続けていられるようにと考えた。1学期は、地域の方から借用した田でジャンボカボチャ（以下、字数の都合上カボチャと表記）を栽培することにしたが、知識も経験もない。校長に構想を伝えると、早速、地域の方から借用している田（わくわくらんど）の耕作依頼や、栽培を指導・応援して下さる地域の方々を核とした「治道元気プログラム」実行委員会を立ち上げてくれた。実行委員（学校評議員・JA営農指導員）の方々や北海道佐呂間町役場の協力を得、栽培方法や自然相手のハプニングの対応などについてアドバイスをいただきながら進めていった。

#### 春から夏

5月下旬、幼稚園児やJA営農指導員の方と一緒にカボチャの苗を移植した。校長からは、「外へ発信していくように」とのアドバイスを受け、学級通信や写真入りの掲示板をわくわくらんどに立て、カボチャの様子や子どもたちの活動を随時知らせた。

6月半ば、カボチャは蔓が伸び葉も大きくなり、小さな黄色い実も付けた。子どもたちの好奇心を刺激するような生長の過程をたどり、地域の方々にも驚きを与えた。子どもたちは「ぼくらの畑で、カボチャをでっかくしよう！」という熱い思いをこめ、大きな板にみんなで手作りの看板を作った。



案山子の『まもるちゃん』

しかし、暑さで葉が焼け始め、長雨でうどん粉病の発生も見られた。実行委員や佐呂間町の方に対応策を教えてくださいました。「夢を夢で終わらせず、必ず実現させたい」という教師と子どもたちの願いと、「支えてやりたい」という地域の方々の温かい思いとが一つになっていることを強く感じた。そして、分けていただいた藁を敷いて世話を続けた。地域の方も田の前を通るたびに、カボチャの生長を眺め、藁に代わる物も敷いてくださっていた。

わくわくらんどで水やりや観察をしていると、地域の方はよく声をかけてくださった。学校が栽培に本気で取り組んでいる姿勢を地域に発信していくことに、温かく見守り応援して下さっているという、目に見えない関係が生まれつつあった。

8月には大きなカボチャを地域の方々と収穫し、カボチャに敷くこも編みの道具を具

立民俗博物館から借り、子どもたちはお年寄りに編み方を教えてもらい編み上げた。

#### 夏から秋

幼小合同運動会では、本部席前に座るカボチャが見守るなか、地域の方も一緒に重さ当てクイズを楽しんだり、演技『わくわくらんどのか～にばる』を披露したりして、会場全体が一つになって演技を楽しんでもらえた。また市役所や市の施設にもカボチャを展示してもらい、広く市民の方々にも楽しんでもらえた。



佐呂間町「一枚の写真コンテスト」  
グランプリ賞受賞

小さな種は子どもたちの夢や子どもたちの心に北海道と大和郡山とのつながりを大きく育ててくれた。11月になり地域からの声もあって、命のつながりを期待して、「治道まつり」でカボチャの種を配布した。

#### 秋から冬

9月半ばには、幼稚園児と一緒に鹿児島県特産の桜島ダイコンの種蒔きをした。桜島ダイコンは冬の降霜にも耐え、土の中で密かに育っていた。真冬の収穫の日、保護者や地域の方々が見守るなか、子どもたちはでっかい桜島ダイコンを収穫した。そして、子どもたちの成長の喜びや感謝の気持ちを伝える場として、盛大に『大根か～にばる』を開催し、地域の方々や全校児童にも約180人分の桜島ダイコン煮を振る舞った。治道の地域と子どもたちが大きく一つの輪になり、誰もが活気に満ち元気に輝いていた。

#### (2) 「自信をもって、はばたきつづけよう！」

栽培や生長の様子を保護者や上級生に話す活動を取り入れ、子どもたちは次第に順序立てて分かりやすく話せるようになっていった。また栽培に関連した詩を暗誦したり物語を読んだりもした。その毎日の積み重ねが百人一首の暗誦にもつながり、数人の児童は市主催の記憶力大会や五色百人一首大会にも多数参加して、大舞台で熱戦を繰り広げた。集会活動では、栽培活動や収穫の喜びを五七調の自作の句を暗記して、全校児童に自信満々に発表することができた。小規模校の児童にとっては、大海に漕ぎ出す小船のようであるが、確実に一歩ずつ踏み出し、経験を重ねて自分に「自信」をつけたことを実感できた。

## 2 成果及び課題

試行錯誤の連続であった栽培活動は、子ども一人一人がその子らしさを発揮して生き生きと活動ができた。子どもたちは、大人が真剣に悩みながら手助けしてくれる姿から、本気になり活気に満ちた活動を展開できた。また収穫時の子どもたちの嬉しそうな表情に触れ、「自信」をつけたことを強く感じ、地域とともに生きる小規模校としての元気と活気を生み出していくことが実感できた。地域の方々も子どもたちが一生懸命世話をする姿を共感的に受けとめてくれ、「子どもたちと一緒に楽しみながら栽培活動を通して教育にかかわっていく」という姿勢に変わっていったことを痛感した。今後も地域の教育力を生かし、「お互いに顔が見え、地域とともに生きる学校づくり」を進めていくため、新たなテーマを決め、栽培からチャレンジを続けていきたい。

## 3 その他参考となる事項

大和郡山市立治道小学校ホームページ <http://www6.ocn.ne.jp/~harumiti/>

## 事例番号2 小学校 学校教育目標の具体化の部

研究課題の実践発表を通して研修を深め、学校の活性化をめざす取り組み

平群町立平群南小学校 教諭 森口 裕美

### 1 実践内容

研究主任として研究課題を基に様々な研修計画を立て実践し職員の資質向上を進めている。本校職員一丸となって、研究課題に基づき研修し実践を重ねてきた。課題に即して担任教師との協力のもと様々な研究課題に取り組み、研修を深めた。それらの実践発表を様々な場で行うことができた。発表の場では、多くの意見を得ることで、研究課題を見つめ直し客観的に検証し、取組を継続してきた。中でも「総合的な学習の時間における森林環境教育」・「道徳教育での規範意識の育成」・「図画工作科の取組」では、自ら実践発表を重ね研修を深めることができた。



#### (1) 森林環境教育の実践

平成18年度に森林環境教育の研究指定を受け、4年生の「総合的な学習の時間」で森林環境教育を実施することとし、担任教師と共に年間計画を立て、地元の森林再生ボランティアを講師招聘し、校区の里山の間伐体験を実施した。また、間伐材を使用した木工工作を自ら指導した。さらに次年度以降もそれらの実践を継続するよう研修を深め、計画し実践をした。その取組を平成20年2月15日に県立教育研究所の森林環境教育研修講座にて「森林環境教育体験学習」として本校での2年間の実践を発表した。そのことにより様々な意見を聞き、森林環境教育の大切さと同時にその継続の難しさの中でどのような取組が可能かを提言することができた。さらにそれら様々な課題をふまえ研修を重ね、4年間継続し取り組んでいる。それら本校での取組を平成21年11月15日にならまちセンターにて「奈良の元気な森林づくりシンポジウム」において県下の森林環境教育の事例報告をした。発表を機会に研修を深め、これまでの取組を再検証し、さらに充実した森林環境教育の在り方を考える機会となった。パネルディスカッションでは、様々な森林に携わる方々の意見を聞き多くのことを学ぶことができた。奈良県の森林の現状、森林環境教育に求められているものなど、今後にかかしていきたい。



#### (2) 規範意識の向上を目指す取組

今日的課題である児童の規範意識の低下が懸念される中、本校でも平成19年度より児童の規範意識の向上を目指す取組を校内道徳主任として自ら計画し実践を進めている。1年生の道徳の授業において、奈良県教育委員会発行の資料をもとに規範意識の向上を目指した授業を担任教師とともに研究し実践した。また学校教育全般を通しての規範意識の向上に取り組み、学校・家庭・地域の協力のもと実践できるよう研修を深めた。それらの取組を平成21年2月12日に奈良県立教育研究所で奈良県小中高生指導研究会主催「第9回小中高生者の未来を考える集会」にて担任教師と共に実践発表をした。

さらに次年度には他学年でも道徳科で規範意識の向上のための様々な取組を行った。平成21年7月30日には、先進地視察として桜井市の小学校教職員の来訪に際し実

実践報告をし、他校の教職員の意見を聞き、新たな課題も知ることとなった。そして平成21年8月9日に樟蔭女子大学で全国生徒指導研究集会（関西支部）にて、奈良県での「規範意識の向上を目指す取組」として本校の実践を報告する機会を得た。質疑応答の際には様々な意見を頂き研修を深めることができた。教師の指示が伝わりにくい、ルールが守れない等様々な児童へ個々の対応の仕方等の解決法を考えることができた。現場での実践に生かしていきたい。また他府県との意見交換の場で様々な課題と向き合うことができた。

### (3) 図画・工作科での授業実践研究発表

本校では教師の資質向上のため教科の研修を深める研究授業の機会を計画している。それぞれの教科や担当の授業実践力の向上を目指し、教師全員の公開授業を基本としている。また本校教職員はそれぞれの教科の研究会等での公開授業を積極的に行っている。自らも図画工作科での授業研究と実践を行っている。平成19年8月2日に県立教育研究所の10年経験者研修講座にて図画工作科実践発表の講師を務め、それまでの取組を発表した。10年研修の教職員からの質疑などで、自らの実践を振り返ることができた。

また平成20年11月21日に奈良県図画工作・美術教育研究大会において本校での低学年の造形あそびの授業実践を発表した。発表にあたり研修する中で造形あそびの実践での疑問点等を明らかにし解決することができ、新たな授業実践をすることができた。発表や報告で多くのことを学び自らの授業実践力の向上に生かし、教材を工夫し取り組んでいる。

### (4) 様々な研究課題の取組

このように様々な研究課題に取組、実践発表をすることで、多くのことを学ぶよい機会となった。研修を深め、継続した取組ができた。また多くの人の意見や助言を受けることができ充実した研修を持つことができた。

## 2 成果及び課題

実践発表により校外の多くの人の目に触れることは、よい緊張感を学校にもたらし教職員の志気を高め活性化をもたらす。自らの実践を客観的に評価し新たな課題を見つけ、さらに高められた取組を目指し継続することとなる。また、校外での発表により、教職員の絶えまぬ研修の成果が保護者や地域の人々に伝わりさらに多くの理解を得、信頼される学校づくりにもつながっていく。発表をすることでそれまでの取組を再検証することができる。そして様々な異なった立場からの貴重な意見を得る機会となる。このように実践発表を学校全体で取り組むことは多くの成果を見出すことができる。

実践発表を進めるに当たり多くの教職員の理解と協力が欠かせないが、本校では全教職員の協力の下これらの実践が実現されてきた。しかしながら、日々多忙な中、多くの課題を教職員皆が抱えていることを念頭に、研修の偏りや負担をなくすよう研修計画を進めていかなければならない。

今後も様々な実践発表に積極的に取組研修を深め、学校の活性化の一端を担っていきたい。

## 3 その他参考となる事項

平群町立平群南小学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~heguri-s/>



## 1 実践内容

不安と期待を抱えて入学した子どもたちは、自分のことが精一杯でまだまだ相手の気持ちを考えることが難しい。教室を安心して心を開くことができる場に、思いやりのある子どもを育てることを学級づくりの柱とした。



読書は、登場人物と気持ちを重ね、その生き方を学び、心を耕すことができる。そこで、読み聞かせなどを通して子どもたちの心に響く働きかけをしてきた。1年生は、覚えたての文字を一生懸命拾い読み、絵にじっと見入り、読書を楽しんでいる。できるだけ多くの本に出会わせ、本好きな子をもっともっと作りたいと思い、読書指導に取り組んだ。また、学級での取組が全校に広がっていくことを願って実践を進めた。

### (1) 学級・学年から

#### 絵本の読み聞かせ

時間を見つけては読み聞かせをした。初めは興味を示さなかった子も読んでもらった本をもう一度自分で読んでみようとしていた。

#### 学級文庫の充実

すぐに本を手にとれる環境を作った。季節や学習内容に合わせた本を選び、常に入れ替え、興味を惹き付けるようにした。

#### 「えほんのくに」

ランチルーム一面に500冊の絵本を並べ、ゆったりと自由に本を読む空間「えほんのくに」を作った。床掃除から始まり、積み木や段ボールを使った棚作り、ポスター作りに至るまで作業は全て1年生の子どもたちが行った。参観日にお気に入りの本のブックトークをし、他学年を招待して1年生が読み聞かせをした。幼稚園の子を招待して1対1で読み聞かせをしたときには、ちょっぴり得意げに話しかけていた。休み時間には、1年生から6年生の子どもたちが集い、一緒に読み合い、温かい時間を過ごした。「えほんのくに」を開催するにあたり、職員研修で絵本の面白さを伝えて、計画を理解してもらい、公共図書館や地域のおはなしボランティアにも読み聞かせの仕方を教わった。



#### 読書記録

言葉を入れたり紹介したりしたのが励みとなり、どんどん読み進めていった。そこで、読書カードを全校に配布して活動を広げた。

#### 朗読劇・群読

お話を楽しみながら、子どもたちの心を一つにできる活動を取り入れた。

#### 保護者への啓発

学級懇談会や学級通信で子どもと一緒に読書をする大切さを伝えた。

## (2) 全校へ

### おはなし会

- ・図書委員による読み聞かせ（朝の読書の時間 学期に2～3回）
- ・先生が交代で読み聞かせ（昼休み 月に2～3回）
- ・地域のおはなしボランティア（図書の時間 月に2～3回）
- ・校長先生の紙芝居
- ・おはなしキャラバン隊
- 「おすすめの本」募集としおり作り

本のカバーの絵を切り取りラミネートし、しおりを作って渡した。しおりの絵から本を探したり、しおりを挟んで本を大切にしようとしたりする効果があった。

### 図書室の整備

保護者にボランティアを募り、データベース化を進めた。

### 公共図書館との連携

団体貸出や巡回サービスの利用

## 2 成果及び課題

- ・学級の子どもたちは本当に本が好きで、ほんの少しの時間でもあれば本を読んでいる。一冊の本を囲んで子どもたちが集まり、教室の中に和やかな時間と空間が生まれた。
- ・1年生で十分読み聞かせをすると、文字に対する抵抗もなくなり、自分で読む子が増えてきた。読み聞かせによって、本と子どもを結び付け、自分でもう一度読もうとする気持ちを持たせることができた。
- ・子どもたちは、相手を思い浮かべながら読み聞かせの練習や「えほんのくに」の準備をすることで、人を思いやる心を持ち、本を通してたくさんの人とのつながりができた。1冊の本が初めて会った子ども同士の心を通わせた。
- ・図書室の整備の際には、お母さんからお母さんへと誘いかけがあり、ボランティアの輪がどんどん広がっていった。データ化だけの作業予定だったが、本の補修や並び替え、掲示物作成、貸出返却の手伝いにも協力が広がり、休み時間にいつも誰かがいる図書室が運営できた。にこやかに話しかけてくれるお母さんたちに包まれ、静かで温かい図書室となった。
- ・子どもに本の楽しさを感じさせるためには、教師が子どもの本をよく知り、本と子どもとの出会いを工夫する必要がある。子どもを理解し、その子に合った本を選ぶ目を持ち、子どもと本との橋渡しができるように、よりいっそう研修していかなければならない。
- ・「えほんのくに」を開くことにより、たくさんの人に読書の楽しさを伝えることができた。しかし、学年が上がるにつれ本から遠のいてしまう子がまだまだいる。読書指導は、学級だけでなく全校で取り組み、積み上げていくことが大切である。今後も、全職員の協力を得て、全校での読書推進の取組を続けていきたい。

## 3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩西小学校ホームページ

<http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugaw/>

## 事例番号4 小学校 学校教育目標の具体化

本校の本年度の重点課題としての「食育の推進」「キャリア教育の充実」「家庭・地域との連携の強化」「ボランティア活動の推進」への取り組みについて

上牧町立上牧第二小学校 教諭 皿谷 光良

### 1 実践内容

#### (1) はじめに

子ども自身も持っている問題、あるいは保護者がもっている問題、さらには子どもと保護者が複合している問題などから、生活面に問題をもつ子どもが見られる。具体的には、少数ではあるが、常習的に遅刻してくる子ども、汚れたままの服を着続けている子ども、自主性を言葉に放任されたままの子どもの存在である。また、学校生活のきまりなどが分か



っていても守ろうとしないというように、全体的に規範意識の低さも感じる。

本校では、教育目標を「人権尊重の精神を基盤とし、心身ともにたくましく実践力豊かな児童を育成する」とし、重点課題を、「食育の推進」「キャリア教育の充実」「家庭・地域との連携の強化」「ボランティア活動の推進」「学校評価の充実」を掲げている。こうした、本校の重点課題にむけた、教務主任として、全体の子どもに関わる日々の取組の一端について述べる。

#### (2) 具体的な取組

##### 食育の推進(季節を感じる野菜の栽培から)

栽培技術の進歩、社会的な仕組みなどにより、子どもの多くは野菜や果物から季節を感じる事が少なくなっている。そこで、野菜から季節を感じられるように、子どもが目にしやすい場所に、夏にはキュウリやトマト、ナスを、冬には、水菜やサニーレタスを植えている。子どもは、「何を植えているの?」「いつできるの?」など、興味をもって、成長過程を見ている。収穫時期とともに、野菜の成長に要する時間についても意識して見ている。

##### キャリア教育の充実(朝の校門での挨拶から)

人間関係形成能力につながるコミュニケーション能力の育成といったキャリア教育の観点から、毎朝、校門に立ち、子どもたちと挨拶を交わすようにしている。挨拶をしない子どもに対しては、名前を呼んで、振り向かせてから、挨拶をする



ようにしている。形ばかりの挨拶にならないように、表情についても観察し、明るい表情で、挨拶ができた子どもには称賛の言葉をかけるようにしている。私よりも大きな声で、明るく挨拶をしようとする子どもも見られる。

##### 家庭・地域との連携の強化(子どもの様子を知らせる保護者との会話から)

本校では、保護者が来校する時に名札をつけることが義務づけられている。名札を見て、「 年 組の さんですね。」とともに、学校でのその子どもの様子を話すようにしている。また、下校時、子どもを送り、地域に出るようにしている。このことは、地域の人に学校の職員であるということを知ってもらえるよい機会となっている。挨拶だけに終わることが多いが、時として、地域の子どもの様子について聞かせていただけることもある。また、町が主催する運動会、マラソン大会、雪中登山といった行事にも引率、応援として参加している。学校で見る子どもの姿と異なる面も見られ、そのことを保護者に伝えることで、安心感を与えるとともに、話題づくりにもなっている。



ボランティア活動の推進（ともに行う清掃活動から）

子どもとともに清掃を行っているが、ボランティア活動の推進にとって貴重な時間である。まず、担当場所の掃除の仕方について理解させる。次に、理解した仕方で、清掃ができれば、できたことを認めるようにしている。さらに、仕方や場所を考えた清掃をした子どもにはもっと認めるようにしている。この認められる心地よさが、実際のボランティア活動への意欲になるものと考えている。子どものなかには、「先生、一緒に掃除しよう。」と誘いに来るようになってきている。

## 2 成果及び課題

微々たる成果ではあるが、多くの子どもが野菜の成長に目を向けたり、挨拶ができなかった子どもが挨拶を意識したりするようになってきている。また、保護者や地域の人から気軽に声をかけてもらえるようになったり、担当場所にくる子どもの多くが熱心に清掃をするようになってきたりしてきている。こうしたこととともに、一番の成果として、私自身が学校教育目標の重点課題の意識化がはかれたことである。さらに、こうした取組が、県及び町の教育方針の具現化にもつながるものであることが分かった。課題としては、まだまだ不十分な取組でしかないので、内容や方法を考え、長期的な展望をもち、今後も継続的に取り組んでいく必要がある。

## 3 その他参考となる事項

上牧町立上牧第二小学校ホームページ <http://www.lint.ne.jp/~nisho/>

## 1 実践内容

学級開きを行うに当たり、子どもたちに4つの話をした。「けじめを付けた行動をとり、マナーを守ろう。」「自分で考えて行動しよう。」「人が喜ぶことをしよう。」「しっかりとコミュニケーションを取ろう。」である。

子どもたちは、学校を楽しみに来ている。1日の生活時間の半分は学校で過ごしているのである。そして、そのほとんどが「学級」という限られた集団の中で過ごしている。子どもたちが自分の居場所を確保し、輝いていくためには、コミュニケーションが不可欠である。そこで、コミュニケーションをしっかりと取るということを中心に学級づくりを進めた。



### (1) 子どもたち同士のコミュニケーション

学級目標は、子どもたちの話し合いで決めてもらった。ただ、1年間を終わって、「このクラスにいて幸せだったなあ。」と感じてほしいという担任の願いから、末尾は「～幸せなクラス」で終わってほしいことを子どもたちに話した。

子どもたちからは、様々な意見が出た。それには、理由まで付け足し発表する子もいた。子どもたちがどんな願いや期待をもってこのクラスにやってきたのかが分かる時間であった。学級でのコミュニケーションの第一歩である。

学校生活をしていく中で、様々な問題が起こってくる。担任が指導し、解決していくことも大事であるが、子どもたちが話し合い、その中でルール作りをしていくことが大切である。自分たちが決めたルールだからこそ守ろうと努力し、また、守らない者には注意できるものである。

そこで、「話し合いカード」を作成した。これは議題のある子が好きな時間に書き、議題箱に入れ、その中から議題を選んで話し合うものである。当事者に言って済むようなことは当事者に伝え、話し合わなければいけないことをクラスで話し合った。

ただ、学級会で長い時間話し合うことはせず、帰りの会という短い時間の中で話し合った。短時間ででも話し合うことにより、今起こっている問題の解決の方向がすぐに見いだせると共に、コミュニケーションがより多く図れると考えたからである。

高学年ともなるとグループ化が進み、気の合う子ども同士の交流ばかりが目につく。

そこで、席替えの時に「ありがとうカード」をグループ内で記入させたり、道徳の時間に「良いところ見つけカード」を記入させたりした。どちらのカードも友達の良い面を記入するものである。

同じグループや隣の席の子の良い所を見つけて記入することで、お互いをよく知

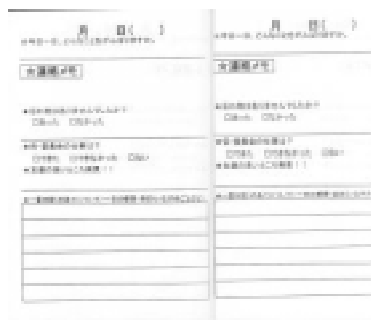
ると共に、新たな繋がりも期待できる。また、みんなの前で自分では思っても見なかった良さを発表されることにより、さらなる自己肯定感を育てることもできる。自分を大切に、友達を大切にする。そうすることで豊かな人間関係を広め、深めることができる。

## (2) 担任とのコミュニケーション

子どもたち同士のコミュニケーションは大切であるが、学級経営をしていく中で、担任と子どもたちとのコミュニケーションも重要な鍵を握っている。担任としては、すべての子に声をかけているつもりであるが、より子どもたちとのコミュニケーションをとるために、「かがやきノート」を毎日書いてもらうことにした。これは、一日の始まりである朝に、その日のめあてを書き、今日はどんなことを中心に充実した学校生活を送るのかを記入する。そして、帰りには、めあてについてや一日の出来事について、一日を終えての感想などを記入するというものである。

返事内容は、書いた文章の返事になっているもの、文章の返事になっていないが、こちらが学校生活の様子を見て子どもたちの良い所を記入するなどである。中には、さらに返事を書いてくる子もいる。担任としては、子どもたちの様子が分かるので、児童理解にも役立つ。

また、悩みを持っているのに、なかなか口に出せない子もいる。話したいのに話せない内容もある。そんなことにでも、この「かがやきノート」が有効である。友達と上手くいっていないこと、悪口を言われるということなど、子どもたちの心の叫びが伝わってくる。それには、1ページを真っ赤に染めるほど返事を書くこともあれば、その子とじっくり話すこともある。そうすることにより、子どもたちが安心して学校生活を送れるようになり、これが担任と子どもたちとの信頼にもつながっている。



The image shows a screenshot of a communication notebook form. It is divided into two main columns. The left column is titled '朝のめあて' (Morning goal) and the right column is titled '今日の出来事' (Today's events). Each column has several lines for writing. There are also some smaller sections at the top and bottom of the page, possibly for dates or other notes.

## 2 成果及び課題

実践を振り返ってみると、問題が起こることも多々あった。しかし、「コミュニケーション」によって、一つ一つを解決してきた。今、子どもたちの表情は、明るい。また、書くことによって、一日のめあてをしっかりと持ち、学習であれば、テストのある前の日などは、自主学習ノートにテスト勉強もして来るようになった。そうすることで、理解が深まり、そのことが子どもの自信となり、顔の表情に変化が表れてきた。担任と子どもたちのつながりも良好である。話しかけてくる顔にも笑顔が光る。

この夏、卒業生との同窓会で、「先生、家に『かがやきノート』あるで。」「まだ持ってるの。」「捨てれる分けないやん。読んでたら、昔を思い出すわあ。あの時は、良かったなあ。」また、別の同窓会では、タイムカプセルから出てきた「かがやきノート」に感激し泣きそうになる子も。もめ事もあったが真剣に話し合った日々を思い出す。

これからも、これらの実践をより進めることにより、子どもたちが「笑顔」で通って来られる学級作りをしていきたい。

## 3 その他参考となる事項

生駒市立生駒東小学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp>

## 1 実践内容

### (1) 「自由」と「責任」について

学年のはじめに、「自由」と「責任」について学級で考えていくことにしている。社会はもちろん、学校にもそれぞれの学年や個々人としてやるべきルール、つまり責任があり、その中で自分がやっていきたいことを思う存分していこうということを話している。

中学校や高校への進学、そして社会に出るにしたがって、自分自身の行動に対する責任は大きくなっていくので、高学年の児童には、小学校の卒業がゴールではなく、その後のことを見据えて行動していけるようになろうという話をしている。



### (2) 他者意識について

最近、会話の端々にきつい言葉づかいが入ることが日常的になりつつあり、話す側だけでなく、聞く側もそれが当たり前のように感じ、きつい言葉をきついと感じなくなっているように思われる。そのため、言葉づかいや行動など、相手を意識しながら、言い方や接し方を少し変えるだけで、お互いの気持ちがすっきりしたものになるということ、機会を見て何度も話している。

また、「ありがとう」と「ごめんなさい」の言葉をしっかり相手に伝えることを目指し、私自身も児童に対して意識をもちながらこれらの言葉を伝えるようにしている。

一朝一夕にはいかないことであるが、繰り返し確認してきたことで、誰かがきつい言い方をしたときに、児童同士でそのことを指摘し合える場面が見られるようになってきた。

### (3) どんどん間違っ失敗しよう

学校での取組や授業中の発表などで失敗したり間違ったりすることが、自分だけでなくクラス全体の理解や成長につながるという雰囲気をもつことを大切にしている。そして、つまづいた児童や失敗した児童に対して、児童同士が手助けをしていけるような雰囲気や、発表に対して萎縮せず意欲的に挙手できるような環境作りを心がけている。

また、達成が困難なことや恥ずかしかったり気が進まなかったりすることに対して、少しでもやってみようかなという思いをもっている児童には、「迷ったときはやってみよう」「まずはやってみないと何も変わらない」と声かけをして、積極的に背中を押すようにしている。クラス全体で何にでもチャレンジしていこうとする雰囲気を作りたいと常々思っている。

### (4) 小さなことでも褒める

どんなに小さなことでも、とにかく褒めることを大切にしている。学習でできたことや、学級または学校などのためになることをしてくれたときなど、必ずその児童と

直接話をして褒め、全体でもできる限り紹介するようにしている。全体の前で先に褒めた時にも、後から必ずその児童を直接褒めるようにしている。

もちろん、注意をしたりしかったりすることもあるが、しかるといって課題をクローズアップするのではなく、できたことをどんどん取り上げてクローズアップする方が、本人だけでなく他の児童も前向きに取り組もうと思えるのではないかと考えている。その中で、こんなこともできればもっとよくなると、次のステップを示すようにしている。

私自身が、それぞれの児童を見ているということを知ってもらえる機会になるだけでなく、児童同士がお互いを認め合う姿勢をもつことにもつながっているのではないかと考える。

#### (5) 納得できるまでお互いの意見を交わす

現在は6年生の担任をさせていただいているが、学校生活や学級での取組に対して児童に考えさせたいことがある場合、こちらの意見や考えを児童に話すだけでそのことを実行させるのではなく、児童の意見や考えもしっかり聞く姿勢をもつことを常に心がけている。

納得をさせるまでに時間がかかることもあるが、その場だけの行動ではなく、児童がその後も継続して改善していこうとする姿勢をもつためにも大切だと考えている。そのため、児童にも納得がいかないときはきちんと伝えようということを話している。

また、児童から話を聞くことで、話し合っている内容と直接関係ないことでも、児童が感じていることを知ることができたり、こちらが気づくことができていなかった児童の側面を知ることができたりすることがある。

## 2 成果及び課題

少しずつではあるが、日々の言動や取組に対して児童の意識が高まってきたように思う。また、学校でのことや家庭でのことなど、それまであまり話さなかった児童もたくさん話してくれるようになった。児童との距離が近くなり、お互いの信頼感が強まってきたように感じる。

行っていることは、本当に当たり前のことであり、何一つ特別なことはないが、この当たり前のことを続けることが大切だと自分に言い聞かせている。

まだまだうまくいかないことが多いし、すぐに成果が上がる取組ではないが、これからも児童一人一人に目を向けてお互いの思いを伝え合いながら、取り組んでいきたい。

## 3 その他参考となる事項

十津川村立平谷小学校ホームページ <http://www.totsukawa-nara.ed.jp/~hira-e>



## 1 実践内容

自ら学び自ら考える力を育成するとともに、全国学力・学習状況調査の結果に現れた本県の児童・生徒の傾向（学習を大切だとは思っているが、好きだとは思っていない）を改善するため、下の3つの具体的目標を定め、第6学年の国語科、社会科、算数科、理科を通して実践を行った。



- 1 教材を開発する際は、地域の特色を最大限に生かし、児童の生活や経験との関連を図る。また、PISA型「読解力」を基幹学力の一つとして指向する。
- 2 新学習指導要領の内容や改善事項を実際の指導で具体化させる。また、知識を詰め込むのではなく、自ら学び自ら考える力を育成する指導法の在り方を追求する。
- 3 開発する診断テストは指導と一体化したものとし、根拠をもって自分の考えを述べる問題を多く取り入れる。結果は観点別に集計し、定着度や習熟度を調べる。

### (1) 墓誌の解読から歴史物語の創作、『万葉集』の鑑賞へ

近隣で出土した奈良時代の役人、小治田朝臣安万侶（以下、安万侶 \*1）の墓誌を社会科の教材に取り上げ、そこに書かれた文字から安万侶の住所（右京三条二坊）や官位（従四位下）、死亡年月日（神亀6年2月9日）を読み取った。これをきっかけに児童は平城京や当時の人々の暮らし、官位や年収といったものに目を向け、意欲的に追究していった。続いて、平城京の長屋王邸跡から見つかった「都祁氷室」と書かれた木簡を取り上げた。以前、校区内の住宅地を造成するときこの氷室の跡が見つかったので、当時の新聞に載った写真を手がかりに氷室があった場所を探したり、この地に氷室が作られたわけや氷の保存・運搬方法について考えさせたりした。



氷室跡を特定

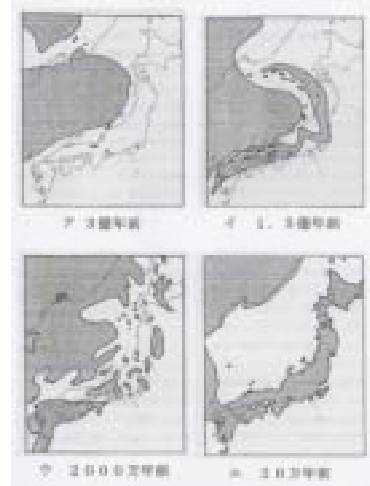
安万侶が没した日は、世に言う「長屋王の変」の前日である。しかも、安万侶と長屋王は、極めて近いところに住まいを構えていた。そこで、国語科でこの二人を主人公にした歴史物語を書いた。また、『万葉集』の中から平城京を舞台、素材にして詠まれた歌を取り上げて鑑賞したり、音読して歌の語調を味わったりした。

### (2) 化石の採集からファンタジー作文の創作へ

学校の近くには、化石が採れる露頭が何か所がある。理科で「土地のつくりと変化」を学習したときに化石を採集し、種類や名前を調べた。続いて、【この時代は、大地の動きがはげしかった。日本列島は大陸からはなれてはいたが、まだ現在のよ

して提示した。文章が「連続型テキスト」、古地図が「非連続型テキスト」であり、それらを絡めて読む力が、PISA 調査で問われている「読解力」、すなわちリーディング・リテラシー（Reading-Literacy）である。提示した資料から、吐山を含む地域に海が広がっていたのは、今から約2000万年前であることが理解された。また、「1年に1mmずつ隆起したとすると、2000万年でどれだけ隆起することになるのか。」という課題を、算数科で習得した「比」の考え方をを用いて考えさせた。本校は標高約500mに位置するので、実際の隆起速度は、それよりももっと緩やかであることが分かり、土地の変化について深く理解することにつながった。

一連の学習を国語科と関連付け、「突然2000万年前にタイムスリップした！」という題材でファンタジー作文を書いた。児童は当時の環境を調べながら、想像力豊かな作品を書き上げた。



日本列島周辺の古地図

- (3) 診断テストの開発から結果分析、フィードバックへ  
開発した4教科の診断テストを使い、毎学期末に学力の定着度や習熟度を調べた。結果は指導要録に示された各教科の観点に準じて集計、分析し、自らの指導を振り返ったりその後の指導を考えたりする際の資料とした。

## 2 成果及び課題

### 学習に対する関心や意欲が高まった

1-(1)の学習に取り組んだときに、家で『古事記』の編者、太安万侶（\*3）の墓誌を調べてくるなど、自ら課題を設定して調べたり考えたりしてくることが多くなった。これらの変容は「自ら学ぶ」学習習慣へつながるので、さらに追究していきたい。

### 思考力と表現力が伸びた

自ら学び自ら考える力を育成するための教材の開発から着手し、あらゆる学習場面で考えさせたり表現させたりしたことで、思考力や表現力が向上した。

### 評価の精度が向上し、個別支援を含めたその後の指導計画が立てやすくなった

指導計画が立てやすくなっただけでなく、児童からも「これからどこに力を入れて勉強していけばよいか分かった。」といった肯定的な反応が寄せられた。

### 児童が地域のよさを再発見した

「自分たちの住む地域は、こんなにもすばらしかったのか！」という感嘆と驚きは、児童が地域を誇りに思う気持ちとなって表れていた。郷土を誇りに思う気持ちは、我が国を愛する態度を形成する際の基盤となっていくので、各学年で意図的・計画的に養っていくべきであろう。

## 3 その他参考となる事項

- \* 1・3 小治田朝臣安万侶、太安万侶の墓誌とも、インターネット百科事典「ウィキペディア」に詳しい。
- \* 2 The Geologic Development of the Japanese Islands (築地書館1965) をもとに今西が作成

## 1 実践内容

私は、理科が好きである。身の回りのちょっとした事象や自然の変化に気付き、「あれっ？これなんだ。」「なんでこうなっているの？」と考えることは知的好奇心を大いにくすぐられる。子どもたちの知的好奇心を高めることは、子どもたちの生活自体も豊かになっていくことであり「生きる力」を育てることもつながると考え、理科好きな子どもを育てる教育活動に日々取り組んできた。



また、ここ平群はとても自然豊かな地域である。この豊かな自然環境の中で育つ子どもたちにこの豊かさを感じさせ、地球温暖化や自然環境悪化の問題に気付かせ、自分たちの生活を見直すことができる子どもたちを育てたいと理科環境の充実に取り組んできた。

### (1) 自然を見る目の育成

自然豊かな地域に住んでいるからといって、身の回りの自然事象に気付いたり、積極的に自然と触れ合ったり遊んだりする子どもが育つとは限らない。今の時代、子どもたちの興味関心は、もっと刺激的で変化が激しいテレビ番組やゲームに偏りがちである。四季の移り変わりとともにゆっくりと色や姿かたちを変えていく自然の景色や生き物の様子に目を向け、その変化に気付き、不思議だなあと感じさせるために積極的な働きかけを行ってきた。

- ・私自身が自然に関する話題をできるだけ実物とともに子どもたちに提供してきた。
- ・家の周りや登下校の途中で見つけたことや気付いたことを1分間スピーチや日直のお話のテーマにすることで、身の回りの自然の変化に気付かせてきた。
- ・自然観察をするときは、必ず観察の視点を与えて観察させてきた。
- ・実体顕微鏡や図鑑を教室に常備して、子どもたちが自由に調べられるようにしていた。

### (2) 体験学習・課題解決学習の重視

子どもたちは、実験や観察が好きである。しかし、そのことが必ずしも理科好きにつながるわけではない。実験は好きだが、結果をまとめたり、結果から分かったことを考えたりするのは苦手で、なかなか次へつながる課題を見つけることができない。そこで、学習前の子どもたちの素朴概念を引き出し、興味関心を丁寧につなぎながら、課題解決ができる理科の授業に取り組んできた。



3年の磁石の学習では、テレホンカードや回数券のカードの裏面にある『磁気に近づけないように』との注意書きに注目した子どもが、「カードに磁力があるのではないか。」と考えて強力磁石や鉄粉を使ってその考えを確かめる実験を行った。周りの

子どもたちもその実験結果に興味をもち、様々な素材を教室に持ち込んで実験に取り組む姿が見られた。

このように、実験の材料はできるだけ子どもたちの身の回りにある物から自分で集めて体験させ、自分たちの生活とつながるように心がけてきた。

### (3) 校内の理科環境の充実

本校は、平成16年度に全国小学校理科学研究大会の会場校として地域の自然環境を生かした教材の開発やエネルギー・環境教育の実践に取り組み、実践研究発表、授業公開を行った。同時に、理科大好きスクールや学力向上フロンティアスクール、またエネルギー教育実践校などの指定を受け、研究主任として理科環境の充実を図ってきた。平成16年度で実践したことをベースに、エネルギー・環境教育を総合的な学習の時間に位置付け、毎年各学年で内容の見直しをしながら、継続して取り組める内容に改善して定着を図っている。下記はこれまでに取り組んだ内容例である。

#### 3年「わくわく町たんけん」

- ・家の周りの田んぼや畑、生き物が見つかる林や公園、草むらなどの探検
- ・地域の農協の方々の協力で、平群の産業のひとつである小菊作りの作付けや収穫の体験

#### 4年「省エネ学習」

- ・エコワットを使って家庭での電力消費量を調べ、身近なところからの省エネの取組

#### 5年「竜田川たんけん」

- ・竜田川の源流探検
- ・ゲストティーチャーを招いての本流と支流での水質調査
- ・昔と今の竜田川について地域のお年寄りからの聞き取り
- ・アクリルたわしを製作して地域の方々への配布

#### 6年「地球環境学習」

- ・発電体験学習



### (4) 理科好きな教師仲間の連携と自己研修

理科好きな子どもを育てるためには理科好きな教師を増やすことも重要だと思い、理科の研修会などに積極的に仲間を誘って参加し、自己研修に励んできた。

## 2 成果及び課題

- ・子どもたちはテーマや観察の視点を与えることで、四季の変化や身の回りの自然事象の変化に気付くようになっていくが、自分の発表が終わると終わりになってしまうことが多く、気付いたことを継続して追究する活動にまで深めていくことが難しい。
- ・研究大会に向けて数多くの職員研修を積み環境整備を行ってきたことで、教師の意識も高まり実践してきたことの継続も図られてきた。今後は教師の入れ替わりも多くなることを踏まえ、より実践しやすい内容に改善しながら、地域の自然環境教育を充実させ継承し、よりたくさんの理科好きな子どもを育てていきたい。

## 3 その他参考となる事項

第37回 全国小学校理科学研究大会本校研究紀要

## 1 実践内容

本校は平成19・20年度の2か年にわたり、文部科学省による国語力向上モデル事業の指定を受け、“言葉に着目し、確かな読みの力をはぐくむ国語科学習の構築”をテーマに掲げ、国語科を中心とした実践研究に取り組んできた。特に「話す力・聞く力」を育てるということを継承し基盤にしながら、今日求められている「読む力」(読解リテラシー)を高める指導に取り組んできた。

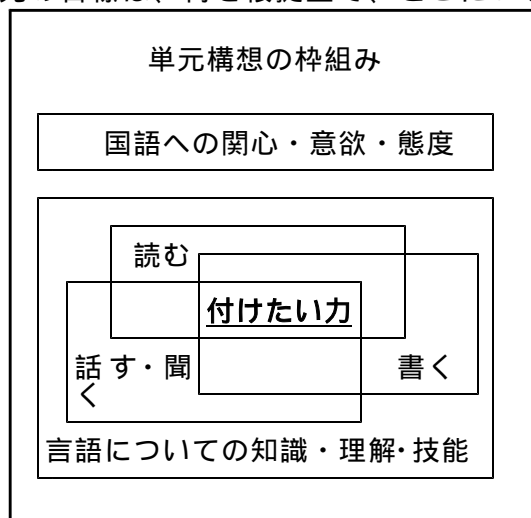


研究を進めるに当たって、「言葉や叙述を根拠に互いのとらえを出し合い深めていけば、確かな読みの力をはぐくむことにつながる」という仮説を立て、研究主題にせまる取組を進めた。以下は、今年度を含め3か年において、研究主任として校内の研究推進に努めてきた概要である。

### (1) 「當麻プラン」の創設

「當麻プラン」とは、本校独自の考えに基づいて設定した単元構想であり、国語力を高めるための理念「どの子どもにも、生きる上で人として必要である資質や能力を身に付けさせる」、内容「地域素材の教材化、他の教科等との関連を図った実践、単元開発など」、方法「子どもの学びの道筋に沿ったステージ別(3ステージ)学習指導」の3要素から成っている。これら3つの要素はこれまでの本校の実践研究の中から生み出されたもので、本校の研究成果をふまえたものであるといえる。この當麻プランに基づいた指導を展開するために、国語科を中心に他教科・領域において付けたい国語力を明確にし、国語力育成年間計画を作成し、系統立てた取組を進めてきた。

それを具現化すべく、学習指導案は、「単元の目標は、何を根拠立て、どこにつなげるのか」、「なぜ、その活動を行い、なぜ、それが必要なのか」、「なぜ、そのような方法で、何を根拠にその手立てを行うのか」を明確にし、研究主題を追究する方策がはっきりと分かるものにした。そして、先に述べた単元構想の枠組みの中央に配置した「付けたい力」を高めるために、3領域1事項をどのように関連付けて指導していくかを明らかにし取り組んできた。裏面には、児童の活動と指導者の活動を配置し、それぞれの活動が分かりやすくなるように工夫した。また、ステージ別の学習指導計画を示し、子どもと学びを築く道筋を明確にし



た。

単元名は、子どもにとってその単元での学びの道筋が分かり、関心・意欲につながるものや目指す活動の姿をイメージしたものとしました。ステージ別学習は、単元の展開を「つかむ ふかめる いかす」の3ステージに分け、子どもの学びの道筋を明らかにした。各ステージごとテーマを設定し、子どもにそれぞれのステージでの学びを意識できるようにした。ステージ(つかむ)、ステージ(ふかめる)において、言葉に着目して読みの力を高め、ステージ(いかす)では復習、確認、活用、発展などの活動を展開することにした。

## (2) 指導力の向上

研究の成果を具現化するために、学習指導すなわち授業が指導者の生命線と考え、全教員が学習公開を行い、互いの実践交流を通して、教員の指導力向上に取り組んだ。また、自身が率先して研修を進めるべく、3か年の中で計4回(国語科2回、理科2回)の主題を踏まえた学習公開を行い、校内学習研究会を活性化させた。

「学習研究会実施要項」の作成および事前配布による全体研修の活性化

「研究だより」の発行による学びの共有化

書く活動を通して主体的に読む力を付ける、交流を大切にしながら日々の学習

## (3) 言語環境の充実

言葉によりどころを求めた学習を進める上では、言葉が広がり語彙の拡充を図る活動が大切である。言葉が理解できる段階から活用できる段階へと進むように、言語環境の充実を図ることが重要であると考え取組を進めた。



音読集会：各学年ごとの発達段階に応じた詩や物語などを発表することで、相手意識をもって一つ一つの言葉を大切にしながら発声

教室環境と校内掲示：全教室に、発達段階に応じて話型表と声のボリューム表の掲示

読書環境の充実：朝の読書タイム・読書通帳の活用による読書活動の推進

国語辞典の活用：「いつも机の上に」を合言葉に、全学年で、あらゆる学習において活用

## 2 成果及び課題

単元の展開を3ステージに分け、ステージで、今まで学習したことを「いかす」という見通しをもった児童は、ステージでの読みを確かなものにしようと、意欲的、主体的に取り組むようになった。また、文章の意味内容を論理的にとらえ、筋道立てて考える力が高まってきた。そして、発表の際に、「～(だ)から」と理由や根拠を明らかにして発言させることにより、自分の読みや考えを根拠立てて、相手に分かりやすく説明しようとする児童が増えてきた。

今後は、中心発問と補助発問の在り方や、互いの考えをつなげ広げたり深めたりするための効果的な発問や支援の在り方について、さらに研究を重ねる必要がある。

## 3 その他参考となる事項

葛城市立當麻小学校ホームページ

<http://www.city.katsuragi.nara.jp/academic/taima/index.html>

## 1 実践内容

### (1) はじめに

本校は、奈良市の中央部に位置し、興福寺・元興寺をはじめ古社寺や奈良公園・猿沢池等の観光名所が校区にあり、まさに『世界遺産のあるまち』である。そのため、学校付近を散策する人が多く、海外からの観光客も数多く見られる。また、明治5年に開校したという古い歴史をもち、地域の人々の多くが代々本校の卒業生であることから、愛校心が強く、学校教育に対して関心が高く、教育活動にも協力的である。



生徒指導上の問題点としては、駅が近いということから通勤や通学の自転車の往来が激しく、子どもたちはその間を縫うように登校している状況が挙げられる。また、昨今本校においても子どもを取り巻く環境が以前とは異なってきたり、保護者や子どもの考え方が多様化してきている。

そこで、子どもたちが安全で規律正しい学校生活が送れるよう、校内外で様々な生徒指導の取組を行っている。特に、校内においては、教職員による生徒指導体制の充実と強化を図り、校外においては、保護者や地域との連携を図る取組を行っている。

具体的な実践例は、以下のとおりである。

### (2) 機能的な生徒指導部会の開催

校内では、まず、機能的な生徒指導部会の開催である。これは、月に一度の定例会で各学年からの生徒指導に関する報告と校内全体で気になることを出し合うもので、例えば、廊下や階段の歩行が乱れたりすると、話の流れやポイントを出し合い、どこに問題があるかを子どもに気づかせるスライドを全校朝礼で流すなどしている。



次に、一人一人が規律ある生活を送るために、『椿井っ子のきまり』を配布している。これは、子どもや保護者に対して、全教職員が一致した見解をもち、校内での生活指導を行うためのものである。廊下歩行や挨拶、掃除の徹底については、一度話したことだから大丈夫というのではなく、形態を変えながら意図的に繰り返し指導を行っている。

今年度は、挨拶・安全・清掃の3点を重点指導目標として設定し、年間指導計画に組み込むなど校内全体で取り組んでいるところである。

### (3) 椿井小学校区子育てネットワークの活動

校外においては、各種団体から構成する『椿井小学校区子育てネットワーク』が存在する。活動内容としては、まず登下校時の安全指導や青色パトロール巡回、生活安全教室の開催などが挙げられる。これは、子どもの健全育成や地域の安全を守るためのものであるが、定期的な活動と同時に情報交換会も行っている。

それから、折り紙教室やふれあい音楽活動のように、子どもと高齢者とのふれあい

の場を設けている。この活動は、高齢者の方々に喜ばれており、子どもたちも高齢者とふれあう中で関わり合う力を高めている。このほかにも地域に貢献していただける人材を活用した行事も開催している。

このネットワークは本校に事務局を設置し活動の拠点としている。担当としては、行事の企画・立案や諸団体との連絡・調整を行うなど、行事が円滑に進むよう支援している。また、行事や取組の様子を『ネットワーク情報紙』としてタイムリーにまとめ、学校のみならず校区の幼稚園や自治会、中学校区の少年指導協議会にも配布するなどの広報活動も行っている。何より大切にしているのは、定例会や青パト巡回後の情報交換の場の設定である。



## 2 成果及び課題

校内では、生徒指導部会で出た意見を総括して全体指導をしたり、時季に合わせた指導をしたりして、「先手を打つ生徒指導」を行っている。また、朝から安全指導をしてくださっているPTAの方などから、「このごろ子どもたちの挨拶に元気がないように思えます。」という声を聞けば、すぐに全校朝の会で話をするなど、「活きた生徒指導」を行える体制ができています。教職員も何かあれば機敏に動いてくれています。

子育てネットワークにおいては、見守り活動を通して地域の安心・安全が保持され、また、折り紙教室や音楽活動などで高齢者の方々が子どもとふれあうことが大変喜ばれ、感謝されている。それに、地域の方々の愛校心が子どもたちの自尊感情の育成につながり、その結果「奈良を愛する」子どもたちが育っていることも実感できる。

今後、ホームページを通して取組の公開を行い、家庭や地域の理解と協力をさらに得ることも大切であると考えます。また、商業地の中に位置する本校では、不審者の侵入も起こりえることから、その発生時に教職員全員が落ち着いて対応できることがこれまで以上に重要であると思われる。近年問題化してきている「ケータイの問題点」についても保護者からアンケートを採り、それをもとに職員研修を実施し、学級懇談会やPTA新聞で啓発するなど、身近な問題として取り上げていくようにする。

最後に、春期休業時に『子ども安全の家』の旗を交換に行った時の事。子育てネットワークの方が、「地域の方から旗をつけてもらい助かったということを知り、すぐに先生だなど気づきましたよ。」と話された。この時、地道な活動ではあるが、日々の取組が理解されていること、それと同時に、人と人がつながっていくことの大切さを改めて実感した。

この取組は、一朝一夕にまた学校だけで到底できるものではない。学校や家庭・地域のそれぞれがもつ力を出し合い、作り上げていくことが大切である。学校や家庭・地域が子どもたちを育てていくという取組が、子どもたちの自尊感情の育成につながり、将来子どもたちが地域に貢献していくというよりよい循環がなされることを強く願っている。今後とも、学校と家庭・地域を結ぶ、さらなる三位一体のネットワークの構築を推し進めていきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立椿井小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/tsubai-e/>



## 1 実践内容

### (1) 私にとっての生徒指導

平成8年より奈良県小学校生徒指導研究会の事務局員として現在に至る。その中でも平成14・15年度は事務局次長として、また平成16・17年度は事務局長として、会の運営に携わってきた。事務局の活動を通して、学校教育における生徒指導の重要性は極めて高いと考えるようになった。



そこで小学校の学級担任として、私のクラスを日々の生徒指導及び教育実践の基盤とし、学級活動から学校全体へと発信するボトムアップ型の生徒指導を実践したいと考える。

学級からの発信「廊下歩行推進ポスター」

6年生の学級担任をしていたとき、「私たちの学校の課題は何だろうか。」とクラスの児童に投げかけ、話し合った。すると、「廊下は右側を歩こうという学校の約束があるにもかかわらず、守っていないことが多い。」という自らをふりかえった意見が返ってきた。では、最高学年である6年生として学校の約束を全校児童が守るように何ができるかと考えさせた。いくつかの意見の中から、合い言葉や標語を取り入れたポスターを書き、下級生に促そうということに決まった。日々の反省をもとに、我がクラスから学校をより良くしていこうという取組ができたことがうれしいことであった。

更に、そのポスターを見た1年生が同じように廊下歩行についてのポスターを作り、廊下掲示していることに大変感動した。6年生の児童による発信が、1年生にも伝わり、学校全体への意識づけへと発展したと感じた。

全校あげての活動「あいさつ標語をつくろう」

これは、前任校でのあいさつができる児童を育てようとした取組である。あいさつの大切さ、あいさつを交わすことから始まる心の交流について、全校朝礼で児童に話をした。この考えを児童の間に浸透させ、あいさつがいっぱいの学校にしたいと考えた。そこで、全校児童からあいさつ標語を募集し、いつも目につくところに掲げておくことで意識の持続をさせようとした。



各学年から成る生徒指導部担当教員との公平な選考のもと、数百点の応募より低学年から1点、高学年から1点、合計2点を選んだ。6学年の様々な発達段階にあるどの児童にもわかりやすく覚えやすいようにと、2点を選定した。決定した標語は耐水・耐久性のあるテント用シートに印字し、全校児童が登下校時に毎日必ず通

る場所、昇降口に掲げた。

趣旨説明から提案、標語募集、集約、選定と半年におよぶ学校あいさつ標語板の設置活動であったが、ここに至るには校内生徒指導部教員はもちろん、校長先生や教頭先生からのご指導ご協力もたくさんいただいた。教職員、全校児童があいさつについて考え、意識した半年間であったことの意味は大きいと考える。

## 2 成果及び課題

廊下歩行推進ポスターにおいても、あいさつ標語においても、その活動中は学校全体が良い方向に動いていた。しかし、時間と共に意識は薄れていった。一過性のもので終わってしまったのである。それは、児童にとって与えられた課題だったからであろう。こう考えるようになったのは、イギリスでの研修のおかげである。現地の小学校、中等学校の授業を見せていただき、大学、オックスフォード州教育委員会の方の話を書く中で感じたことがあった。それは、イギリスでは子どもたちに自ら課題を設定し、追究していく力、解決していこうとする力を育てているということだ。これは、学ぶべき点であり、日本でも、そんな児童を育てていきたいと考える。



児童の実態に即して、教員側から指示や指導を展開するトップダウン型生徒指導も必要であり、もちろん大切である。しかし、それと同時に、児童の心に投げかけ、子どもたちの方から自分たちの学校をより良くしていこうと行動を起こすボトムアップ型の生徒指導が、これから生かされるべきだと思う。

一児童や一学級からの発信で学校が活性化したとき、それを経験した児童や学級は、その成功体験を基に、より質の高い集団をつくっていこうと努力するであろう。やって良かったと思える成功体験をひとつでも多く児童に体験させ、自ら全体に働きかけることのできる児童を育てることが、今後の課題であると考えます。

## 3 その他参考となる事項

平成19年度 教職員等中央研修 報告書

平成20年度 教育課題研修指導者海外派遣プログラム 報告書

同上 「実例から学ぶいじめ対応事例集」 奈良県教育委員会

平成21年度 研修講座「いじめを許さない子どもを育てる生徒指導」

教育研究所講師資料

同上 研修講座「いじめの早期発見と対応」安堵町教育委員会講師資料

## 1 実践内容

私が本校に赴任したのは3年前。そこで私が目にしたのは、学校の“荒れ”や“揺れ”であった。何人かの子どもたちは、ストレスを周りへの反抗的な態度（授業妨害、授業中の校内徘徊、教師への暴言、極端な甘え等）で発散していた。



翌年、私は生徒指導と人権推進を担当することとなったが、この年は多数の異動で教員の半数が入替わったため、児童・教員の双方が戸惑い、学年、教科によっては授業の成立も難しい状況からのスタートとなった。私は、まずは荒れている子どもたちやその保護者との関係作りが大切だと考えた。そこで、学校内では可能な限り彼らの側に寄り添うように努めた。彼らの生活環境を理解し保護者や地域との関係作りをするためにも、毎朝地域に足を運び、挨拶を交わしたり起床や登校を促したりし続けた。はじめのころは、教師を拒絶し、暴言を吐いていた子どもたちが、徐々に自分の家庭のことや思っていることを出すようになった。そして保護者の口からも日々の生活や子育ての中で抱えている悩みや厳しさがぼつりぼつりと語られ始め、それらはまさに子どもたちの状況と重なり合うものであった。

また一方で、彼らの『基礎学力が定着していない』ことが徐々に浮き彫りになってきた。「勉強わかりたい」という思いをもっている、授業に集中できない、教科書を読んでも理解できないといういらだちを抱えていた。彼らは、周りに当たり散らしたり、追いかけてもらうことを楽しんだりしながら、「こっちを向いて、ボクを認めて」と必死で訴えていたのである。周りの目に「困った子」として映る子どもたちは、実は「困っている子」たちだったのである。

私は、彼ら一人一人の困っている問題に耳を傾け、全てを丸ごと受け止めた上で、『あかんことはアカン!』と徹底して理解させたかった。それと同時に、彼らにもっと基礎学力を、そして精神面では、自信や自尊感情をつけてやる必要性を感じた。

そんな願いを軸に、生徒指導部が中心となって話し合いを進め、「教職員が一丸となって子どもたちと向き合う」べく以下のような確認と取組を行った。

### 【基本方針】

基本的な生活習慣の定着 悩みを出し合える職場作り 共通理解にもとづく全職員による一致団結した指導 複数体制での児童の指導や保護者への対応 家庭訪問の重視

### 【具体的な取り組み】

地域への発信－学校の中で起こっていること、目指していることをオープンにし、学校便り・授業参観（2週間のフリー参観）・地区別懇談会等で学校の様子を伝え、日頃から感じておられることを聞き、今後につなげる。 積極的かつ迅速な家庭訪問 チャイム着席を促す全職員の声かけ 幼・保・中との連携・情報交換（町人教・ふれあい連絡会等） ようこそ先輩（子どもたちに自信と誇りをもってもらおうと、本校出身で、中学校や地域のクラブで活躍している先輩たちを紹介している。

子どもたちも毎回楽しみにし、食い入るように記事等を見ている。) ゲストティ  
チャーによる授業(本物に出会う) 中学校の先生による出前授業(3学期)

自尊感情を高める取組

- ・教材を使って(こころをあたためる取り組み)
- ・身体を動かす(通学路の清掃) 綺麗になった喜び・みんなで一つになってやり  
遂げた達成感 地域の人から褒められた嬉しさ 自分のやったことがみんなの役に立  
って認めてもらえる、自信につながる 「次は何をやってみよう」という意識付け。  
(「足おれ坂」の清掃等)

地域のお年寄りの施設や福祉作業所等の交流 自分の何気ない行動が人から感謝さ  
れる喜び。新しい自分の発見。(自分が認められた喜び)〔「西っ子大会」 あたた  
かい言葉のシャワー 規範意識の重視 聴く力・話す力の育成

学力向上の取組(学習意欲・興味関心を基盤とした自学自習力を育成する取組)

- ・学力実態の適切な把握 ・授業改革 ・学習意欲を高める ・学習内容の習熟と定  
着 ・学習集団づくり ・弾力的な指導体制 ・家庭学習習慣の定着 1学期の  
家庭訪問時に、各学年ごとの「家庭学習のてびき」を配布し、家庭学習についての学  
校の考え方をしめす。

基本的な生活習慣の定着をめざす みんなが楽しい学校生活を送れるように学  
習と決まりをまとめた『西っ子の学校生活』(職員で話し合いを重ね冊子にまとめた)  
を今年度作成し、家庭訪問時に、1つ1つ丁寧に説明し、理解と協力を求めた。

## 2 成果及び課題

前年度当初には、職員の誰もが戸惑い、不安な中でスタートした本校であったが、教  
職員が一丸となって子どもたちと真剣に向き合い、地域や保護者とも手を携えながら粘  
り強い取組を続けてきた。その結果、現在は随分と落ち着きを取り戻し、チャイムを守  
って行動したり、全校朝会や集会などでの聞く態度もよくなってきた。

また、地域に足をはこぶ中で「毎朝、ごくろうさん」「だいが落ち着いてきましたね」  
「何かお手伝いができることがあればいつでも言ってきて下さい」等の声かけをして  
もらえることも多くなった。信頼をしてもらっているという実感がもてるようになった。

しかしながら、子どもたちのもつ「育ちや生活のしんどさ」や「低学力」は今も変わ  
りはない。我々教師側には、ここでふんばらないとまた元に戻るのではないかという不  
安が、いつも心のどこかにある。

ただ、明らかに今までと違うことは、教職員一人一人に、余裕と笑顔が見られるとい  
うことである。私たちは、「子どもをなんとかしたい」ということでつながっている。  
そして、「子どもたちが元気になるということは、教職員が元気になるということだ」  
と実感している。今後も様々な活動にじっくり取組、子どもたちの生き生きとした笑顔  
をたくさん見られるように努力したい。

## 1 実践内容

### (1) はじめに

近年、本校でも人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の体得が不十分であったりする児童が少ない。とくに、異年齢間のつながりが弱く、地域では異年齢同士で遊んでいる姿はほとんど見られない。そこで、望ましい人間関係を築く態度を形成し、多様な他者と協力してよりよい生活を築くことができるようにするために、特別活動は大きな役割を担うものであると考える。特別活動は、各教科や道徳の学習と違って、児童会活動、クラブ活動及び学校行事のように異年齢集団で行われる活動である。



なかでも、毎学期1回程度行っている児童会集会活動は、とても児童が楽しみにしている活動である。児童会集会活動をより楽しく豊かなものにするために児童の発想や想像を生かし、自主的、自発的な活動を大切にしてきた。そして、学年や学級の異なる他者と楽しく触れ合い、交流を図ることによって、望ましい人間関係が深まると考える。そのことが、児童の学校生活の充実と向上につながっていくものと考えて、本テーマを設定し取り組んだ。

### (2) 活動の実際

#### 活動名

- ・「斑小まつり 2008」

#### ねらい

- ・異学年とのつながりを深め、互いに協力し合って、楽しい集会にする。
- ・全校児童がゲームや遊びを一緒にすることにより、本校児童としての所属感や連帯感を高める。

#### 経過

- ・児童会だよりを発行

「今年の斑小まつりをどんなものにするのか。」「委員会はそれぞれにどんな内容のお店を出すのか。」を呼びかける児童会だよりを発行し、斑小まつりについて、各クラスや委員会に知らせていった。(お店...各委員会が行うゲームや遊び)

- ・代表委員会の開催

代表委員会では「斑小まつり2008」の名前や全校児童が行う3つのゲーム(先生探してゲーム、宝さがしゲーム、ジャンボジャンケンゲーム)が決まった。また、各委員会のお店の出店計画も提案され、委員会間の調整も行った。

#### 当日の活動

活動の内容	指導上の留意点
児童会はじめの言葉 校長先生の言葉	・目的を確かめて、楽しく過ごせるような会にするように呼びかける。

やくそく（注意事項）	・みんなが気持ちよく、楽しく過ごすための約束を確認する。
各委員会のお店	・5、6年生で、前半に委員会のお店を担当する人は場所に移動する。
先生探してゲーム	・児童グループ確認後、移動する。
宝さがしゲーム	・曲が流れると、委員会の仕事の前半担当と後半担当が交代をする。
ジャンボジャンケン大会	・曲が流れると体育館に集合する。
表彰式	・「先生探してゲーム」と「宝さがしゲーム」のポイント合計の表彰と「ジャンボジャンケン大会」の表彰を行う。
終わりの言葉	・集会在全校のみんなで行った楽しい会に出来たことを喜び合い、今後の学校生活につながる内容にする。

#### 事後の指導

「めあては達成できたか」「他の学年のよさは」等、集会の感想を出し合って、次回の集会につなげられるように、振り返りをする。

#### 評価の観点

- ・低学年の子と高学年の子が、仲良くクイズに答えたりゲームを楽しんだりして、親睦をいっそう深めることができたか。
- ・全校児童が楽しめるように、様々な工夫で自分たちの委員会のお店を盛り上げることができ、自分たちも喜びを感じ取れたか。

## 2 成果及び課題

子どもたちは、まだまだ遊び足りないという顔で表彰式が行われる体育館に戻ってきた。表彰式は大きな拍手とため息の中で行われた。閉会式を終えて、それぞれの教室に帰っていく児童の顔は、どの子どもとてもいい笑顔であった。それまでの準備や計画の苦労が吹き飛ぶ瞬間である。それは教職員だけでなく、中心となって進めてきた児童会のメンバーや各お店を担当し、様々な方法で盛り上げてくれた委員会の高学年の児童も同じであろう。自



先生探してゲーム

発的、積極的な取組を通して、一人一人の児童が自信をもち、やりとげた後の充実感を味わうことができたと思う。そのことが次への意欲につながり自主的、自発的な活動をより促してくれると期待している。児童の大好きな集会活動であるので、活動自体に労力や時間を奪われがちであるが、むしろ集会に至るまでの話し合い活動や協力して実現しようとする過程を大切にしたり、集会を通して感じたり気付いたりしたことを振り返り、言葉でまとめたり発表したりする活動を重視していかなくてはならない。

また、異年齢集団の活動を意図的に多く取り入れ、展開したことによって、高学年が低学年を思いやり、低学年が「あんな高学年になりたい。」と思うようなあこがれをもち、仲よく、協力し、信頼し支え合う人間関係を形成する一助になったと思われる。

さらに、高学年は学校のリーダーとしての意識が高まり、低学年は協力し楽しもうとする所属感や連帯感が高まってきたと思う。今後も、児童が児童会活動をいっそう充実、発展させて、学校集団としての活力を高めていけるように、我々教職員は、適切な支援や環境を整えて行かなくてはならないと考える。

## 3 その他の参考となる事項

斑鳩町立斑鳩小学校ホームページ <http://ikaruga.kir.jp/>

## 1 実践内容

高学年はそれまでの多様な集団活動の経験や成長から、成果や反省を生かして効率的に活動していくことができる時期である。しかし、集団の中での自分のあり方に不安をもち、自分のよさを生かして活動することがうまく機能しない面も見られる。また、学級活動においては自分たちで企画・運営して活動していく楽しさを味わっているが、楽しい学校づくりの視点や豊かな人間関係を築くまでには至っていない。これらをふまえ、中学年までの学級活動で得た経験を基盤とし、信頼し支え合う人間関係づくりや楽しい学級・学校づくりを目指し、本実践に取り組んだ。



(1) 年間を見通し、児童の実態を考えた学級活動年間指導計画の作成

(2) 互いに尊重し、よさを認め合える人間関係を築く活動の設定

学級のめあてを設定する

4月当初、昨年度の反省を基に、最高学年としての自覚がもてるよう自分たちの願いを出し合いながら話し合い「あいさついっぱい、明るく楽しく人の心が分かる仲のよい6A！自覚、責任、自信を持って活動しよう！」と決定した。

めあての実現に向けて活動する

係活動や学級集会、ごみ拾いのボランティア活動といった学級内の活動だけでなく、児童会活動（1年生と遊ぼう会、あいさつ運動、運動会のスローガン、色旗決定）や学校行事（入学式、運動会）、4色縦割りカラフルタイムの計画など学校全体に関わる様々な活動を通してめあての実現を図った。

(3) 家庭との連携を図る

児童の活動の経過並びに様子や成果を、学級便りを活用して保護者に伝えた。また、保護者からの感想や意見等から学級・学校に対する思いを知り、それらに対して学級集団としてできることを考え、実践し「保護者との絆」を大切にした。

(4) 児童の活動への評価

活動後に、アンケートや日記、一言感想等を書かせることで自分の役割やめあての達成度を自覚させ、次の活動に生かしていけるよう指導助言した。また、学級便りを活用し、保護者から温かい励ましの言葉等をもらうことで一層意欲が高まった。



(5) 学級活動の実際（第6学年）

議題 「学校に残せる志都美小学校の紹介DVD作りの計画を立てよう」

議題設定までの経過（略）

本時のねらい

- ・新1年生たちのことを中心に考えて、志都美小学校のよさを感じてもらえるようなDVDの内容を考え、計画を立てることができる。

- ・自分の意見と比べながら友達の意見を聞いたり、話したりすることができる。

#### 展開

議 題	学校に残せる志都美小学校の紹介DVD作りの計画を立てよう
提案理由	在校生だけでなく来春入学してくる新1年生やその保護者の方々にも、志都美小学校のよさをアピールしたい。そして、このDVDを見て、志都美小学校はいい学校だなあと、安心感をもってもらいたい。また、自分たちが卒業してもずっと活用してほしいと思ったから。
役 割	司会・・・1名 副司会・・・1名 黒板記録・・・2名 ノート記録・・・1名
話 合 い の 順 序	気 を つ け る こ と
1. はじめのことば 2. 学級の歌 3. 司会グループの紹介 4. 議題の確かめ 5. 提案理由の説明 6. 話し合いのめあてと柱の確認 7. 話し合い どんな内容にするか 役割分担 その他 8. 決まったことの発表 9. 感想、意見 10. 先生の話 11. 終わりのことば	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元気よく楽しく歌う。</li> <li>・新1年生のことを考え、志都美小学校のよさをアピールする内容のDVDを作り上げることを理解する。</li> <li>・アンケートを基にグループごとに提案し、絞っていく。</li> <li>・どんな役割が必要かを考える。</li> <li>・工夫する点があれば、共通理解する。</li> <li>・自分や友達のよいところ等を発表する。</li> </ul>

## 2 成果及び課題

話し合い後、3学期初めから撮影に入った。簡単なように思えたわずか数秒のカットもいざ実際に行ってみると思いのほか難しく、互いに励まし合い意欲を高め合う姿が見られた。さらに撮影の方法も工夫していた。編集は教員が行ったが、自分たちでできる限りのことは計画を立てて行うことができた。DVDが完成した時には大きな拍手と歓声上がり、今までの苦労をたたえ合う姿が見られた。それらを早速志都美幼稚園に届け園児に見てもらい、「とてもおもしろくて学校の中がよく分かった。」「早く1年生になりたいなあ。」等といううれしい声を聞かせてもらった。児童はその感想を聞き、大きな満足感と成就感を感じたようである。時間的なことが課題となったが、卒業までの残り少ない日々をクラスが一丸となって一つのことに取り組めたこと、愛校心を形にして自分たちの学校に残せたことは、児童のこれからの自主的自発的な活動により影響を与えるものと考えられる。



## 3 その他参考となる事項

本実践は、平成20年度近畿特別活動研究大会奈良大会(於、志都美小)での取組である。

「学級活動ってなあに - 学級活動の手引き書 - 」 奈良県小学校特別活動部会著



## 1 実践内容

特別支援学級担任として 11 年目を迎えたものの、まだまだ試行錯誤の日々である。特に近年、「障害児教育」から「特別支援教育」への転換の中、様々な発達障害からくるニーズに対応する専門性が求められている。



本校においては、特別支援学級「あゆみ学級」をはじめとし、通級指導教室「ことばの教室」「ステップ教室」がある。

この3教室が設置されているのは奈良県においては2校だけであり、毎年20数名の児童が入級または通級しているのが現状である。昨年度からは特別支援学級・通級教室の弾力的運用として、ニーズに近い児童たちについては合同の授業を行っている。具体的には感覚運動領域やSSTであり、内容によっては20人を超える集団での授業もある。また、夏休み期間中の行事や校外学習も合同で行うことがある。

上記のような取組をすすめてきている本校ではあるが、「あゆみ学級」については、障害種別、発達段階が広く、児童のニーズ、保護者の願いも多岐に渡っている。入級生の増加にともない（本年度は18名）、特別支援学級においても学級経営方針が重要となってきた。そこで数年前より下田小学校では、特別支援教育推進計画の中の重点目標として、特別支援学級あるいは担任としての研究テーマをきめ、それに沿って教育実践を展開することにより、学級経営の一つの柱としている。以下、過去の研究テーマは

- 平成 16 年度 「環境の構造化による、効果的な支援の方法について」(担任)
- 平成 17 年度 「金銭教育を中心としたかず指導について」(担任)
- 平成 18 年度 「S-S法によるコミュニケーション支援について」(担任)
- 平成 19 年度 「伝えあう、感じあう集団作りについて」(学級)
- 平成 20 年度 「伝えあう、感じあう集団作りについて」(学級)

であった。

また、研究テーマに即した公開授業を毎年、職員対象、保護者対象、PTA 特別支援教育部対象に行っている。授業公開することで児童の理解、特別支援教育への啓発の一つの手段ともしている。



(平成 17 年度公開授業)

本年度については、入級生の発達課題別のグループによる小集団学習を取り入れている。特に概ね6才以上の発達で読み書きができるグループについては、「集中トレーニングによる、聞く力、見る力、かく力の向上」を研究テーマとして、自立活動領域に位置付け、情報入力力の向上を日々の教育実践の中心において、取組をすすめているところである。今年度行っている「集中トレーニング」による指導法をうける児童の個々の課題は様々である。文字想起に課題のある児童、目と手の協応動作が未熟な児童、間違いや失敗するとくじ

けてしまう児童、数概念に課題のある児童、自己表出が苦手な児童などである。このような児童と日常生活や学習を共にする中で感じていることは、聞いてはいるけど「聞こえていない」見えてはいるけど「見えていない」状態があるということである。

「集中トレーニング」は子ども教育研究所所長 上嶋恵先生が長年の教育現場で実践された学習法である。1時間のプログラムは、姿勢の保持から始まり、数字や文字を聞いて書く、数字を追視し、つないでいくことや言葉の想起、事物の模写などである。

これらの学習は決して難しくはなく、むしろ簡単にさえうつるかもしれない。しかしこれらの学習を繰り返すこと、またバージョンアップしていくことで児童の聞く力、見る力、かく力の情報入力に効果があると考えている。

また、「集中トレーニング」は通常学級にもいさせるものであり、特別支援学級からの発信として今年度の本校最初の研究授業として行った。

## 2 成果及び課題

研究テーマを決めるうえで、一番大事なことは児童の実態と合致しているかである。児童の実態把握が正確であればあるほど、児童個々のニーズがわかり、それに伴い教師のねがいもわかあがるものだと考えている。そのような過程のなかで決定された研究テーマに沿って取り組むことは、児童の社会的自立の力を育てることに通じていると考えている。

また、実践記録をまとめ、本校の研修のまとめに寄稿することを行っている。記録をまとめることは、日々の教育活動を振りかえる上で重要なことであり、その時は気付かなかった点の発見、次年度への課題に結びつくものである。そして教師自身の専門性の向上には欠かせない手法であると考えている。加えて、研究実践を積み重ねることで、香芝市就学指導委員会専門委員・巡回相談員としてのスキルアップにつながっている。

近年、支援のいる児童の増加に伴い「特別支援教育」への期待、注目は増しているように思われる。特別支援コーディネーターを兼務する私にとって、特別支援学級生以外の児童への支援方策についての迅速な対応力も問われている。あるいは、児童の様々なニーズ・保護者のねがいに応えるため、今後、教育相談的手法の獲得、精神医学・脳科学の分野の知識の獲得が課題になってくると考えている。

## 1 実践内容

本校では、教育目標を「心身ともにたくましく、人間性豊かで国際的な視野を持つ児童を育成する」と定めており、目指す児童像を「生き生きと活動する子」としている。それを受けて、学校保健の目標を「自分の健康に関心を持ち、心身ともに健康な生活を創造していける子どもの育成」とし、小規模校の特性を生かして日々の保健活動を展開している。



### (1) 健康教育

学校生活のあらゆる場面で、健康的な生活習慣の確立を目指すべく、健康教育に取り組んでいる。学校保健安全計画に則って全校一斉の保健指導を毎月定期的に行ったり、喫煙や生活習慣病など今日的な健康課題に対応する保健指導を行っている。

全校保健指導例（21年度）

4月「元気のもとを考えよう」健康は、食事・運動・睡眠が関係していること

5月「トイレのお話」トイレの歴史や先人の知恵を知り、トイレの使い方を学ぶ

6月「朝ごはんを見直そう」朝食摂取の意味と多種の食材を取る大切さ

9月「うんこは体からのおたより」消化吸収の仕組みと排便の大切さ

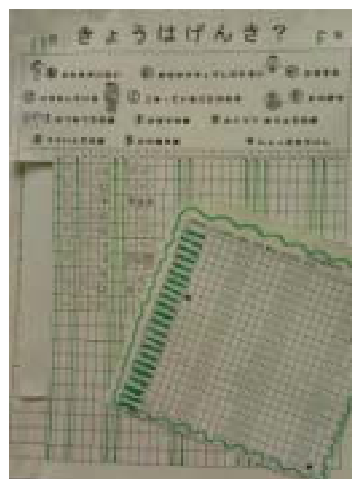
10月「新型インフルエンザに備えよう」新型インフルエンザについての基礎知識

また、兼職発令を受けて担当する保健学習の授業は、健康教育を系統的に学び、『生きる力』や『生涯にわたる健康の保持増進』の基礎づくりとして推進している。養護教諭だからこそ提供できる資料や教材を活用し、担任と連携して進めている。

### (2) 保健管理

毎朝の健康観察を充実させ、疾病異常の早期発見に努めている。保健調査票や諸検査・測定、保健室利用の様子等から児童の心身の健康状態を把握し、保護者の協力を求めながら、学級経営に活用できるよう詳細な資料提供をしている。とりわけ毎月末には保健室来室状況を提示したり、個々の児童の伝染病罹患状況を把握し資料提供するといった活動は小規模校ならではの取組である。それにより担任だけでなく全教職員が全児童の様子を把握でき、『みんなでみんなを育てよう』という本校の気風を高めている。また、健康管理に注意を要する児童のみならず全児童の健康状態について、校医や家庭と連携しながら全職員で共通理解を図っている。

健康観察表・保健室利用月報



### (3) 救急処置・救急体制

救急処置には万全を期すと共に、保健室来室児童への個別指導を行い自主的な健康管理能力を育てるように対応している。また、校内救急体制を整備し、事故を未然に

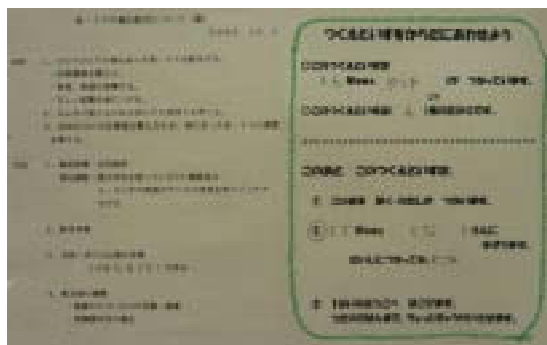
防ぐ指導と共に事故発生時には速やかに対応できるようにしている。

#### (4) 健康相談活動

来室児童の様子から心のSOSの早期発見に努めている。児童に応じて心の緊張をほぐすような対応と共感的理解に努め、担任と連携しながら児童自身の自己決定を重視した支援を心がけている。必要に応じて、医療の受診を勧めたりやスクールカウンセラーを紹介したりし、早期の解決を図れるようコーディネートしている。

#### (5) 学校安全・環境衛生

学校内外の安全については危機感を持って全職員で対応しているが、保健主事と連携しながら定期的な安全点検を徹底させ、随時、生活指導を進め安全な行動の定着を図っている。同時に、必要に応じて事故の発生場所を確認し、早急な対策を講ずるようにしている。また、学校環境衛生の基準に基づき、学校薬剤師と連携して教育環境



の保持向上に努めている。全校児童と共に一斉に行う年二回の机・椅子の高さ調整は、学習能率の向上や健康の保持増進ばかりでなく、将来の生活環境を整えていける子どもの育成も願っており、学校保健目標とするところである。このような取組は小規模校ならではの活動といえる。

机・椅子の適正配置の提案文書と児童用個票

#### (6) 情報センター的活動

学校伝染病や新興感染症の新しい情報を早期に収集し、適切な指導・措置ができるように努めている。とりわけ今年度は、新型インフルエンザに対して職員や児童・保護者の求めに応じて正しい健康知識を提供できるよう資料の整理を心がけ、ほけんだより等で情報発信をし、啓蒙と蔓延の防止に努めた。

#### (7) その他

心身の健康問題解決のために、いつでも誰でも利用できる、明るく開放的な保健室であるよう努めている。また、保健主事と協力して学校保健委員会を計画・実施し、地域や保護者と共に児童の健康安全を考える場を提供するよう努めている。同時に児童の保健活動センターとしても機能するよう心がけ、児童保健委員会活動の場として保健室を活用している。

## 2 成果及び課題

学校保健活動はその領域が非常に広範囲で、学校の職員すべてが関わり展開されるものである。そういった意味で、広い視野でものごとをよく見、確かな見通しを持った計画性と実行力が、保健室経営に求められる。児童の健康課題を明らかにし、活動の焦点を絞ってよりよい計画を立てる企画力とそれを実施していける行動力・実行力を磨き、今後も小規模校にしかできない活動を充実させていきたい。さらに「養護教諭は児童の養護を司る」と謳われていることを心に刻みつつ、次世代を担う子どもたちの命と健康を守る養護教諭を目指したい。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立並松小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/nanmatsu-e>

## 1 実践内容

私が本校に着任したのは、御杖村内の3つの小学校が御杖小学校に統合された3年目、木造の旧校舎から現代的な感覚で作られた新校舎に移転後半年目のことである。着任当時、村教委から教育のIT化試行のため、3台のノートパソコンを購入していただいていた。それを使ってパソコンの効果的な活用法を研究しながら、校内のIT環境の整備計画を立て、2年後に児童用パソコン12台を視聴覚室(AVルーム)に本格導入することができた。以来9年間、本校のIT環境の整備と情報教育の推進にあたってきた。



### (1) 伝え合える環境作り

IT環境を構築する上でまず大切にすることは、調べたことやまとめたことを伝え合える環境作りである。本校はドーム型をしており、別棟の視聴覚室も直径約12mの円形である。そこで、全てのパソコンを壁沿いに円形に配置することにした。この配置により、指導者は一目で全体を見渡すことができ、児童のパソコン利用の状況を把握できる。また、児童も互いに取り組んでいることを確かめながら作業を進めることができる。上手に作業を進めている児童に、やり方を聞いたり、感想を話したりしながら自分の作業に取り入れることができた。



また、指導者のパソコンから全てのパソコンの表示内容がチェックでき、指導者が児童のパソコンにメッセージを送ったり、特定の児童の学習内容を全児童のパソコン画面に表示したりすることで、情報を共有できるようにした。子どもたちが、調べたことをパソコンの画面上でまとめ、各パソコン端末で見てもらいながら説明を加えることで、自分の伝えたい意図をきちんと伝えることができた。

また、どのパソコンからもプロジェクトで視聴覚教室正面に映写することができる。この方法では、パソコンを使って調べたりまとめたりした内容を、ほかの学級の子どもたちに見てもらおうなど、大勢の前できちんと伝えることができた。

さらに、低中高学年教室のオープンスペースに1台ずつパソコンを設置し、視聴覚室で調べたりまとめたりした内容を、普通教室での学習や発表にも使っている。教室の近くにパソコンがあることで、休み時間中にも、調べたことを付け足したり、友達に感想を伝えたりする姿が見られるようになった。

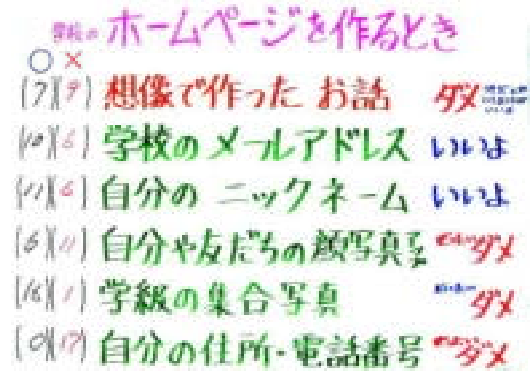
また、学校としても、ホームページを毎月一度は更新して、学校の取組や学校だより、毎月の予定、行事の様子など、情報発信に努めている。

### (2) 安全なパソコン利用

2番目に大切にすることは、安全である。児童は、「スタディノート」を用いて、調

べたことをまとめた。このソフトは自分がまとめたことを校内のパソコンに公開することができる。また、ホームページ形式での保存もでき、学校ホームページのコーナーに各自の調べ学習を掲載することができた。掲載の前には情報発信について学習し、著作権のルールや情報を提供していただいた先の明示、個人の住所氏名やはっきり分かる顔写真の禁止など、情報を発信するときの約束を理解できた。

また、「スタディノート」のメール機能により、各児童に校内のメールアドレスが与えられる。公開された学習内容を見て、感想や意見、情報等を公開した児童にメールとして送ることができ、互いにたくさんの感想メールをやり取りできた。



メールは、校外には指導者の許可のもと、発信することができる。隣村の曾爾村立曾爾小学校との交流会の前後には、各自がメールで自己紹介や感想を発信し交流することができた。メール利用の前には、メールの基本的なマナーや約束、一般のインターネットのメールでの問題点などを学習し、個人情報の大切さやメールを利用する際の注意点を理解することができた。

さらに学校全体でも、県の指針を参考に「インターネットの教育利用に関するガイドライン」をまとめ、共通理解のもとに情報教育を推進している。

## 2 成果及び課題

こうした環境整備の結果、総合的な学習の時間や社会、理科、算数、国語、音楽、体育など、ほとんど全ての教科や学習場面でパソコンを利用して学習を進めることができるようになってきている。また、視聴覚室だけでなく、普通教室でも、2台のプロジェクタや3台の新しいノートパソコンが活躍し、黒板とチョークの授業から新しい教育機器を用いた授業への移行が進みつつある。

一方で、子どもたちのパソコン利用時間が少しずつ減ってきている。少し前までは、総合的な学習の時間のうち週1時間をパソコン利用にあて、児童は、調べたことをまとめながらパソコンの操作方法を学ぶことができた。本校では、4年前から週1時間の外国語教育が始まった。そのため、総合的な学習の時間でのパソコンの利用の時間がかなり少なくなっている。各教科での利用方法の開発と利用の促進に努めていきたい。

また、各指導者のコンピュタリテラシーにまだまだ差があるのも現実である。ほとんどの教職員が、児童に提示する資料や映像をパソコンで自由に作ることができるようになってきている。今後さらに、学習のまとめを児童が作成する場面など、児童の主体的な利用に対して教職員が支援できる力量を備えられるよう、校内研修の機会を提案していきたい。

## 3 その他参考となる事項

御杖小学校ホームページ <http://www.vill.mitsue.nara.jp/mitsuesyo/index.htm>

御杖小学校メールアドレス [mitsuesyo@vill.mitsue.nara.jp](mailto:mitsuesyo@vill.mitsue.nara.jp)

## 1 実践内容

本校は、平成17年度から平成19年度の3年間、文部科学省の学力向上拠点形成事業の指定を受け、「豊かな学びをはぐくむ授業の創造」を研究主題に取組を進めてきた。教材や資料の提示用として、また、子どもたちのコミュニケーションの手段のひとつとして、電子黒板（ユニット型）を導入した。

また、平成19年度、五條市内のパソコンを入れ替える際に、市内の9小学校に1台ずつ電子黒板（ボード型）が導入された。これらの電子黒板を有効に活用できるように実践をしてきた。

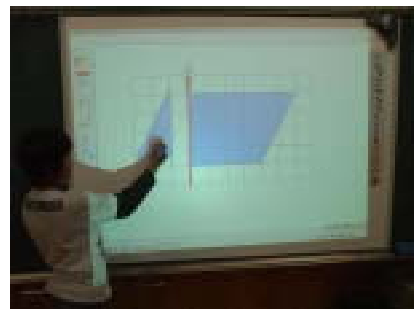


(実践例)

### (1) 自分の考えを説明する教具として（算数科 5年 図形の面積）

図形の単元は、電子黒板が有効に使える場面のひとつである。図形の面積では、子どもたちが具体物を使って考えた三角形や平行四辺形等の面積の求め方を電子黒板を用いて説明させた。自分たちが考えた求め方を図形に書き込み、分かりやすく説明することができた。実際に行った作業を視覚的に表現できることは、聞き手にとっても分かりやすかったようである。

最近は、ソフトも充実してきて、電子黒板上の図形を思った場所で切り離して移動することができ、子どもたちが、具体物を使って考えたことを再現しながら説明することができた。



### (2) デジタル教材を活用して（理科 5年 メダカの誕生）

メダカの誕生の単元では、メダカのオスとメスの見分け方をデジタル教材を活用して学習した。実際のメダカを観察しても動きが速くじっくり観察がしにくく、オスとメスの違いを見つけることは困難である。テレビ番組では、子どもたちが違いを見つける前に先に違いを言ってしまうことがある。また、テレビ番組をビデオに撮って静止させたとしてもその画面に何も書きこむことができない。電子黒板とデジタル教材を使えば、思うところで画面を止めることもでき、その画面に違いを書き込むこともできる。子どもたちが、画面に描き込みながらオスとメスの違いについて話し合いができた。

### (3) 前時の授業を生かして（算数科 6年 分数のわり算）

電子黒板は書き込んだりした画面が保存できる。この機能を活用することで、今まではできなかった前時の板書等を再度提示することができるようになる。

分数のわり算の授業では、分数÷単位分数で学習したことを、分数÷分数の学習で生かすために前時の学習内容を再提示し確認した。こうして既習事項を確認することで、子どもたちの学びが深まった。

#### (4) その他の場面での活用

上記のような活用のほかにも、さまざまな場面で活用している。

- ・教科書をスキャナで取り込んで、大型の教科書としての活用

いちばん簡単な方法での電子黒板の活用方法であると思う。子どもたちが電子黒板に考えを書き込みながら授業を進めることができた。教材を自作する必要もなく、準備も最小限ですみ、効果的であった。



- ・習字の手本の提示や運筆の確認（教科書会社のCD活用）

手本を拡大表示し気をつけることを書き込んだり、運筆の動画を見せたりして、注意することなどを確認することができた。

- ・英語ノートのデジタル教材の活用

英語ノートのデジタル教材を使うことで、音声だけでなく、視覚的にもとらえさせることができ、体全体で外国のことを感じるすることができた。また、電子黒板に書き込む作業を入れることで、積極的に発表できるようになった。

## 2 成果及び課題

電子黒板は、資料の提示がスムーズにでき、その資料に書き込み等ができるため、子どもたちが自分の考えを説明するときにも効果的に活用できた。提示されている図や写真等に考えを書きこみながら説明するので、聞き手にとっても相手の考えを理解しやすかったようである。また、デジタル教材と併用することにより、静止画だけでなく、動画を見せることができ、その動画を止めて書き込みをしながら説明できたことで、子どもたちの理解をさらに深めることができた。板書が保存でき、必要なときにいつでも呼び出して使うことができることも既習事項を確認する上で有効であった。

何より、子どもたちの学習意欲が高まったことが、一番の収穫と言ってよい。電子黒板がめずらしいということも手伝って、普段は、あまり発表をしない児童が積極的に授業に参加できるようになった。今後は、この意欲を継続させることが大切で、より分かりやすい授業の創造をめざしたい。

ただ、学びの主体は子どもたちであり、電子黒板は子どもたちの理解を深めるための補助的なものに過ぎない。そのことを忘れることなく、今後も、子どもたちが主体的に学べるように、電子黒板のあり方を考え、工夫して活用していく必要がある。

また、電子黒板と聞くと、それだけで難しそう敬遠してしまう先生方もいるだろう。実際、セッティング等には少し時間が掛かり大変なところもある。本校では、専用の教室をつくり、その部屋に行けばすぐに使えるように環境を整えた。少しでも、気軽に使えるような環境づくりも、今後の課題である。

電子黒板の活用については、今後も研修を重ね、本校の先生方、また、これから導入する学校へ広めていければと考えている。

## 3 その他参考となる事項

五條市立阪合部小学校ホームページ [www.gojo-nar.ed.jp/sakasho/web\\_sakasho/](http://www.gojo-nar.ed.jp/sakasho/web_sakasho/)



## 1 実践内容

### (1) はじめに

「5つの都南力（子ども力、親力、地域力、学校力・教師力、教育行政力）で夢共育に挑む」をビジョンに掲げ、学力向上研究実践推進事業、学校支援地域本部事業、コミュニティ・スクール推進事業等を活用し、自校がもつ教育課題や「弱み」の改善方策として研究や実践を進めている。



現在、本校では頻発する問題行動、低学力傾向、規律性に乏しい様子などは連綿として断ち切れていない状況である。そこで、過去の教育実践を大切にしながら、自校の真の課題を探求し改善するために、地域とともに発展する学校を創る必要がある。そのためには、新しいタイプの学校運営の仕組みを取り入れることが不可欠である。

その一つの方法として、平成16年6月に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正されて誕生したコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入するための研究に取り組んだ。ここでは、保護者や地域の代表者と学校が組織をつくり、その方々の声を学校運営に直接反映させ、地域住民、保護者等が教育委員会、校長と責任を分かち合いながら一体となって学校運営に携わっていくことができる。さらに、地域に開かれ、地域に支えられるよりよい学校づくりと「夢共育」を目指している。

### (2) 取組の概要

#### 研究課題

コミュニティ・スクールの目的や役割をふまえた学校のありかた。

- ・推進委員会組織や人材の効果的な活用と体制づくり。
- ・学校支援地域本部事業推進委員会との連携、協働による学校づくりの推進。
- 「5つの都南力」の評価と分析を基にした学校経営。
- ・推進委員からの意見聴取。学校評価のためのアンケート等の実施。
- ・学校評価を適切に用いて評価を行う。

子どもの健やかな成長と夢と希望を実現する「学校力」の向上。

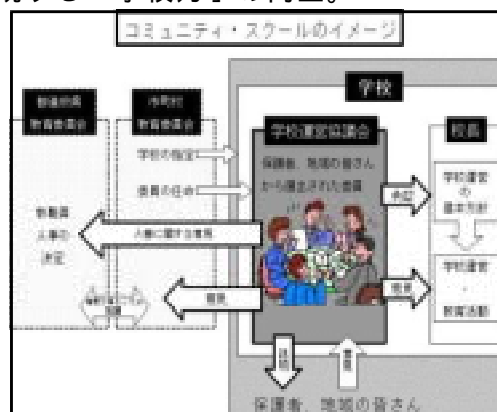
#### 研究の計画・内容

推進委員会の構成メンバーを中心に、より発展的な組織を構築する。

推進委員会の内容をより実効性のあるものとする。

「学校力」向上のための具体的方策

- ・授業参観や教師との懇談会の実施。
- ・学力の実態、問題行動の内容・件数を提示。
- ・施設・設備の充実具合の検証。



を実施した上で本校がかかえる「弱み」に対して「地域力」をいかに高め、引き出し、活用し「学校力」の向上につなげるかという方途を探る。

適切な学校評価を行い、「学校力」の「強み」「弱み」を吟味する。

学校の実態や学校評価をもとに、奈良市教育委員会との懇談会等を実施し、コミュニティ・スクールとしての機能を活用し学校運営に資する。

「RVPDCA（R=リサーチ、V=ビジョン、P=プラン、D=ドゥ、C=チェック、A=アクション）」のマネジメントサイクルを円滑に、さらに、それを継続的に繰り返し、コミュニティ・スクール推進委員会の意見として学校運営あるいは学校経営によりよいものを資する。

SAKURA ネットワーク（学校支援地域本部事業）、PTA などと具体的連携を進める。

コミュニティ・スクール推進事業の内容等についての情報発信をする。

## 2 成果及び課題

### 成果

コミュニティ・スクール推進委員会での意見聴取やアンケート調査の結果、地域住民は自校の教育に多大な期待を寄せていることが再確認できた。

「意味ある人材」を確保し、コミュニティ・スクール推進委員会や協議の場の設定などについて一定の組織や体制づくりができた。

コミュニティ・スクール推進事業や学校支援地域本部事業の活用により地域住民の意識が学校の活動に「参加、協力する」という姿勢から、「参画する」という姿勢への変化がうかがえるようになった。さらに、「都南中学校改善のための提言」をしていただいた。（来年度の学校運営に地域の声を反映する予定である。）

コミュニティ・スクール推進委員会と学校支援地域本部事業等が連携することにより、地域の力を引き出し、共に高まることによって地域と共に育つ生徒、地域に期待される生徒を育むことができる。そのことが自校の課題克服や生徒力、親力、地域力、教師力、そして、学校力を高めることにつながる。

地域の方々の活動を通して学校の独自性や特色を創ることは、学校を誇りに思える生徒、保護者、地域、教師を生み出し、人を大切に思う気持ちや地域（郷土を）を愛する気持ちの醸成につながる。

### 課題

学校評価については、コミュニティ・スクール推進委員にたよっていたアンケートや意見聴取の機会を保護者や地域に広げ「RVPDCA」のマネジメントサイクルを円滑にそして継続的にくりかえすことでさらによりよいものへと改善していくことが求められる。

地域の生の声を自校の改善のための還元方策を考える必要がある。

今後、自校や時代の変遷に対応できる持続可能な組織や体制をつくる必要がある。

## 3 その他参考となる事項

文部科学省のホームページのサイト内検索で「コミュニティ・スクール」を検索

## 1 実践内容

本校へ転任して2年目となり、現在、教務主任、学年主任、進路主任を担っている。ここ十数年学年主任など、いわゆる中堅教員として学校教育の活性化に向け微力ながら取り組んできた。生徒たちが喜んで学習し、保護者や地域住民が信頼を寄せる活力ある学校を創るためには、学校内外の「資源」を最大限に活用し、ニーズと適合させながら教育目標を達成させていく「組織マネジメント」の手法を導入することが必要である。本校の教育の重点課題である「心の教育」と「豊かな学び」を達成するために試みた「組織マネジメント」を以下に視点から述べる。



### (1) 生徒に対するミッション（使命）

学校を活性化させ、生徒が生き生きと学習にのぞめるようにするためには学校、学年行事の活性化が大切である。生徒に対するミッションを果たすという視点から、参加主体となる生徒の満足度を高めることをねらいとするべきである。

これまでに携わった行事でも、総合的な学習においては、初めて3日間の職場体験に踏み切ったり、文化祭の活性化、文化発表会への移行、体験学習を主とした修学旅行の実施などで生徒の充実感を大切に取り組んできた。

また、部活動の指導においても、これまで転勤するたびに競技経験や指導経験のない部を指導してきた。自己研修を深め、顧問との連携を図り、熱意と努力を継続すれば、全国大会、近畿大会などの上位大会に出場できるチームを育てることができ、学校全体の活性化に貢献することができたのではないかなと思う。

### (2) 協働的な関係の形成

学校教育の活性化には教員の協働が大変重要である。学年職員集団や学校全体の職員集団などにおいて生徒に関する情報は些細な事でも常に共有化できるよう配慮した。職員朝礼や毎朝の学年打ち合わせ等でも、機会を見つけ迅速に情報交換できる体制づくりを心がけた。生徒理解や対応の些細なずれが生徒指導の不一致にもつながり、学校不信に陥る原因ともなる。特に3年生の進路指導などにおいては、担任間で生徒や保護者に伝えるべき情報や対応に差異が生じると信頼を欠き、大きな不信にもなる。

また生徒指導においても、解決すべき問題事象により適切にチームの編成を要請し対処することが重要である。個による指導だけでは解決が困難であるとすばやく判断し、適切に初期対応することが重要である。

### (3) 人的資源の活用、スキルアップ

本年度は職員研修の充実を計った。生徒指導、人権教育、教務部研修に加え、授業研究を実施した。今年は新任教諭をはじめ職員の平均指導経験年数が下がっている。これを組織マネジメントにおけるSWOT分析の一つである学校教育内部環境の弱み（Weakness）と捉え、11月に全員が授業を公開し協議を深め合「校内授業研究週間」を設定した。授業公開という協働作業を通じ職員間の連帯が深まり意欲が向上した。

### (4) P D C A マネジメントサイクル

かつて日本人学校に勤務した折、三年間の多くの実践を後任に引き継ぐ責務があった。それ以来、あらゆる実践をデータファイル化して整理・保存し後任へ資料提供することを心がけてきた。その際には、反省を集約し、さらに後任がそれらを活かし改善していけるようPDCAサイクルマネジメントを重視した。

また現任校では校内LANにより情報の共有化が図られている。本年度は担当教員の尽力もあり成績処理をはじめ、ほとんどの事務処理を学校サーバーに入力することでペーパーレスでの情報処理の効率化・共有化をさらに推し進めることができた。

#### (5) 開かれた学校

ここ十数年、学年主任として学年通信の発行に継続して取り組んだ。学年分掌としてではなく自ら主体的に実践している。教師としての駆け出しの頃は学級経営に悪戦苦闘していた。その頃は、何とか自分の想いを生徒たちに伝えようと手書きで日刊の学級通信に取り組んだ。二十数年振りの同窓会で教え子の保護者とその通信を大切に保管して下さっていることを聞き感動した。中長期的な学年経営ビジョンを保護者に伝える上でも、また学校の様子や課題を定期的に公開する開かれた学校づくりという視点からも重要な実践の一つであると位置づけている。近年は学校ホームページの充実も課題であるが、通信による広報活動の充実は、パソコンを使える環境にないご家庭への情報提供の手段として、また紙面をはさんで家族間の会話のための話題提供という意味からも有効であると考えます。

#### (6) 中堅教職員に期待される行動規範

集団を効果的に導いていくにはリーダーシップが不可欠である。様々な校務に追われ時には冷静さを失うこともあるが、同僚教員に対しては教員である前に一個人として敬意を払い信頼関係を大切に接していくことが肝要であると考えます。また、教職員としてのロールモデルであることを意識することも併せて心がけ、今後も一教師として日々の授業における教科指導、生徒指導、部活動指導などあらゆる面でも誠実に仕事に取り組んでいきたい。

## 2 成果及び課題

学校行事や部活動を活性化させることは、生徒は他者との関わりや実体験から多くのことを学び成長し、「豊かな学び」となる。また職員相互が情報を共有し生徒理解を深め、生徒指導にあたることで「心の教育」が深まる。結果として本校生徒は、授業に真剣に向き合い、学校行事や部活動に対して積極的に取り組むなど確かな成長が感じられる。



本校では「組織マネジメント」に対する理解がまだまだ十分であるとは言えない。生徒たちの成長を継続性のある、より確かなものにするためにも、今後はより良い教育内容の創造に効果的である「組織マネジメント」についての研修を重ね、本校の現状を適正に評価・分析し、学校に求められるミッションを探り、ビジョンの実現を図っていきたい。

## 3 その他参考となる事項

生駒市立鹿ノ台中学校ホームページ [www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/sika-j/](http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/sika-j/)

## 1 実践内容

私は、平成13年度より本校教務主任の任命を受け、現在に至る8年間、校長の指導・監督のもと、教育計画の立案・実施、時間割の総合的調整を中心に進めてきた。特に、現行教育課程においては、創意工夫を生かした特色ある学校づくりに力を入れてきた。以下、このことについてを具体的に述べる。



### (1) 地域・学校の実態を生かした、特色ある教育活動の推進

特色ある学校づくりを進めるためには、まず全教員が同じ目標・ねらいをもって教育活動に取り組み、全員が学校運営に参画している意識を持つことが大切であると考えている。私は、平成13年度からの現行教育課程への準備やその後の実施・推進において、全教員に「総合」と「選択」のいずれかの推進部会に所属してもらい、2つの教育課程の柱の編成に取り組んできた。

現在は、教育課程編成部会を組織し、平成21年度からの新学習指導要領への移行期間中も、学校選択の教科を生かしながら、[PCを利用した情報教育の充実][伝統的な合唱指導による情操教育の充実][学校環境に起因する保健体育科の授業時間の確保][読書活動の推進]など、本校の特色ある教育課程を推進している。

### (2) 授業時数を確保する取組

年度ごとの総括を毎年12月より計画的に進め、その中で統計をもとに年間行事と授業時数を点検してきた。また、教頭と連携しながら、年間を通して週末に次週の変更時間割を提示することにより、自習の時間を無くし、授業時数の確保を進めてきた。小規模校となり、複数学年を教科担当する教員も多く、また、出張・年休等で授業運営が厳しい時も多くあった。しかし、教務主任として、普段からすべての教員とよく話し合うことに心がけ、教師間の信頼関係を築く中で、学年集団を越えた学校全体での時間割変更や諸行事の調整も可能となった。

### (3) 生徒・保護者から信頼される評価・評定の実施

平成14年度から実施された絶対評価への移行は、かなり頭を悩ませる課題であった。私は、学校として、生徒・保護者にはっきりと説明のつく評価システムを構築していくことが大切であると考えた。平成13年度から、先進校の例を自己研修し、原案を提示しつつ、一方で、各教科部会や五教科と四教科の研修部会で意見交換を重ねた。その結果、平成13年度末には評価・評定の基本システムが準備でき、全教師の共通理解の中で、いち早く生徒・保護者に説明することができた。また、教育課程の説明や通知票の見方なども広報活動を行い、保護者からの一定の信頼を得られた中で絶対評価へのスタートを切ることができたと思われる。その後、毎年、各教科の評価・評定状況を互いにオープンにしなが研修を進め、定期テスト以外の評価資料の充実や観点別評価の総括と五段階評定の弾力化など少しずつ改善しなが

ら現在に至っている。

## 2 成果及び課題

現行教育課程への移行については、全教員への意識改革が深まり、その結果、過去から取り組んできた職場体験や社会福祉協議会との連携などを大切にしていくことや、選択教科による基礎学力の向上や施設面からくる保健体育科への補充及び伝統的な音楽教育の継承と充実など、しっかりとしたねらいをもった教育活動に結びついた。文化祭や体育祭などの学校行事においても、職員全員で作り上げる姿勢が定着し、特に卒業式には全員一丸となって大きな歌声の響く生徒像を目指すことができた。また、各教科の学習指導においても、定期テスト以外の多面的な評価の工夫が進み、より丁寧な学習指導が多くなった。

移行期間中は週あたりのコマ数を増やしたりしながら、今までの特色を生かした教育課程を進めているが、平成24年度から完全実施される新教育課程では、選択教科がなくなり、必修教科（特に五教科）の授業時数が増加する。「総合」や「選択」の時間で本校の特色を生かし、実技四教科を充実してきたが、このままでは時間数が不足してしまう。土曜日や長期休業中の活用・学校行事の見直し・特別活動の充実など多くの論議が必要な課題が残っている。この中で、伝統的な行事や歌声響く学校づくりをどう進め、教育課程の中でどのように特色を生かしていくか大きな課題である。





## 1 実践内容

### (1) 主題設定の理由

本校は、村の少子高齢化に伴う生徒数の激減で、全校生徒が平成20年度は38名、21年度は1年生の入学がなく、24名にまで減少した。小規模に対する不満や不安も手伝って、子育て世代の村外転出が多く、生徒数減少に拍車をかけている。そのことが更に学校への不信や不満を生んでいるように思われた。

そこで、学校が保護者や地域の理解と協力を得て、義務教育の質を保障し、中学校教育の責任を全うすることで信頼を築いていくことが必要であると考え、本主題を設定した。

### (2) 具体的取組

#### 保護者、生徒向けの学校評価アンケートの実施

平成20年度の出発時に学校評価委員会を立ち上げ、評価項目と内容の検討を行った。以前より本校では、学校評価アンケートの実施について会議を持ってきたが、意見がまとまらず、実施するに至っていなかった。しかし、親や子の本音を汲んだ取組が必要であると考え、教師間の意思の疎通を図り、12月に実施した。

#### アンケートの結果から重点課題を絞り、課題解決の具体的取組を検討

アンケートを集計し、グラフ化した。それらを考察した結果、「親子の会話・情報発信・教育相談・学力向上・授業の工夫」の項目で評価が低かった。特に、親子の会話については、生徒・保護者ともに最も評価が低く、子どもが学校での様子を話さない学年ほど、他の項目での評価も低かった。この結果と生徒の生活実態調査から、課題解決の具体的取組を検討した。以下に、具体的取組の提案を示す。これを2月の保護者会で説明し、好評を得て21年度の実施につなぐことができた。

#### ア 親子の会話について

- ・子育て支援講座の開催…親子の会話の仕方。やる気のある子の育て方。
- ・「山のかけ橋」(学校通信)に、子育て支援の記事を載せる。

#### イ 情報発信について

- ・「山のかけ橋」に生徒の声や作品、生徒が作った活動記録等を載せる。
- ・ホームページも同様に生徒の活動や声を載せる。ホームページを毎週1回、金曜日に更新する。
- ・授業参観の機会を増やす。(三者懇談期間や奈良県教育週間中も)

#### ウ 教育相談について

- ・中間テスト後(3学期は2月上旬)二者懇談を設定する。放課後も必要に応じて随時行う。

#### エ 学力向上(授業の工夫)について

##### a 生活の立て直し

- ・家庭での生活時間の実態調査(学期に1回、1週間分の生活記録をつけて

点検する。)

- ・ 規律ある生活の指導(日課表作り)...家庭との連携(新学期、家庭訪問で)
- ・ 家庭学習の習慣化...自由帳の取組(今自分に必要な学習を1日1ページ。朝の確認テストとリンクさせる。)

b 学校の取組

- ・ 授業シラバスの作成...計画や目標を示し、関心を高める。
- ・ 授業技術の研修...評価観点を設けて研修
- ・ 朝学習の充実... 8:15 ~ 8:25(月曜から金曜まで、5教科の確認テストを交替で行う。)



朝の確認テストの様子(8:15-8:25)

前の授業で、学習してくることを指示しておいて確認テストを行う。

採点后返却されたテストは、やり直しノートに貼り、やり直しの学習をして、翌日教科担当に提出する。

- ・ 居残り学習... 3年2学期から、放課後、希望者は居残り学習をさせる。
- ・ 数学科...習熟度別の設定(週1時間、基礎と応用のコースを選択)
- ・ 夏期休業中...学力補充(5教科)以外に学習会(生徒たちの自主学習の場)を設定。

2 成果及び課題

(1) 成果

学校の取組が保護者の目に見える形で表れたことで、保護者会の出席率もよくなり、学校の取組を評価する声が聞かれるようになった。また、生徒には家庭学習の習慣が身につき始めた者が増え、学習の成果が現れてきている。

(2) 課題

生徒や保護者から取組が評価され信頼を得ることで、職員に取組へのやり甲斐を感じてもらえているように思うが、一方で、職員数の少ないへき地小規模校では個々の担う部分が大きいので、配慮が必要ではないかと懸念している。21年度に定数減があったが、22年度にも更に定数減が見込まれ、1人あたりの校務分掌も多くなる。これらへの対応も課題である。

3 その他参考になる事項

川上村立川上中学校ホームページ <http://www5.kcn.ne.jp/~ka-wa/>

川上村立川上中学校  
夏期学力補充講座・夏期学習会

夏を制するものは受験を制す。夏休みがやってくる!

もうすぐ夏休み。受験生が準備するのは、**基礎習得と例題演習**。そして3学期からの**基礎的な能力アップ**。志望校合格へ一歩。

しかし、課題は新しく、みんなががんばっている中で、同じようにやっているとでは遅れを取り返すのがやっとなです。

どうすれば、短期間で成果を上げることが出来るのでしょうか。中身の濃いことわざで、**「寝たてはとほおぼれる。見せたとは寝寝る。やっつてみればわかる。寝つけぬことばはとほおぼれる」**を言います。東洋大学フロンティア大学ロータリー部会エリック・ロビンソン博士の**「脳が覚えるのは覚えるのではなく覚えること」**という研究によると、**寝て覚えるのは覚える(寝1)**ということ。講義を聞いても**覚えない**のです。自分で覚えたことを使い、練習を続け、人に説明できるまでにならなくてはなりません。

**表1 異なる学習方法での脳が記憶している割合**

5%	聞く
10%	読む
20%	見る
30%	実演をみる
50%	話し相手
75%	やってみる
90%	人に教える

**新しい要領講習も**

「新しい要領講習も」は、生徒の学習意欲を高めるための取り組みです。授業中に生徒が積極的に参加できるように工夫されています。

「新しい要領講習も」は、生徒の学習意欲を高めるための取り組みです。授業中に生徒が積極的に参加できるように工夫されています。

長い夏休み。一人で勉強し続けるのは難しい。そこで

**【夏期学力補充講座】**

今年度も、本校では夏期学力補充講座を開催しています。ここでは、各教科の基礎的な内容の講習を行います。3時間制の講座では、集中力が続かないので、2教科を1日2つの学習で済ませました。

**【夏期学習会】**

今年度から、新たに夏期学習会を開催しました。この日、学校で自主的に学習する時間を確保するつもりです。「家で勉強しているけど、集中力が続かない」「覚えが不得手になる」「やる気が続かない」といった悩みを抱える人は、積極的に参加しよう。(1日2時間、6:30時、7:30時。)

教科	英語	国語	数学	理科	社会	総合	体育	音楽	美術	保健	家庭	職業	その他
1日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

夏期学力補充・学習会の案内文書



## 1 実践内容

本校の校門を入ると正面に「生徒の笑顔に出会える学校」という看板が目飛び込んでくる。これは、昨年赴任された教頭によって年度当初発案され掲示されたものである。

昨年教務主任という学校の要となる職を任せいただき、前任者から引き継いだ仕事内容に驚きながら、多くの教職員に支えられてのスタートでした。奈良県立教育研究所中学校教育アドバイザーチームの学校訪問が2学期にあり、訪問に向けて本校の教育を再点検し、訪問後のアドバイザーレポートに基づいて改革に取り組んだ。



本年度赴任された校長の学校経営の重点である「希望に満ち溢れ、力強い活力ある生徒の育成」をめざし、学校の教育力（「学校力」）、教師の力量（「教師力」）を強化し、それを通じて生徒の「人間力」の豊かな育成を図ることを目標とし、校長、教頭、主幹教諭、生徒指導主事、学年主任、そしてすべての教職員と連携しながら日々取り組んでいる。

### (1) 総合的な学習の時間の見直し

本校では、「さまざまな活動や体験を通して、自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、課題や問題を解決する力を育てるとともに、自己の生き方を考えることができるようにする。」という目標のもとに総合的な学習の時間をまとめ取りし、学級担任を中心に創作活動や福祉体験活動を中心に学習を深めた。また、全学年が近隣の老人福祉施設との交流学习を続けたが、生徒の目的意識の低下や施設の方々の学校や生徒たちに対する思いにづれが生じたため、福祉施設との交流学习を根本的な見直しをはかり、本年度より総合的な学習の時間を週1時間固定し、学年所属の教師がすべて関われる体制をつくり、昨年の3学期、本年度に向けて各学年で目標や生徒に付けさせたい力、年間計画を作成し、テーマを1年生は「環境教育」、2年生は「キャリア教育」、3年生は「平和学習・進路教育」とし、自分自身のあり方や生き方、進路について考える学習活動を通して、自分の適性、将来の進学先、職業について学び、進路選択していく自覚を促し、自分の目標を達成し自己実現する能力を養うことを目標として、4月当初から新しい教職員でもスムーズに総合的な学習の時間がスタートできる体制をつくった。

### (2) 老人福祉施設との交流学习の見直し

開校以来全学年が行ってきた老人福祉施設との交流を、1年生は入所者の方々とふれ合いを中心に行いながら、介護福祉士の方々の仕事の様子を見る。2年生は職場体験として学年すべての生徒が体験活動を行う。3年生は老人福祉施設が年2回行う大きな行事にボランティアとして自主参加したり、本校の大きな行事である体育大会・合唱コンクールに招待、ゲストティーチャーとして福祉施設の

職員の方に依頼して介護福祉士の生の声を聞く場を設定した。

(3) 授業力の向上のために教師同士により「授業参観週間」の実施

6月の1週間「笑顔に出会える授業」として、すべての教師が、授業の空き時間を利用して他の教師の授業観察を行い、「授業学び合いシート」に授業者から学んだことや気づいたことを記入し互いに交流し合い、また全教科、クラス別に生徒アンケートを実施し教師力（授業力）アップをめざした。

(4) 道徳の時間の確保

平成16・17年度に文部科学省、県、市指定で「人を思いやり、生命を大切にする心を育てる道徳教育」を研究主題とする研究発表を行い、資料等の蓄積があるが、昨年まで道徳の時間は全学年6限目に設定されたため、体育大会などの行事で午後からの授業が変更されたりすることが多く、時間確保が困難であったので、本年度は1限目に持ってくることによって時間を確保し、生徒の実態をアンケート等を使って分析し新しい資料の開発に努めている。

## 2 成果及び課題

本校教育の再点検とアドバイザーレポートに基づいての改革の取り組みにあたって、昨年度末、多くの論議をし、少し強引な所があったが、一步踏み出さないという思いの中で、本年度、新教育課程や特別支援学級生の支援等で多くの教職員の授業数が増加し、総合的な学習の時間を学年全体で取り組むことで教職員の負担も増大したが、学年会議が充実し、子どもたちが今まで以上に意欲的に取り組むようになった。また授業観察や生徒アンケートをとおして教職員が授業の再点検、見直しを始めた。授業規律の確認（返事・起立）、本時のねらいを明示し発問を明瞭にし、気づきの時間を確保などを行うことで生徒たちが前向きな気持ちで授業に取り組み積極的な発言をする生徒が増えてきている。



さらに、本校の学校経営方針の重点である「希望に満ち溢れ、力強い活力ある生徒の育成」を目指す教育活動を、実現させるため教務主任として、その職責を十分認識しながら、他の教職員との連絡調整や管理職との綿密な連携を図り、学校経営の一翼を担うメンター役に徹したい。

## 3 その他参考となる事項

本校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/nishichu/>

平成21年度 五條市教育委員会指定研究発表会 本校研究紀要

## 1 実践内容

### [学級づくりの基本的な考え方]

- ・生徒がいろいろな場面を通じて集団の中で個として行動できるようになる。
- ・生徒が日々の学校生活の中で学級の一員としての自覚を持ち、お互いが支え合っていることを感じられる絆を大切にする。
- ・生徒があらゆることに感謝の気持ちを感じることができるようになる。



(1) 係活動を通して一人一人が自分の役割を責任を持って果たさせる。

日直の制度は用いず、授業に関すること（準備物の連絡・黒板の整備・教室移動の際の教室の戸締まりなど）は「教科係」、時間割に関する全てのことは「時間割係」、そのいずれにも該当しないことは「クラス係」が受け持った。一係2～4人で構成し年間を通じて活動させる。責任の所在を明らかにすることで自覚ある行動を促した。

(2) 行事に対しては学級みんなで全力で取り組ませる。

行事はどの生徒にとっても、大切な意義を持つものである。楽しみたいし、いい結果を納めたいと考えている。また行事を通じて生徒も教師も、お互いにぶつかり合ったり協力し合ったりすることで絆を深めることができる。行事に臨むにあたっては、毎回綿密な練習計画を立て、それをやり切らせるようにした。

#### 体育大会に関わって

9月の2週目から大会までの約1ヶ月間、12回にわたって午前7:30～8:00までの30分間早朝練習を行った。参加する生徒も徐々に増え、技術の向上と団結力を高めることができた。各自がそれぞれ自分にできる最大限のことを実行した。その甲斐あって本番では女子はほぼ全ての団体種目を制覇する事ができ、男子も健闘し学級として総合優勝を勝ちとる事ができた。

#### 校内合唱音楽会に関わって

体育大会から約3週間後に行われた音楽会。体育大会同様早朝練習や休日練習を行った。練習を通してぶつかり合いながら、学級として1つの音楽を創り出す喜びを感じる生徒が日に日に増えていった。その中で一層団結力を深められた。最優秀賞は逃したものの、「再度みんなで歌いたい」という声につながり、学級解散前の3年生を送る会に出演する力になった。

(3) 定期的に「まとめ文」を書かせる。

いろんな機会を通じてその都度テーマを与え「まとめ文」を書かせた。自分のことや学級のことなど、様々なことに目を向けさせ、考える習慣をつけることを目的とした。学級通信に掲載したりして互いに交流させた。その中で徐々に本音を書けるようになり、特に行事の時の文は文集化した。担任としても生徒の考えを知ることができ、取組が生徒にどのように響いているかを確認することができた。

(4) 学級通信を発行する。

基本的に毎日発行した。日々の学校生活で担任が感じたことや学級の現状（評価できること、問題点や課題など）、生徒が書いた「まとめ文」などを載せた。また日常撮った写真をできるだけたくさん載せ、その時の雰囲気伝えるようにした。

[ 学級通信を発行する目的 ]

お互いが共通のことについて考え、同じ視点で取り組むきっかけにする。

生徒の家族に学校の様子を伝え学級運営への理解や協力を促す。

通信を通じて家族間での会話のきっかけにしよう。



## 2 成果及び課題

### (1) 成果と考えられること

個々の生徒の変容

わがままでほとんど努力した経験がなく、ことある毎に周りとトラブルを起こしてきた特別支援学級のA君と学習能力は優れているが自分に自信が持てないB君。2人に共通するのは運動が苦手だということだった。そこで4月より毎朝トレーニングを行うことにした。まずは続けることを目標とし、少しずつ内容を濃くしていった。ランニングや筋力トレーニングを続け、ほぼ毎日努力を続けた。その姿に周りも少しずつ彼らを評価し始め、励ます生徒も出てきた。少しずつ実力がつき、体育大会本番ではある程度自信を持って競技に参加できた。A君は頑張ることを覚え、B君は2月に行われた町主催のマラソン大会で上位の成績を収めることができた。B君は現在、違う学級に所属しているが、1年半以上経った今も2人は早朝練習を続けている。

1年生時より不登校傾向で2年生の1学期も欠席が多かったC君。2学期に入り行事に向けて学級が団結していく中で、友人関係も良好になり少しずつ欠席が減っていった。最終的に10月以降3月まで無欠席となった。3年生を送る会に向けての練習では、早朝練習・休日練習にも参加した。現在、行事の際は学級の核となっている。

4月の始業式から2週間目に大阪から転校してきたDさん。斑鳩の風土になかなか馴染めず周りに反抗的な態度をとることが多かった。学級での行事に向けての練習を通して担任や周囲とぶつかり合いながらも、少しずつクラスに馴染むようになっていった。早朝練習にも1日も欠かさず参加し、とても明るくなった。

学級の変容

お互いに日々の生活習慣を大切にしながら、行事活動にも積極的に取り組むことにより絆が深まり、相手に対する感謝の気持ちも強く持てるようになった。2年生終了式の日「この学級で良かった。」と口にする生徒が多かった。

### (2) 課題

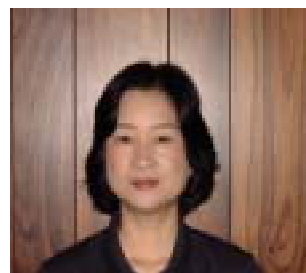
毎年、新たな学級で「この学級の一員でよかった」と思える教育実践に取り組んできた。周囲の先生方の温かい理解と協力に感謝しながら、さらに「この学年の、この学校の一員でよかった」と思える教育実践に今後も熱く取り組んでいきたい。

## 3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩中学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~ikachuu/>

## 1 実践内容

本校は「荒れ」の時期をくぐり、一定の落ち着きを取り戻した頃に、「不登校」という大きな教育課題が表面化してきた。不登校生徒の出現率は全国平均の2倍前後で推移し、対応に苦慮するケースも年々増え、保健室や別室登校で対応してきたが、人の出入りが多い環境ではそこに通う生徒も落ち着けず、あまり良い状態であるとは思えなかった。また、本校の生徒が通える校外の「適応指導教室」はなく、学校に登校できない生徒は自宅に引きこもるか、街を彷徨うしか術がなかった。



学校の中でいつもゆったりと関わってくれる人がいるような、「守り」のある別室運営ができないものかと私は思いをめぐらすようになっていた。

### (1) 教育相談体制の充実と「STEP」の開室

2004年度から佛教大学の大学院通信教育課程で臨床心理学を学んでいた私は、「学校臨床心理学特論」の講義の中で紹介された、通学の大学院生がチームを組んで小学校の支援に入っている研究実践を聞き、ひらめきを感じた。早速、校長に相談をもちかけ、校長は教育委員会の理解を取り付けた。2006年度には生徒指導部から教育相談部を独立させ、植野が教育相談部長に任ぜられた。

同年5月、佛教大学臨床心理学専攻の学生と心の教室相談員が、「日替わり」で支援スタッフを務める校内適応指導教室「STEP」を開室し、心的エネルギーの低下により「登校はできるが教室という集団には入ることができない」生徒を対象に、心理的なケアを行いつつ、適度な教員の関わりによる学力・進路保障を開始した。

### (2) 実践の広がりや校内組織の連携の確立

初年度はSTEPの運営と自宅から出られない生徒に、支援スタッフが家庭訪問を行うのが主な活動であったが、現在では夏期休業中に校区内の子どもセンターで、不登校傾向のある生徒等を対象に「学習交流会」の開催も行っている。さらに潜在的な不登校生徒への支援として、昼休みと放課後に相談室の自由来室を行ったり、支援スタッフが教室に入り込んで補助的に学習支援を行ったりしている。これらは職員会議に「お試し」という形で提案を行い、教職員の理解を得ながら試行錯誤を重ね、修正し、徐々に校内の他組織（人権教育部・特別支援教育部・生徒指導部）とも連携を深めつつ、実践の枠組みを広げてきた。

### (3) 教員コーディネーターの役割とは

学校は日々慌ただしく教職員は忙殺されている。「休みがちなあの子」が気になりながらも、学級担任は時間を捻出し、家庭訪問を行うことで精一杯というのが実情である。登校しにくい生徒や登校しても教室に入ることができない生徒は、「自分にゆっくり向き合ってほしい」と願っているのではないだろうか。これまで支援スタッフとの関わりの中で、生徒たちは感動的に成長を遂げ、教室に戻ったり卒業していったりした。思春期の混沌とした心を支え彼らのファンタジーを守りながら、それぞれの

パーソナリティーを生かした支援スタッフの関わりに頼るところは大きいですが、一方で現実的な関わりを行う教職員の存在なくして、自立につながる生徒の成長を望むのは難しいだろう。支援スタッフと教職員が微妙なバランスのもとチームを組み、生徒に関わることで彼らは成長するのだと考える。しかし、教職員と支援スタッフに実施したインタビュー分析から、相互への懐疑的な思いや不安、意思の疎通の難しさ、時間のなさなどがチームとしての協働を阻害する要因となることが読み取れた。そこで教職員と支援スタッフの特性や立場等を理解しつつ、相互の間に立ち、両者をつなぎながら隙間を埋めていく細やかな作業を行う教員の役割が重要になると思われる。

日常の細やかな動きの一方で、夏期休業中には SC（スクールカウンセラー）や管理職と共に、学年毎の事例検討会を開催している。また日頃、一堂に会することのない支援スタッフと相談員、SC、教育相談部の教員、管理職でスタッフ会議（年2回夏・冬の休業中）を行い、生徒についての情報交換や、支援の方向性を確認する機会を持っている。これらはわずかな機会ではあるが、気になる生徒についてみんなで話し合い、みんなで関わろうとする体制を維持するには大切な時間である。

STEP に通う生徒が少しずつ笑顔を見せるようになり、自分の進路を見つめ、頑張る姿を見せてくれるようになると、教職員も支援スタッフも本当に嬉しい。その喜びを共有できることがチームとしての醍醐味ではないかと考える。

## 2 成果及び課題

2008年度末、本校の年間30日以上長期欠席者（不登校）の出現率は、4.82%であった。依然として高い出現率ではあるが、本校にとって5%を切ることは喜ぶべき成果だと言える。また、今年度から2名の生徒が私設のフリースクールや、山村留学で自分の「居場所」を見つけ、引きこもり状態を脱している。彼らが自立に向かってこの方法を選択するまでには、保護者や教職員、支援スタッフ、相談員、SC、子どもセンターの職員など、多くの人々の関わりがあった。そのような経過があり、結果として学校外の施設を選択したことは、生徒にとって進路に光がさした新たなケースであると思われる。しかし、種々の手を尽くしても不登校状態にある生徒はまだ多い。また、家族全体に支援が必要な家庭も少なくない。学校の「枠」の中でできることには限界もある。

今後の課題は、校内組織や SC を活用しながら地域との連携を活性化し、さらに多様な生徒支援のあり方を創出すること。小学校との連携により、中学入学以前からの支援を行うこと。この2点について取り組み、生徒が生き生きと中学校生活を送られるように支援を行いたい。

## 3 その他参考となる事項

式下中学校ホームページ <http://www.shikige-jh.ed.jp>

中学校におけるチームサポートによる不登校支援に関する一考察

- 教員コーディネーターの役割に注目して -

佛教大学大学院通信教育課程 教育学研究科臨床心理学専攻

修士論文 植野 幸子（2007：事例は公表しません）

## 1 実践内容

本校の歴史始まって以来の「荒れ」といわれる時に生徒指導主事を引き継ぎ、組織的生徒指導体制の構築による学校正常化を目指した。



### (1) 現状の分析

引き継ぐまでの本校の生徒指導は一部のスーパー教師による指導が主で、学年ごとにそれぞれのカラーで生徒指導が行われていた。そのため、学年内では一貫した指導がなされていたが、学年間の連携がなく、基準の違いもあった。そして、そのスーパー教師が異動すると生徒指導の基準や方針が学年内でも曖昧になり、いわゆる「遊び型非行」や「集団化」に対応しきれなくなるとともに、生徒指導部の組織もあまり機能しなくなっていた。その結果、組織立った指導ができなくなり、一人の担任で解決できなくなった場合、すぐに校長に持ち込まれ、收拾がつかなくなる状態であった。

### (2) 具体的施策

#### 生徒指導部の組織の立て直し

学年を越えた指導を容易にするため、各学年の生活指導係を集め、全学年生徒指導係による定例会議を週1回確実に行った。その会議において、各学年間の情報交換を密にするとともに、何に重点をおいた指導に取り組んでいくのか、何をポイントに指導するのかを明確にして、学年間の指導の差異をなくしていった。また、会議には校長も同席していただいているので、生徒指導部の動きが直接校長に伝わり、学校としての指導方針や判断が素早く明確に決定されるようになった。現在は学年で起きた少し大きな事象には、その学年の会議に他学年の生徒指導担当も入り、情報をスムーズに伝達するとともに、他学年からの意見も取り入れられるようにしている。

#### 指導基準の明確化

校長を頂点とする組織を明確にし、それと同時に指導の基準を作り、「担任による指導」、「学年指導」、「学年間の連携した指導」、「学校全体指導」、「最終判断（管理職）」という流れ、ステップをつくった。このことにより、遊び型の非行生徒に対して「自分の行為が誤っているという自覚」と「どの程度悪いことをしているのかという自覚」を持たせた。現在本校では「授業最優先」を掲げ授業に関する問題は徹底して指導している。

#### ゼロトレランスの実行

入学式、家庭訪問期間に全家庭に本校の生徒指導の方針を文書で配り、その方針に従って対応することとした。一つの例としては、携帯電話の持ち込み禁止と持ち込んだ場合の没収 保護者返却の流れを徹底していることが挙げられる。

#### 保護者への啓発と連携強化

学校通信に生徒指導コラムを設けて、本校の指導方針や課題、携帯電話の問題性について掲載している。また、家庭・関係諸機関との連携を図るため、担任による家庭訪問の励行と、関係諸機関との情報交換を密にすることを心がけている。

田原本町内においては青少年健全育成生徒指導部会があり、町内の保育所から高校まですべての校・園・所の生徒指導担当者が集まる機会がある。その場を活用し、現状の報告にとどまらず、連携して課題の解決や連動した取組をお願いしている。また、スムーズに中学校生活に移行できるよう小学生の中学校体験入学を行っている。

#### 校則の見直し

教師自身も校則に対して校則設置の理由も含めてどの程度理解し、指導の必要性を感じているのか不明な部分がある。そのために指導が徹底していないのではないかとと思われるところがあった。そこで、生徒会を中心に校則の見直しを行い、理由が明確で指導が徹底できる校則作りに着手している。このことは、生徒会活動を活発化する効果もあり、生徒会執行部や各委員会がボランティア活動など様々な活動に積極的に参加している。



オアシス活動

## 2 成果及び課題

「生徒はみんな田原本中学校の生徒。教師はみんな田原本中学校の教師」この意識の下、全校体制での指導ができつつある。校内の落ち着きも取り戻し、チャイム前着席ができている。また、学校だけの指導で終わることなく、関係諸機関と連携した指導や保護者も巻き込んだ指導ができるようになった。現在は生徒集団としての力の高揚を目指している。室長を中心に行事や学年の取組を行うことでリーダーを養成するとともに、様々な場面でできるだけ生徒に任せ、生徒が自ら考え、判断し、行動できるようにしている。しかし、校内の落ち着きが取り戻せつつある中、校外においてマナーの悪さや規範意識に欠ける行動をとる生徒もいる。すべての家庭で学校の方針を理解し、協力していただけるよう、家庭を巻き込んだ指導体制を構築すること。生徒に対してだけでなく、家庭に対して担任以外も関わっていけるだけの連携強化。さらに、町の行事などにも積極的に参加し、地域連携していくことが今後の課題である。



## 1 実践内容

### (概要)

本校は、奈良盆地のほぼ中心部に位置する。校区には豊かな自然が残っており田園風景があちこちに見られる。弥生時代の唐古・鍵遺跡があり、楼閣が当時の様子をしのばせている。地域の教育に対する関心は高く、多くの保護者が学校行事に参加されている。



生徒たちは全体的に落ち着いた中で学校生活を送っている。多くの生徒は素直で学習意欲も旺盛であるが、自分で考え自主的に行動することがあまり得意でない。生徒指導面では大きな問題行動は少なく、比較的素直に指導に従う生徒が多い。しかし、一人一人の生徒をとらえてみると思春期特有の「自己確立への心の悩み」から生じる様々な問題が潜在し、現象として現れている。表面上は落ち着いた様子であるが、生徒の内面には様々なストレスが蓄積されている。友人関係、親からの期待、進学に対する悩みなどで、それが原因で些細なことからのけんかや公共物にあたるなどという事象として現れたり、不登校というような形で現れたりする。また、最近では全体的に規範意識の低下が見受けられる。例を挙げれば、登下校中の通学マナーが悪くなってきていることで、地域の方から連絡を受けることもある。また、制服のズボンをずらしてはいたり、カッターシャツを外に出したり、女子のスカートの丈を短くするなど制服着用の乱れが見られる。

教員が生徒を個々に理解しようとし、心情を共感的に受け止めようと努めているものの、その指導の難しさを感じているのが現状である。

### (1) 学校における実践

「基本的な生活態度の定着」...自らの責任において、発言し行動ができる生徒の育成

本校では、毎朝校門で「朝のあいさつ運動」を展開している。自らあいさつをする生活習慣を身につけさせる。

「豊かな心の育成」...皆から信頼される生徒の育成

職場体験学習や地域のボランティア活動に積極的に参加することにより、自己を生かす能力を発揮し、「生きる力」の育成や主体的に自ら考え行動する生徒の育成を目指している。

「規則・規範意識の向上」...時間を守る

遅刻をなくすことや授業のチャイムでスムーズに教育活動が始まるように努めている。

「環境美化」...学校の環境整備

学校の環境美化を図ることで、みんなが気持ちよく施設を使用することを指導し

ている。良い環境により教育活動がスムーズに行われ、落ち着いて学習できる環境を作り上げていくことに努めている。

「家庭・地域との連携」...信頼される学校を目指す

PTA と教員合同による登校指導を行っている。  
警察による交通安全教室や生活安全教室を実施し  
関係機関との連携を強めている。



交通安全教室

## 2 成果及び課題

自主的な能力を向上させるために、生徒たちは生徒会活動や部活動に積極的に参加している。生徒会活動では、生徒一人一人が委員会に入り定期的に活動を行っている。生徒会主催で今年の春に行われた地域とのボランティア活動では、全校生徒の約4分の1が参加し清掃活動に汗を流した。また、来年度の創立30周年に向けて、夏休みに保護者と教員との合同の環境美化活動が展開された。多くの参加により、日頃手入れが出来ない場所の枝切りや草刈りが出来大変有意義であった。



環境美化運動

部活動の加入率は、外部で活動している生徒以外はほとんど入部し、現在全校生徒の80%を超えている。顧問の努力で、加入率は1年生から3年生までほぼ変わらず、ほとんどの生徒が3年生の夏まで部活動を続けている。

チャイムと共に授業が開始できるように授業開始1分前に音楽を流し、授業の準備を行うように指導している。その結果、ほとんどの生徒がチャイム着席を実行するようになってきた。また、教員間の連携も適切に行われ、校内で問題が発生したとき、担任のみで解決するのではなく、学年を中心とした教員集団で解決にあたっている。常に、教員集団として解決に当たれるように、学年間の連携も心がけている。

今後の課題として、生徒指導部会の基本方針のもと、各学年の様子や取組を全教員が共通理解し、学年を越えた取組を推進していきたい。さらに充実させることによって、問題行動の予知・予防に努めたい。

また、家庭や地域とのつながりを大切にしなければならない場面が多く発生する事が予想される。学校がすべきことは、学校が責任をもち、家庭や地域にかえさなければならない内容は、家庭や地域にかえしていく。そこで、学校の現状を理解してもらうためにも、学校での出来事や行事などを家庭や地域に発信していくことが大切である。家庭には、「生活だより」を通じて、学校での指導方針や具体的な取組などを発信している。今後も、家庭や地域の皆さんとともに、「安全活動の啓発」「関係諸機関との連携」「家庭・地域とのボランティア活動の実施」などを積極的に行い、地域の中の学校としての信頼をさらに高めていく努力を続けなければならない。

## 1 実践内容

### (概要)

本校は、平成12年4月5日に開校し、今年で10周年を迎えた。本校施設は、環境を考慮した学校施設づくり(太陽光発電システム)、また防災や地域づくりの拠点施設となる最新の設備を備えると共に、ふんだんに木を使用することで、温もりのある学舎としての特色を生かしている。開校当初の生徒数は334名であったが、本年度は587名で、年々増加する傾向にある。通学地域別で見ると、新興住宅(旭ヶ丘ニュータウン・白鳳台ニュータウン)で7割の生徒数、旧地域で3割の生徒数となっている。生徒の気質を見ると、男女共仲が良く素直で心の優しい生徒が多い反面、小学生時代に他地域から転入してきた生徒が多く、友人関係に悩んだり、新しい環境に馴染めず、やや消極的な日常を送る生徒も時折見られる。そんな本校の生徒指導におけるモットーは『真面目に頑張る生徒に嫌な思いをさせない生徒指導』である。我々教職員が日頃生徒達に『善いことは善い・悪いことは悪い』とはっきり示すことができる共通理解とチームワークを重視し、一丸となって生徒の育成に努めている。その上で、教科活動はもとより、人権教育・特別活動・学校行事・部活動等、全ての教育活動における連携を密にし、一体となった取り組みを展開している。



### (現状の把握)

現在の生徒達を取り巻く環境を見たとき、多方面にわたり危険が潜んでいることに、私達大人は目を背けることができない。新聞やテレビニュース等からも、毎日のように想像しがたい事件や事故の現実が飛び込んでくる。そしてそのどれを挙げても、複雑化または突発的に発生しており、どのタイミングでどのような安全策を打ち出せばよいのかが、非常に困難となっている。そのような中で、我々教職員が生徒を守る手立てとして、地域や保護者のみならず専門機関の協力も得ながら、最新の正確な情報収集と的確な対応能力を、生徒一人一人に付ける必要がある。

### (具体的取組)

#### (1) 警察講習会

毎年1学期に全校生徒を対象として、警察講習会を実施している。香芝警察署や県のサポートセンターの協力を得て、携帯電話使用に関わる様々な危険性やその他の事件や事故の現状を、講義や演劇等を取り入れながら、生徒がわかりやすい内容で講習会を進めている。



2年に1度教職員を対象として、警察講習会を実施している。香芝警察署や奈良県警の協力を得て、不審者対応時の教職員の行動や災害時の意識の持ち方等、実技指導も含めて講習会を進めている。



#### (2) 防災学習

毎年1学期と2学期に全校生徒を対象に、防災学習を行っている。その内容は、地震・火災・不審者対応について、年ごとにローテーションしている。それぞれについて、1学期は避難訓練、2学期は知識学習を行っている。

#### (3) 北中ほっ！とタイム

毎年1学期と2学期に各クラスにおいて、ほっ！とタイムを行っている。その内容は、担任が中心（必要に応じて担任以外の教師も参加）となって、生徒の日常における悩みや不安等を聞くための時間を設定している。

#### (4) 交通安全指導

各学期に2度、全教師による生徒下校時の立哨指導を行い、生徒の安全と地域への協力を求める機会を持っている。

生徒会（安全委員会）が中心となって、定期的に生徒による登校時の校門前での安全誘導が行われている。

#### (5) 部団会議

各学期に1度、各通学地域別に会議を行い、通学上の安全確認の機会を持っている。また必要に応じて部団長会議を行い、状況把握を深めている。

#### (6) 補導活動

香芝市では毎月1度、校区内の小中学校の生徒指導主事と地域の補導員が協力して校区内補導を行い、その中で情報交換を含めた交流を深めている。

## 2 成果及び課題

本校は開校10年目で、歴史的にもまだまだ浅い学校である。そのため保護者や地域との結びつきにおいても、決して強いとは言えない。だからこそ生徒指導の取組において、生徒本人だけでなく、その背景にある保護者をも巻き込み話し合う機会を重ねる中で、少しずつ信頼関係を築いてきたように感じる。今後は地域の積極的な協力も求め、学校・家庭・地域が互いに連携して子供を育て上げた、古き良き時代を再現する必要性があると感じる。これを『子育ては、学校・家庭・地域が三分の一ずつ』と位置づけ、学校が地域を結びつける核となるように考えたい。新しい危険に直面し、多大な守備範囲に追われる困難な時代ではあるが、だからこそ学校だけではなく、保護者や地域も協力しなければ乗り越えられないことを、構築できる好機とし、変わらなければならない部分と不変である部分を併せ持った生徒指導を、今後も推し進めていきたいと考える。

## 3 その他参考となる事項

香芝市立香芝北中学校メールアドレス [kashibakitaj@city.kashiba.lg.jp](mailto:kashibakitaj@city.kashiba.lg.jp)

## 1 実践内容

### (1) はじめに

本校は山間へき地校にありがちな、素直でおとなしく真面目な生徒が多い。その反面、幼少から友人関係が固定化されており特定の人以外との関係をうまく築けず、少人数にも関わらずお互いの人間関係が希薄であった。また自分の思いをきちんと相手に伝えられず、誤解を招くことも見られた。この関係の希薄さは、生徒指導上でも同様であった。そこで着任2年目生徒会と生徒指導を担当したことから、異年齢の生徒集団であり、担任だけではなく全ての教師が関われる生徒会専門委員会を活性化させることから始めることにした。人に伝える力、出来た時の成就感からくる自信、他の人への関心や距離を縮めていくことを、頭で分かるのではなく『体験する』ことで会得して欲しかった。



### (2) 主な取組

各委員会の年間計画の見直しと連携

以前は各委員会が独自に計画をたてていたが、年度当初にどの月にどんな力をつけるのか話し合い、計画を立てる時の共通理解とした。またその委員会のエキスパートを育てるべく、自信

#### 今年度の生徒指導の重点目標

他の人との関わりを深める  
あいさつ・返事・発言の徹底  
校内美化の徹底（ボランティア精神の育成）  
生徒理解のために情報交換を密に行う  
『気づく眼』をもつ

を持たせ、更に「わが委員会」に誇りをもって活動させるよう、集会での発表内容も専門性を発揮したものや生徒同士がコミュニケーションを図れる内容とした。

生徒会役員の意識改革

執行委員会は本部役員3名と1、2年生の代表4名の合計7名で構成されている。生徒会活動を活発にするには、まず役員の意識を変えることが必要であった。本部役員3名だけを中心にするのではなく、他の4名も含めて一つのチームとして活動させた。安易な行動、従来通りのマンネリ化した活動にならないため執行委員全員で年間行事を作成し、それを分担した。自分たちで企画・実行・反省することにより次の年への改善点を明確にし、あわせて自分でもできたという自信につながった。

生徒総会の運営の改善

型通りで発言もなく、短時間に終わっていた総会であったことから、まず会の進め方を教え、ルールも決めた。座席はお互いの顔が見えるようにコの字型にし、議案は冊子にまとめ、年間計画や他の委員会への要望を記載し、会の中でその要望に対し各専門委員長が回答をしていくようにした。答弁も回を重ねる度に自分の言葉で回答できるようになってきた。



生徒による「学校生活への要望」提案（生徒指導面から）

校則・生徒心得・施設面など学校への要望を生徒全員で決定し、本部役員が校長

と交渉する。職員会議を経て、生徒集会時に校長より回答する。昨年は10コの要望に対し、8コが実現した。これは自分たちの生活に関心をもたせること、ルールを守ることの大切さ・物事実現の筋道を学ばせる、希望が叶った時の成就感（学校創りの一員であることを認識）、自治能力の育成に大きな成果となった。

生徒会新聞「さわやかMAX」刊行（生徒指導面から）

学校で起きたことや他学年の活動、日常生活の中で反省することなどを掲載し、執行委員会の手により発行している。同じ月生まれの人の集合写真を掲載するなどして、お互いに関心を持つようにしている。また、あいさつや服装、校内で起きた事案について、生徒指導上の問題も生徒に密着した形で展開することができた。

様々なボランティア活動

年4回の募金活動を各専門委員会で担当することにより、以前より多くの募金が集まっている。奉仕活動としては村内清掃や村営プールの清掃など数年続けている。

有志によるソーラン節

平成19年度に担任していた1学年の文化祭でソーラン節を踊った。その踊りの魅力からか、その後もソーラン節を踊りたい有志、半数以上で今年で3年目となる。夏休みを利用し上級生が指導することにより、共に汗を流し、励ましあい、協力して一つのものを創り出す喜びを感じた。また、人前で発表し、賞賛を受けることにより、達成感と自信につながった。



## 2 成果及び課題

本来子供は、人に認められ、人に褒められ、人に必要とされることで、自己有用感を味わい、自信を持ち、それが次なる活動につながっていく。しかし子供たちは自分は何ができるのか、どうすればいいのか分からないのである。そういう生徒に我々は的確なアドバイスやアイデアを与えているだろうか。与えられるだけの自己研鑽を積んでいるだろうか。教師はそんな生徒によりそい、同じ目線にたち、まずきちんと教えることから始めることが必要であると思う。同じ問題を一緒に考え、共に汗を流して創りあげていく過程の中で、人を思う心や技術的な力が培われていくのではないだろうか。

委員会活動を定期的に確保し、意図的に発表の場を全ての生徒に体験させることにより、委員会の発表内容も専門的になり、表現力もついてきた。それが彼らの自信となり、「わが委員会」として誇りを持ち仲間意識も深まり、コミュニケーションもたくさんとれるようになった。小規模校であるからできた事かもしれないが、マイナスの面が先にでて来るべき地校においても、やり方を工夫すればできることがある。活動の時間確保や人数の少なさからくる生徒への負担など、まだまだ課題は残っている。しかし成果の最大の要因は、全ての教職員の『共通理解』とそれぞれの分野での『根気強い指導』によるものである。今後は『地域の力』を生徒のために活かしたいと考えている。

生徒指導は生徒理解、お互いの人間関係があってはじめて通じる。そのために生徒同士、そして生徒と教師が共に行う体験がその一助となっている。これからも『体験する活動』を大切に、更に感性を磨き、生徒一人一人が認められる学校創りに貢献したい。

## 3 その他参考となる事項

黒滝中学校ホームページ [kurojhs@m5.kcn.ne.jp](mailto:kurojhs@m5.kcn.ne.jp)

## 1 実践内容

(始めに)

生徒の本音はやはり高校進学である。しかし、多くの生徒が、授業や学校生活に前向きに取り組んでいる中、「勉強がわからない」、「授業が面白くない」、「何を学習しているのかわからない」という自分の現実と正面から向き合うことができない生徒がいる。教師に一定の距離を保ち本音を見せない生徒は昔と変わらない。「勉強しようか。」といっても周りの目を気にする。問題が何であるのか理解していないことが多く、学習に対して少しでも自信を持たせるにはマンツーマンでしか対応できない。このような生徒の抱えるいくつかの要因に、保護者を含めた学校に対する信用の回復が必要なケースや、生活環境が大きく影響し現在に至っているケースも少なくない。



(取組内容)

### (1) 学習理解をより深めるための取組

プリントを使った教科授業

板書を写せない生徒、ノートをうまく使えない生徒のために

- ・プリントは教科書の内容とほとんど一緒。授業は、プリントに沿って説明しながら板書する。
- ・プリントの内容を工夫することで、板書を写すのが早くなる。問題の解き方がわかってくる。

1時間で2枚のプリントをし、ノートに貼ることでどんどんノートが膨らみ何かしら満足感のようなものが生まれる。

・「授業のノートこんなに分厚い!」「最後までノート使ったの初めて!」  
ちょっと勉強をあきらめかけている生徒に充実感を与えることができる。  
無気力タイプの生徒のノートの管理は、私がする。

- ・一行でも書けば「よし!」、1問でも解いたら「よーし!」。あとは放課後つかまえて、マンツーマンで「プリントしよう!」

3年生の後半にもなると、あまり丁寧すぎるプリントは生徒から敬遠される。

- ・こうなるとプリントづくりも楽!プリントなしにしてもいい。

プリントをやりながら、自分にわかりやすい『MYノート』が作れるようになってほしい。

### (2) 勉強の楽しさは生徒との絆から

到底生徒全員を対象にはできないが、いろんな課題がある生徒に声をかけ最初のころは週に2回で1回10分から始めた。学校の授業で使うプリントをやるだけ、プリントをしている時はできるだけ褒める。問題が解けたら必ず丸をつける。おだてて褒めまくっているうちに、授業で何をやっているのかわかってくるとおもしろくなったのが少しずつ勉強する時間が増えてくる。生徒と向き合う時間は、1時間と決めている

ので「1時間しかやれへんから」と言っている。悩みは、なかなか時間通りに来ないこと。平日は、放課後遊んでからしか出来ない。土、日になると毎回2時間くらい前から電話をかけ朝起こすところから始める。「あかんでもともと」という意識が抜けず、頭の中は毎日どんな楽しいことをして過ごすしかない。3年の12月ごろになると、ようやく1時間～1時間半くらいは問題と向き合えるようになってくる。「高校に行けるかな」「高校落ちたらどうしよう」「特色選抜でおれ通るか」とんでもない発言ではあるが、入試をかなり意識した言葉が増えてくる。

## 2 成果及び課題

### (1) 放課後や休業中における低学力生徒への学力補充

学習と向き合う生徒をサポートするのは、時間や気持ちに余裕ある放課後や休業中を利用する。また、場所も学校に限らず場合によっては、生徒の家や公共施設なども使う。つまづきを発見し克服できるよう学習指導だけでなくコミュニケーションを深める意味でも少人数やマンツーマンで生徒と向き合う姿勢と配慮が必要である。

### (2) 個別指導のために自主テキストを作成

個々の生徒の学力を向上させることは、進路指導の基本である。学習している内容がわかったときの喜びや、学習することの大切さが実感できた喜びが自分自身の意識変革を促し、保護者やその生徒を取り巻く環境が変わっていくのである。そういった意味で、個々の生徒に応じたテキストを作成することは、生徒自身の意欲をかきたて自分の将来のために頑張ろうとするステージ作りになる。

### (3) 3年生を中心に進路選択に係わる教科学習会の実施

生徒の学習への真剣度は、実際、最終学年(3年)にならないと現れてこないことも現実もある。学習をやろうとする姿勢がでてきたときがチャンスである。この機を捉え、一気に進路を目指す指導を学習と絡めて行う。このときの取組や本人の努力は、進学しても就職しても子どもたちの個々の人生を支えたと考えられる。

### (4) 家庭訪問を中心に据えた保護者、生徒に対する個別の進路指導

子どもたちは自分なりに将来の夢を語り、職業についても希望を持っている。子どもたち一人一人やその保護者と、学校や授業以外の場面で日常的な会話を通し生活背景を知ることによって、学習に対する意識改革を促し、本人や保護者が職業観や学習に対する姿勢を改めて考えなおそうとする営みから進路指導は始まる。

(終わりに)

多くの生徒を対象にはできないが、生徒の生活背景を含め深く関わることで本人や家族とは信頼関係ができ「つながり」ができた。卒業してからもきつというんな相談があると思うがこの「つながり」を宝物にしたい。これからも、多くの課題を抱えた生徒が入学してくると思うが、少しでも安心して学習できる学校に、少しでも将来の夢や希望している進路に近づける学校に、教職員がそれぞれに得意な分野で力を発揮し取組めるようにしたい。地域に根ざした、地域から愛される学校にしたいと思う。

## 3 その他参考となる事項

問題を作成するときによく使うソフト

「スタディーエイド D.B.中学数学2008データベース」/数研出版株式会社

数式作成ソフト「MathType」/米国 DesignScience 社国内総代理店<sup>せんこうつうしょう</sup>巨香通商株式会社



## 1 実践内容

現在中学校では、友人関係のトラブルが多い、落ち着きがなくルールを理解できないなど、生活面、行動面で様々な課題をもつ生徒が多く在籍している。これらの課題が何を原因としているのかを把握し、適切な教育的支援をすることにより、生徒自身が自分の課題に対処する力をつけ、有意義な学校生活を送りながら社会性を育てることができるのではないかと考えた。



このような仮定のもと、本校ではすべての生徒が「生きる力」を育みながら、より楽しい学校生活が送れるように、教科担任制であることを生かした特別支援教育の在り方を探りながら、全職員の「共通理解」をキーワードとして取組を進めた。

### (1) 取組を進める視点

教科担任制の課題は、教員が支援を必要とする生徒すべての授業実態を把握することが困難であることや部活動等授業以外の学校生活の様子も分からないことである。それを改善するため実態を全職員が共通理解する方法を色々試行してみた。

### (2) 取組の概要

より適切な支援を行うには、生徒個々の実態をより正確に把握することが重要なポイントとなってくる。当該生徒に関わりをもつすべての教員が発達の視点で簡潔に記入する実態把握シート作成に重点をおいた。シートの様式は校内推進委員会で検討を重ねた。



また職員にはコーディネーターと学習部が連携して、特別支援教育に関わる講師を多方面から招いて研修を積み重ねた。

実態把握のためには、担任だけでなく教科担任、クラブ顧問、養護教諭等関わりがあるすべての職員の理解が必要なため、職員研修として取り組んだ。

また、サポーターやカウンセラーなど関係の担当者に細やかな共通理解を徹底するには、コーディネーターが中心となっていかなければならない。

研修では特別な支援が必要と判断した生徒について各学級担任から「学校生活の様子」「保護者からの情報や願い」等を報告したあと、各授業やクラブ、その他の活動で気になる行動や様子を担当教員から出してもらった。

### (3) 個別の指導計画

支援を必要とする生徒について、コーディネーターが検討し実態把握シートを準備、授業やクラブ等で経過観察し実態を記入してもらった。記入後にもう一度集めて再構成し、ケース会議で検討した。

月一回定例の特別支援教育推進委員会とは別に特別支援アドバイザー等も招いて大人数（校長、教頭、学年主任、教務主任、生徒指導主任、コーディネーター、養護教員）でケース会議を行っていたが、担任との意見交流をより深めるため、20年度からは（コーディネーターや教育相談部、養護教諭、カウンセラーなど）少人数で数日間かけてケース会議を行い、推進委員会とも連携できるようにした。

ケース会議で支援の方向性をさらに探り、担任や保護者の意見も参考に相談し個別の指導計画を作成した。

それを資料として再度職員研修をもち、一人一人の支援について全体で共通理解した。特別支援教育を推進する上で、ケース会議から共通理解までの流れが最も大切である。



#### (4) 様々な教室

ホットルーム（特別支援教室のようにも活用する部屋）ゆうルーム（スクールカウンセラーのカウンセリング中心に活用する部屋）保健室（心や身体のケア・相談に活用する部屋）があり、それぞれコーディネーター、教育相談部、養護教諭と運営担当は別々であるが、常に連携して取り組んでいる。

## 2 成果及び課題

この取組によって教科担任制の良さが発見できた。それは職員一人一人が特別支援教育の知識を高めることにより、多くの教員が特別支援の視点から当該生徒の実態把握をし、共通理解をする事によって、それぞれの教員のもち味を生かした多面的な支援ができるということである。

例えば、朝から学級担任が忙しく声をかけるチャンスが無かった日に、音楽の教員がその生徒の良さを見つけタイミング良く声をかけて褒めたり、数学の教員が少人数授業で席の配置を工夫して丁寧な指導をしたり、クラブ顧問が部活動で細やかな言葉がけをするなど多面的で効果的な支援が多くできた。

このような支援が日常的にみられるようにするには、特別な支援を必要とする生徒一人一人に関する共通理解と特別な支援に関する教員の基本的な知識が必要であると考えられる。

「共通理解」は、学級担任を中心とした支援、抽出した生徒を対象とするホットルームでの支援、不登校生の家庭訪問等すべての支援での重要なポイントである。

しかし、現状として全職員が集まれる機会は多く取れない事も事実である。本校では、10月にスタートした支援員制度を活用し、支援を必要とする生徒の様子と変化する実態をタイムリーに把握して連絡してもらっている。それを小グループの教員で軽い連絡を取り合い支援の方法を検討、決定し、共通理解できるようにすることが重要であり今後の課題でもある。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立平城東中学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/heijouhigashi-j/>

## 1 実践内容

### (概要)

#### (1) はじめに

十年前、本校では授業不成立や緊急を要する生徒指導事例が多発し、それへの対応に全職員が追われていた。そのなかで、図書館の運営は現実的に困難を極めた。その後、職員の努力・保護者の協力・生徒の意識向上により校内が正常化した機をとらえ、一気に図書館運営の再構築に取り組み、数年の改革期を経て、現在の発展安定期に至っている。以下に主な改革点を列挙してみたい。



#### (2) 具体的実践

##### ① ハード面から

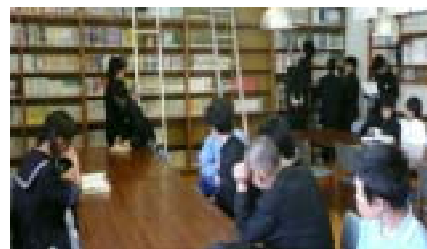
- ㊦ IT化の推進（市教委の指導を基に、蔵書のデータベース化及びPCでの貸し出し業務を開始する。）
- ㊧ 利用者の利便性を考慮した環境改善
  - ・書架及び掲示板を増設する。（卒業記念事業の一環として）
  - ・閲覧機の整理再設置を行い、収容定員増と閲覧スペースの拡大を図る。
  - ・分類記号による図書配架を改め、生徒が理解しやすい教科・目的別配架を行う。
  - ・床面のフローリング貼り替え。（スリッパへの履き替えが必要なカーペット敷きから、上靴のまま入室可能な方式に改める。）
  - ・大型掛け時計の設置、観葉植物及び芳香剤の配置による室内の視嗅覚的改善。
  - ・掃除の徹底及び燻煙剤利用による害虫駆除を実施し、衛生面から改善を行う。
- ㊨ 司書室の設置。（国語科準備室との共用）
- ㊩ 蔵書の品質管理及び維持。
  - ・書籍の色あせ防止（カーテンの装着及び遮光フィルムの窓ガラス貼り付け）
  - ・経年劣化及び時勢不適合書籍の廃棄。（資料的価値を有するものは司書室保存）

##### ② ソフト面から

- ㊪ 図書館教育指導計画および活動マニュアルを作成する。
- ㊫ 蔵書整理及び大掃除のため、夏季休業日に図書部登校日を設定する。
- ㊬ 職務への自覚を促すため、当番図書部員にID名札の吊り下げを義務化する。
- ㊭ 「図書だより」の定期発行及び購入希望アンケートを実施する。

##### ③ その他

- ㊮ 美術部員及び有志の協力を得て、壁面ディスプレイを行う。
- ㊯ 学校支援ボランティアに貸し出し業務のサポートを依頼する。



## 2 成果及び課題

前述の荒廃期における生徒による書籍の無断借用や図書室の目的外利用、当番の不在、管理面での問題点（書籍の平積み・図書台帳の記載漏れ・購入計画の不備）は、全面的に改善されたと考える。時間を要したが、図書部員には、その活動を精選し、やりがいをもたせ、利用者の利益を意識させることを図書部会等で徹底した。また、職員には、会議や図書だより等で、物理的及び精神的協力、購入図書へのアドバイスを依頼するなどして、改革への参画意識を高め、実際の活動も担ってもらうことができた。



なお、喫緊の課題は以下のとおりである。

- ① 生徒の学習フィールド及び集い・交流の場としての更なる昇華
- ② 書籍発注から配架までの時間短縮及び利便性の追求
- ③ 利用者の声の吸い上げとそれへの対応
  - ・アンケートの実施（利用法、購入希望、環境整備面等）
  - ・広報啓蒙活動の活性化（コンクール及び諸行事の案内、情報発信）
- ④ 放課後の利用者増への取組（文化系部活動による積極的利用の促進等）
- ⑤ 学年及び教科とのさらなる連携協力
  - ・国語科における読書指導、社会や理科の調べ学習での効果的利用形態の確立
  - ・職業体験や進路指導、「朝読書」での活用
- ⑥ 成果が目に見える形への業務精選（貸し出し・掃除・購入図書整理・点検・返却督促）
- ⑦ 橿原市図書館教育研究会、他の図書館、地域ボランティア等の学外関係者との緊密な情報交換、各種の図書関連団体が主催する研修への参加
- ⑧ 図書担当後継者の育成（作業及び職務に熟練精通した生徒・職員の確保）

これらの課題（目標）を画餅にせぬよう、生徒・職員ともに力を合わせていきたいと考える。

「今日は、図書室開いてないんですか?」、会議などで図書室を臨時閉館する時、生徒からこのように声を掛けられる時がある。図書室の利用を楽しみにしている生徒の声は、我々職員にとって殊の外うれしいものである。当番時、「忙しいわあ。」と言いつつも、嬉々としてPCを操作する図書部員も、それは同じ思いであろう。十年前には思いも寄らなかった利用者の増加。職員・部員ともに汗を流し、得られた最大の成果がそこにあると考える。卒業後に母校を訪れる図書部員OB・OGの口から当時の充足感を語られることもある。我々は、こういう声に耳を傾け、その評価に安住せず、書籍に関するプロデューサー兼コーディネーターたることを自覚し、不断の努力を惜しまないことを最後に確認したく思う。

## 3 その他参考となる事項

購入図書選定における参考サイト

「書評・ブックレビュー検索エンジン」 <http://book.cata-log.com>

## 1 実践内容

「教育コース」は、近い将来確実に訪れる小学校教員不足に備え高い資質の人材を育てること、高校生段階から将来就きたい職業について理解を深め資質の育成を図るというキャリア教育を実践することの二つを目的として、平成18年度に全国で初めて県立高等学校2校に開設された。本校の「教育コース」は、「教員になりたいという希望を、教員になるという強い意欲に育てる」「教員に求められる資質の基礎づくりとして、幅広い人間性や社会性を育てる」「夢の実現に近づくために基礎学力の充実を図り、体力を高め、教養を身につけさせる」の3点を教育目標に掲げている。



「特色選抜入試」により入学してきた「教育コース」の生徒たちは、当然のように中学生のときから教員になるという夢をもつ。リーダー性に富み、目的意識が高い生徒が多く、意見のぶつかり合いの中で過剰な自己主張に及ぶこともあり、同じ目標をもつ者ばかりが3年間同じ学級で過ごすことによる人間関係づくりの難しさもあるので、指導や教育を受ける高校生としての視点と、子どもを教え導き教育する教員としての視点の両方を生徒に持たせることが、教員の資質の基礎づくりとなり、幅広い人間性や社会性を育てることにもなると考えた。また、「教育コース」独自の授業における学習活動のたびに高まる「教員になる」という意欲を、その時間で終わらせることなく持続させ、高校卒業後の次のステップにつないでいくためには、学級活動や学校行事などと有機的に結びつけることと、進学先の希望をできるだけ早く明確にさせることが効果的であると考えた。そこで、「教育コース」の学級担任として、次の4点を自らの学級経営の目標に据えた。

- (1) 「教員になりたい」という同じ夢を持つ者同士が、お互い切磋琢磨できる集団を育成する。
- (2) 「教育コース」独自の授業で学んだことと学級活動などを有機的に結びつけることで、「教員になる」という意欲を持続させ、確固たるものにする。
- (3) 「教員になる」という目標実現の第一歩として、個々の適性に合った学校、学部、学科選択を行い、その具体的な進路目標を最後まであきらめずに達成できる進路指導を行う。
- (4) 「教育コース」の学習活動の様子や日々の学級の様子を家庭に伝え、家庭との連携を図る。

具体的には、「学級目標や週目標などを決めさせ、共通理解のもとで実行しようと意欲を高め合う中で連帯感を持たせること」「学級の活動にかかわることはできるだけ話し合いで決定させ、違う意見を尊重しながら調整を図る工夫をさせること」「グループで活動する場合は、できるだけ毎回メンバーを換え、誰とでも協力し合う機会をもたせ

ること」「学校行事の前にはその意味を伝え、将来教員になったときにはどのようにその意味を教えるのかを考える機会をもたせること」「人権教育のホームルームや講演会でも将来、どのように子どもに教え、向き合うのかを考える視点をもたせること」「終わりのホームルームの時間を日直に任せ、その日の感想などを述べさせることで、自分の考えを伝え、他人の考えを聞く練習をさせること」「教育コース体験学習の事前指導と振り返りをさせ、学習を定着させること」「教育コース1期生である自分たちを“パイオニア”と意識させ、次に続く後輩たちの道を切り拓く使命感をもたせること」「定期的に進路希望を確認し、相談に応じること」「受験はチームプレーであり、情報の共有や学び合い、支え合いが大切であることを意識付けること」「月1回の学級通信に教育コースの学習内容、学習活動の様子と生徒の感想、反応、変化を掲載し、家族の理解と協力を得られるようにすること」などを実践した。



## 2 成果及び課題

本校「教育コース」1期生は、全員が小学校教員、中学校教員、幼稚園教員、保育士、養護教諭、特別支援学校教員になることを将来の目標とし、それぞれの免許が取得できる学科に進学を果たした（国公立大学10名、私立大学28名、私立短期大学1名）。入学時に漠然と抱いていた「教員になりたい」という夢が、「教員になる」という強い意欲に育ち、その意欲が、最後まであきらめずに受験に向かう原動力になったことの証である。生徒に実施したアンケートからは、ぶつかり合いは多くあったものの、同じ夢を持つ者同士の切磋琢磨が個人だけでなく、集団をも高めることになったことが分かる。

保護者のアンケートからも、入学時には子どもの人間関係への不安があったものの、次第に解消され3年間で人間関係を築く力が高まったと感じておられることが窺える一方で、他の学級と比べて教科の授業時間が少ないことへの不安も窺える。基礎学力を充実させることが、将来教員となったときにも必須であることから、基礎学力充実に向けての意識付けと手だてを講じることが課題である。

## 3 その他参考になる事項

「高田高校教育コース」の具体的な教育活動内容については、「高田高校ホームページ」に掲載している。（<http://www.nar-takada-h.ep.jp>）

## 1 実践内容

「教員の長期社会体験研修」で、企業が絶えず「高い安全意識・素早い状況判断・迅速かつ的確な情報伝達・明確な目標・意欲的な改善・ボトムアップな意見具申」という共通意識のもとに、PDCAサイクルを回しながら企業活動全般をスパイラルアップさせていく姿勢や取り組みを学んだ。また生産現場のグループリーダー（GL）に、強い現場作りと次世代の人材育成のために必要な任務や能力を明確に提示しながら生産現場の指導者としての意識や役割を高める研修や、生産力を向上させる指導方法の研修から、「モノ作り」＝「人作り」という企業の強い姿勢も感じた。



この企業研修の成果を学級・学年経営に生かし、本校の教育方針のテーマである「学びあい、認めあい、高めあう」に沿った「活力のある学年集団づくり」、「充実した学校生活を送る生徒の育成」に取り組んでいる。

### (1) コミュニケーションがとれた職場環境づくり

企業は良品生産のため、3か月ごとに他の部課等と連携しながら作業内容や問題点について点検、討議、改善している。これらの視点に立って学校活動を見たとき、学校では職員同士が良好な関係を構築して意思疎通をはかり、「報告・連絡・相談」しやすい環境が形成されるコミュニケーション作りが重要であることがわかる。そのことから、他の学年主任と会話と協調をとりながら、前年度の反省や課題、次年度につながる意見や提案を共有しあって3つの学年がPDCAを回し、学校経営目標の実現に向かうように努めてきた。さらに分掌長や事務職員、育友会役員との対話を促進させ、連絡調整の役割を強化することにも努めてきた。ここには企業で研修した「目に見える形での問題点の絞り出し」が役立っており、今後も継続していきたい。

### (2) 見直し・改革推進のために

学年経営や行事に対する提案があればすぐに提案者・関係者と検討・計画（P）し、実行（D）する。また、新規事業はもとより既存事業においても検証（C）に努め、必要があればできるだけ速やかに変更（A）している。その際、「学校の組織力を高めるためのチームワーク作り」を重視し、提案者を含む複数人によるチームの構成、関係分掌との連携を指示し、その取り組みが校内全体で検討・推進されてより効果的に機能し、定着化するように配慮している。

また、検証・見直しに要する期間を1年、6か月、3か月とすることにより、間延びや消滅を防ぐように努めている。

### (3) 学年経営の重点目標・進路目標の早期決定に向けて

本校生徒の多くは入学時に高い進学意識を有しているが、徐々に意欲と実力が低下していく者もいる。そのために教科担当の理解と協力により、1年生の夏期進学補習

の時間数を増加し、さらに冬期進学補習を新設した。補習開始時には受講生に「懸命に努力する姿は他人の意欲にも影響を与える」と伝え、生徒相互がよりよい方向に影響しあえるように目標の共有化に努めた。

また、1年生から学年としての目標大学を設定すると同時に、進路指導部を中心に学校全体で本校の特色を紹介する取り組みを進めてもらうことを提唱し、指定校枠等の大幅増加につなげた。

(4) 生徒が生き生きと学校生活を送るために

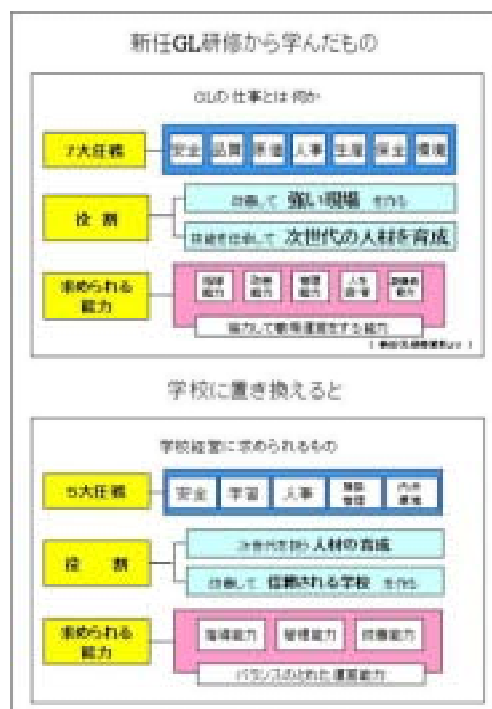
生徒の自尊感情の高揚と学習意欲の持続のために、生徒の言動に対してたとえ小さなことでも「生徒をほめる」ことを学級担任や学年職員に依頼している。特に夏期・冬期補習を継続して受講した生徒や、学習活動で顕著な成績を修めた生徒に、積極的に賞賛の言葉をかけることをお願いした。また学年末には各クラスの上位成績優秀者を集め、学年職員同席のもと、学校長・学年主任より賞賛・激励の言葉をかける取り組みを新設した。

## 2 成果及び課題

第2学年が「なかだるみ」にならないよう、学年集団の共通理解のもとに進路指導を中心に展開した結果、多くの生徒が1年生より継続して進学補習を意欲的に受講する姿やクラブ活動との両立に奮起する生徒も増えてきたことから、生徒の学習意欲、進路意識の向上がみられ、賞賛されて生き生きとした姿から成就感・達成感を持つ生徒が増えたことは大きな成果と捉えている。さらに生徒の意識変化に比例して、保護者の進路指導への関心や学校行事への関心が高くなり、進路説明会や学年主催の保護者集会への参加者も多くなってきた。

しかし充分浸潤しているとは言い難く、さらに学年と進路指導部の密な連携のもと、生徒の進路目標意識を深化させる取り組みを検討し、生徒の意識を充実・拡大させながら学年・学校の活性につなげたい。

学校運営に関しては積極的に見直しをすすめ、学校アドバイザーチームの指導助言も参考にしながら建設的な改革に取り組んでいく。その際、新たな手法を導入して学校の活性化をはかることも重要であるが、環境美化や生徒指導の基本姿勢などの教育活動の基本的な部分のチェックを絶えず機能させるように配慮しながら、教職員や生徒たちがよりやる気と持続性をもつ学年経営・学校運営に努め、「学校力の強化」に専念するようにしていきたい。



## 3 その他参考となる事項 平成17年度教員の社会体験研修報告書



## 1 実践内容

平成19年度、県立学校再編計画により奈良商業高校と奈良工業高校が統合し、奈良朱雀高校が開校した。建築工学科の科長として開校の一年前から本科としてのビジョンや、育てたい生徒像についてあらゆる角度から模索を行った。そして、開校から3年目となる本年、柏木の地で完全統合を迎えることとなった。

私は、奈良朱雀高校建築工学科として新しくスタートするにあたり、これまでの奈良工業高校建築科の歴史を継承しつつ、本科として最新の施設・設備と、恵まれた立地条件を最大限に活かして科の体制づくりを行った。

その取組は次のとおりである。

### (1) 本科のコンセプト

新しい科を立ち上げるため、私は3つのコンセプトを示し、また、このコンセプトを実行するために年度当初の教科会議で、科の先生方に「指導方針・教育内容・実践活動」からなる戦略（私はあえてこう呼んでいる。）を出した。

また、「伝統技術」、「先端技術」、「起業家育成」の3つの柱を本科のコンセプトとして教育活動を展開することとした。

### (2) 本科の実践的教育活動

専門高校である本校に入学してきた生徒は、当然、将来その道のスペシャリストを目指し、必要な専門知識と技術を身に付けるため、日々の学習に取り組んでいる。しかしながら、入学後、生徒は望むと望まざるに関わらず、本校の教育課程の中に置かれ教師から与えられた教材により学習を深めていくのが通常である。

しかし、私は常々「教育（とりわけ専門教育）は、教科書やプリントだけを学ぶのではなく、あらゆる実践から生徒一人一人がヒントを得て、興味をもって自ら学ぶもの」と確信している。そのため、従来（既存）の殻に囚われず、時には学校を離れて学習をしたり、学校外の方から多くの知識を吸収することによって新しい刺激を受けることが、本科の生徒にとってより重要と考えている。加えて、学校名から普通科の学校というイメージが強いため、本科の教育活動については極力マスコミ等を活用し県民に対する認知度の向上に努めている。そのため、実践的教育活動では特に次のことについて配慮している。

学習の場を学校外に求めて

本科のコンセプトである「伝統技術」を学ぶためまた、建築家としての感性を磨くため、本校の周辺にある世界遺産のスケッチコンテスト（5月）を開校時から開催している。この行事は本科の恒例行事として今後、定着させていきたい。

さらに、「先端技術」を学ぶため京阪奈地域にある最新建築物や大手ハウスメーカーの研究所や工場



世界遺産スケッチコンテスト

の見学会（6月）を全学年で同時に実施している。また、実際の建設現場における様々な業務を見聞させるため、「建設現場見学会」（年間3回）を開催し、教材に直接触れるという体験も行っている。言うまでもなく、本校の新実習棟建設時には県教育委員会の協力を得て、着工時から竣工時（平成20年10月）まで現場見学会を実施し、併せて夏期休業を利用して、当現場も含め本科独自のインターンシップ実習（7・8月）を行っている。

学校外から専門家を招いて

専門学校や民間企業がもち合わせている高度な技術や知識を学ぶため、外部から専門家を招き「出前授業」を開催している。今年度開催したものとしては「建築模型製作講座」（6月）・「建築パース着色講座入門編」（6月）・「建築パース着色講座中級編」（9・11月）・「建築CAD講座」（11月に3回）などがある。

また、高度熟練技能士による「建築大工実技講座」（8・10・11月）や県内の建築家集団（1級建築士事務所経営者）7名による「起業家育成講演会」（10月）を行い、第一線の仕事を学んでいる。

本科の教育活動と情報発信

前でも述べたように、以上の実践活動を広く広報するため、テレビ局や新聞社へ積極的に資料を提供し、情報の発信に努めている。これは、本科の学校評価とも関連させ、年間5回以上、教育活動が新聞等で取り上げられることを数値目標として設定している。



出前授業におけるテレビ取材

## 2 成果及び課題

本科では、建築に対する意識と専門を学ぶために必要な知識を分析するため、入学時にアンケートを実施している。しかし、我々教員にとって重要なことは3年間の専門的な学習を終え、「奈良朱雀高校建築工学科で学んで良かった。」と答える生徒を一人でも増やすことだと考えている。そのため、卒業式前日に「卒業アンケート」を実施し、生徒の本科に対する満足度を調査している。本年度の3年生が奈良朱雀高校最初の卒業生となる訳だが、3年前から実践している上記の教育活動を経験してきた奈良工業高校建築科の卒業生の調査では、本科の数値目標75%以上（学校評価設定値）に対し、昨年度83%、一昨年度95%の生徒が本科で学んで良かったと回答している。

次に、情報発信についてであるが本年度は10月までに、新聞掲載が7回「新実習棟に校歌額制作・設置」（4月）、「第3回世界遺産スケッチコンテスト」（5月）、「大手ハウスメーカー見学会」（6月）、「設計事務所インターンシップ」（8月）、「まなびースクール・建築模型」（8月）、「建築大工技能体験実習」（8月）、「起業家育成講演会」（10月）と、月1回以上のペースで取り上げてもらっており、テレビでは「特別授業・3大巨匠展」（5月）を放映している。なお、昨年度は新聞掲載10回、テレビ放映3回であった。今後は、これまでの活動についてさらに点検と改良を加え、PDCAサイクルを確立し、より充実していきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良朱雀高等学校ホームページ <http://www.nara-suzaku.ed.jp/>

## 1 実践内容

教師の教師たる所以は何だろうか。

様々な要件があるなかで、私は、教科指導、生徒指導、部活動指導であると考え。最も重要なのは、教科指導だ。己の専門性を絶えず磨き、生徒たちに学ぶ喜びを与え続けたいと常々思ってきた。しかし、



現実には日々の仕事に追われ、様々に工夫を凝らしたつもりの授業も、終わってしまえば跡形もなく消え失せてしまう。そんなことを何年繰り返してきたのだろうか。たまたま同窓会で会った中学時代の恩師から、「授業でやったことを、まとめなさい。残してゆくことはとても大事だよ」と声をかけられた。高校の国語の教師だった父にも、同じことを言われた。しかし、育児家事と仕事に忙殺されていた私には、授業の実践を残すことなど、ただ煩雑にしか感じられなかった。それでも、尊敬する恩師と父からかけられた言葉は、私の胸の奥に深く沈潜した。

### (1) 最初の実践報告

転機をくれたのは生徒たちだった。平成19年、私は山辺高校で、生徒たちの力を伸ばしてやりたいと念じて悪戦苦闘していた。決めたことを一年間やりぬくこと、創作活動を取り入れることを目標に工夫を重ねた。「現代文」の1年間の授業を終えて、たいした期待もせず授業の感想を書かせたところ、どの生徒もびっしりと感想を書いてくれた。思いがちゃんと届いていたことに気を良くして、実践をまとめなくなった。たまたま、奈良県高等学校国語文化会から原稿依頼があり、「漢字能力検定や創作俳句を使った語彙力アップ指導」と題して寄稿した。書いたことによって、旧知の方から連絡があったり、授業で使わせてもらったら、うまくいったよといった感想をいただいた。自分ではそれほど新しい手法だとは思わなかったが、反響があったことが大きな支えとなった。

### (2) 心躍る体験

実はその年、「国語理解」(古典)の授業で、生徒たちのリクエストで「源氏物語」に取り組んでいた。難解で有名な「源氏物語」を、古文をほとんど読んだことがない生徒たちにどうおろすのか。何を教えるのか。私は古文を専門に学んだため、古典の授業で古文に触れない、文法を教えないといったことは教師になって以来、やったことがなかった。そこでまずしたことは、原文朗読、文法、敬語を封印することだった。

「源氏物語」の核心、「どんな人間も人間的苦悩からは逃れられない」という、根源的テーマに迫ることを目標にした。古文に触れたくてたまらない気持ちを抑えて、古文に一切触れずに「源氏物語」を読もうと決心した。手順は次の通りである。瀬戸内寂聴の現代語訳を使い、教科書に採用されている部分を読む。漫画で各帖のおおまかな筋をとらえる。有職故実の講義をうけたあと、質疑応答の時間に、疑問に思うことはどんどん質問する。クイズを解く。

授業では、生徒たちとやりとりを繰り返しながら理解を深めていった。最後には源氏物語人物論を書かせたが、書くことが嫌だと言って憚らなかった生徒たちが、実に

生き生きとした文章を提出してくれた。この希有な体験を「古文で読まない源氏物語」と題してまとめ、奈良県教育公務員弘済会主催の教育研究実践論文募集に投稿した。結果は特選（理事長賞）をいただき、日本教育公務員弘済会の教育賞に推薦された。

### (3) 以前の実践をまとめる

昨年は源氏物語千年紀であった。たまたま数研出版から、広報誌「つれづれ」に源氏物語の実践論文を書いて欲しいと依頼があり、承諾した。しかし、「古文で読まない源氏物語」を書き終えたばかりだったので、以前いた学校で取り組んだ「古典講読」の授業での実践をまとめた。進学校だったので、大学受験に対応できる読解力を養いながら、「源氏物語」の面白さをしらしめようという壮大な目標を設定した。教科書本文の全訳、源氏関連本の通読、調べ学習と発表、現地研修などを組み合わせたもので、大変な労力を費やした取組で、いつかまとめたいと思っていたが、機を得て「源氏物語を多面的にとらえる授業の試み」として結実した。

## 2 成果及び課題

実践をまとめたことで得られたことは次の通りである。1つ目は、振り返ることでの時々生徒たちとのやりとりを思いだし、楽しかった思い出がよみがえり、それが明日の授業創造の活力となったことである。2つ目は、振り返る過程で、ここはこうするほうが良かったという反省が生まれ、よりいっそうの工夫を試みるようになったことである。3つ目は、実践を公にしたことで、多くの人目に触れ、読んだ方々から講評をいただけたことである。先輩方からの温かい助言や若い同僚からの率直な感想は、私に大いなる勇気と気力を与えてくれた。

課題として、浮かび上がってきたことも勿論ある。最も感じたことは、生徒理解が進まない生徒とともに授業を作ることができない、ということである。こちらがいくら丁寧にお膳立てをしても、こちらの言葉が響かないような希薄な関係しか築けていないならば、その取り組みは成功しない。授業は生徒とともに作るものだから、授業を通じた生徒理解を深めていく必要性を強く感じた。さらに、教材選択の難しさである。高校で扱われる定番教材だからというだけでは、教える側の動機が薄弱である。その教材で、何を、どう教えるのか。高校生に何を伝えたいのか。そのあたりを更に追求していくことが急務であると感じた。

今後は教科教育の実践と報告を重ねることで、さらに教科教授の力量を磨き、生徒指導の分野においても積み重ねた実践を公にすることで大方のご指導ご鞭撻を頂戴したいと思っている。

## 3 その他参考となる事項

「漢字能力検定や創作俳句を使った語彙力アップ指導」

「まほろば」51号 2008年5月 奈良県高等学校国語文化会刊

「源氏物語を多面的にとらえる授業の試み」

「数研国語通信 つれづれ」第15号 2009年 数研出版刊

「古文で読まない源氏物語」

「教育研究実践論文集第14集」2010年刊行予定（財）奈良県教育公務員弘済会刊

## 1 実践内容

一条高等学校は昭和 25 年に開校し、翌年に全国初の外国語科を、平成 7 年に数理科学科と普通科人文科学コースを開設した。人文科学科はこの人文科学コースを発展させ、平成 18 年にスタートした。本校の教育目標のひとつ『郷土奈良及び我が国の文化を理解し、広く世界に目を向ける国際感覚豊かな、視野の広い人間の育成』を主旨とする、文系特化型の学科である。私は、人文科学コースのそれまでの取組を基盤としながら、総合文化研究の学習について次のようなコンセプトを考えた。

奈良でこそ見られる本物を見せる。

実際に体験させる。

自分の適性を知り、将来について考えさせる。

具体的には、講演・実習・見学を実施し、レポート・感想文を提出させている。また 2 年生は年間を通して課題研究に取り組み、発表会を行う。以下の取り組みには単独のものもあるが、基本は、事前学習 フィールドワーク まとめの三段階で構成している。

### (1) 平成 21 年度「総合文化研究」( 1・2 学期分抜粋 )

	1 年生	2 年生
4 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良大学名誉教授水野正好氏 「平城京 - 古代・日本の都 - の姿は」</li> <li>・平城宮跡資料館見学</li> </ul>	
5 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東院庭園・朱雀門見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立博物館「鑑真和上展」見学</li> <li>・奈良大学教授東野治之氏 「日唐交流と鑑真」</li> </ul>
6 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺構展示館見学</li> <li>・ユネスコ青年交流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・唐招提寺見学</li> <li>・奈良大学教授上野 誠氏 「万葉集歌えば命の泉わく」</li> </ul>
7 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都大学総合博物館見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・埋文センター職員池田富貴子氏 「発掘調査作業について」</li> </ul>
8 月		<ul style="list-style-type: none"> <li>・発掘調査実習</li> </ul>
9 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・埋文センター所長森下恵介氏 「考古学とは何か」</li> <li>・出土遺物の整理実習</li> </ul>	
10 月		<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都府立大学講師上杉和央氏 「京都・日本の歴史を探究」 (数理科学科とのコラボレーション)</li> </ul>
11 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フリーアナウンサー久保美智代氏 「世界遺産おもしろゼミナール」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良大学教授東野治之氏 「正倉院展と皇室」</li> </ul>



		・国立博物館「正倉院展」見学
12月	・関西大学教授長谷洋一氏 「仏像の見方、楽しみ方」 ・正倉院・東大寺見学	・関西大学教授田中俊也氏 「おもしろ心理学セミナー」 ・奈良教育大学教授田淵五十生氏 「世界遺産とその可能性」

## (2) ユネスコ青年交流〔1年生〕

ACCUの事業に協力し、毎年、海外研修生に平城宮跡を案内し交流している。本年度も、事前学習として特別講演や「平城宮跡資料館」等の見学で知識を増やし、次にグループ毎に、研修生の国や文化について調べたり、案内する内容を英訳したりと具体的な準備を進めた。また英作文指導に、外国語科3年生がマン



ツーマンで関わり、当日も有志が通訳としてサポートをしてくれたことで、学科・学年を越えて生徒達が協力し合う機会にもなった。これは、4学科を擁する本校ならではのことに自負している。当日、最初は生徒達もぎこちなかったが、徐々に話も弾み、日本の文化に強い関心を示すとともに、自国の文化に誇りを持ち、後世に守り伝えていこうとする研修生の姿勢に刺激を受けた。そして、奈良の若者として、人文科学科で学ぶ学生としてどうあるべきかを考えさせられたようである。「日本人でありながら全く自分の国について知らないことを恥ずかしく思いました。日本について学ぶことの大切さに気づきました。外国のことを知るだけでなく、自分の国についても誰から聞かれても説明できるようになりたいです。 - 生徒の感想文より - 」

## (3) 発掘実習〔2年生〕

1年生の1学期に博物館見学、2学期に奈良市埋蔵文化財センターから講師を招いての講演と、センターでの『遺物整理実習』を行う。そして2年生の1学期に『発掘実習』についての講演を受け、夏期休業中に現場での実習に臨む。生徒は、「文化財を研究していくことの意義や、一つ一つの作業の大切さを知った。」と感想文で述べている。



## 2 成果及び課題

これらの学習により人文科学に対する生徒の興味・関心がより高まったことがアンケートよりうかがわれた。特に海外の方との交流や伝統行事の見学は貴重な体験であり、今後も機会があれば是非参加したいという声が多かった。しかし、学科の教育目標が高校の学習のみで達成できるわけではなく、さらに大学などで研鑽を積む必要がある。生徒の中に芽生えた興味・関心を将来の目標に繋げ、その実現のためより一層学習に取り組む姿勢を育てること、また学習活動と部活動の両立、教員の役割分担、他学科との連携など、様々な課題が考えられるが、教職員が力を合わせて一層の発展を図りたい。

## 3 その他参考となる事項

一条高校メールアドレス [ichi-jou-h@naracity.ed.jp](mailto:ichi-jou-h@naracity.ed.jp)

## 1 実践内容

本校の学習情報部の役割には、主に書籍などの紙面情報を中心とする図書館活動などの充実及びICTを活用した情報教育の推進などの二つがあり、生徒の主体的な学習を支援するための情報や場の提供を行っている。

平成16年度に当該部長になってからの6年間の取組を、次に紹介する。

### (1) 図書館活動の充実を目指して

すべての学習の基盤となる読解力の向上を目標に、平成17年度より「総合的な学習の時間」を活用した「朝の読書」を、年2回(各1~2週間)実施している。同時に、新書などをパックにした「貸出文庫」を全クラスに設置して、本を身近に感じられるようにするなど、読書習慣の確立を目指した。

図書委員会の活性化及び生徒の図書館活動への関心を高めるため、平成17年度より文化祭で「ブックバザー」を開催しているが、その売り上げ金から生徒の希望図書を毎年約1万円分購入している。

### (2) 情報教育の推進について

平成18年度に、5年に一度の機種更新の時期を迎えた。情報教育を推進するための重要な機会と捉え、全教職員の意見や希望をまとめ、次の三つに重点を置いた校内ネットワークシステムを構築することにした。

校内の何処でも、ICTを使った授業ができるようにする。

教員用と生徒用のサーバ及び回線を分け、セキュリティを強固にする。

コンピュータ室を、機能的に運用できるようにする。

具体的には、インターネットや校内ネットワークに接続できるようにしたノートパソコン(20台)とプロジェクター・スクリーン(5セット)を整備し、校内の何処でも、そして何時でもICTの授業が展開できるようにした。

最近では、広報としてのホームページの役割が大きくなり、本校でも平成14年度の公開以来、地域や保護者に学校の教育方針や生徒の活動状況などをリアルタイムで伝えるため、常に最新の情報を発信するように努めてきた。

例えば、ホームページの更新が円滑に行える

ように、新しい起案様式を作成したり、写真や文書のデータ化や一元化、共有化な



学校案内パンフレットの表紙

どを図ったりするなどの工夫をしてきた。

また、広報活動の一つとして、新聞や情報機関誌へ情報の提供などがあり、平成16年度の創立100周年では、同窓生の紹介を入れた学校案内パンフレットを作成した。さらに今年度は中学生とその保護者向けに、「手に取って見たくなる、見たら行きたくなる」のコンセプトのもと、教職員にも撮影の協力をしてもらい、生徒の活動風景がたくさん載った小冊子形式の案内パンフレットを作成することができた。

本校では、早くからコンピュータ活用推進委員会を設置し、コンピュータ使用規定やインターネット接続のためのガイドづくり、職員研修の内容検討などを行っている。

最近実施した職員研修の内容は、平成17年度「情報機器を活用した授業の公開」、平成18年度「機種更新に伴う新しい施設とシステムの運用」、平成19年度「文書等の管理に関する規定の設定とデータファイルの暗号化等」などで、主に教職員の情報教育に対するスキルアップを目的に実施した。



情報教育に関する職員研修

## 2 成果及び課題

### (1) 図書館活動の充実について

「朝の読書」「貸出文庫」「ブックバザー」「読書会」等の取組によって、利用者数が増え、貸出冊数も6年前と比較して35%増加するなど、読書の習慣化のきっかけづくりになった。今後は、図書委員会活動の一層の活性化と、そのための指導体制の整備が課題であると考えている。

### (2) 情報教育の推進について

私が美術を担当していることもあり、数年前からホームページに美術・音楽の生徒作品を発表してきたが、体育や特別活動などでも少しずつICTを活用した取組が広がっている。

学習指導要領に準拠した新しい教材の開発や、教員の実践へのモチベーションの向上などが、今後の大きな課題であると考えている。

## 3 その他参考となる事項

校外からの評価の一例として、次の受賞や誌面紹介などを紹介する。

「実践事例アイデア集2007」(70事例)美術科「リレーアニメ」(日本教育工学会主催 H18)

「奈良県立学校情報発信グランプリ」ホームページ部門 優秀賞(県教育委員会主催 H19)

「実践事例アイデア集2009」、学校全体での取組(全国6校)学校賞及び(60事例)音楽・美術「Webアートコラボ」(日本教育工学会主催 H20)

奈良県立桜井高等学校ホームページ <http://www.sakurai-hs.ed.jp/>



## 1 実践内容

前任校において11年間、現在橿原高校で9年間、併せて20年間弓道部の指導を重ねてきた。毎年弓道部に入部してくる生徒の多くは初心者である。その動機は、弓道着姿にあこがれる者、運動が苦手な者、集中力を高めたい者など、様々である。幸い弓道競技は、高校入学後に始める生徒の割合が高く、他の種目や分野の経験はあるものの自分を生かし切れずに終わってきた生徒でも、努力次第で高い技術を身につけることができる競技である。そこで、弓道の技術を指導する中で、生徒に自分自身の可能性を見いださせること、実社会で生き抜く自信を身につけさせることを目指して指導に取り組んできた。指導をするにあたり、以下のことに留意した。



### (1) 体づくりと体調管理

十分な筋力が備わっていない者には、弓を引くための筋力トレーニングから始めた。後の成長につながると考え、自分の筋力・体力を理解させ、自分の限界を自覚させた。

### (2) 技術（射法）の習得

弓道教本に則って、指導者の経験と様々な指導書から検討したことを基に、生徒にわかりやすく解説し指導した。中でも、弓を引き分ける際の骨や筋肉の使い方や使いどころなどを、人間の骨法にかなっていることが実感できるように指導を行った。

### (3) 練習の方法

弓の指導法には、見取り稽古、矢数稽古、工夫稽古の3つがある。見取り稽古とは、他の部員や指導者の射を見ることによって自分の射の問題点に気づく、いわば観察眼を育てる練習法である。次いで、ある程度の射法が身に付いた段階で、呼吸、筋力、重心などの感覚を、反復練習によって一定の状態に保つ稽古をする。この矢数稽古は、人の体のもつ復元力を高めることで射の納まりを保つ練習法である。ただし、個々の目的意識によって稽古への集中度、専念度が違って来る。そこで、「自分の目標の確認」「その目標をつかみ取るためにどのくらいの練習内容、練習量が必要か」を常に投げかけてきた。工夫稽古では、型にはまった練習方法ではなく、自分の感覚を磨くために射法に則らない方法も模索させてきた。これらの練習方法により、各々の問題解決能力が高まっていくと考えている。

平常心の維持に繋げる取り組みとして、矢道や道場周辺等の雑草駆除を行っている。練習開始前に部員全員で短時間、広い矢道等の雑草を私語無く黙して行うことで、心を落ち着け、弓を取り行射をする前の心の「澄まし」を行う。行射前にいつも一定の心理状態を保つことで、試合等の場においても平素と変わらぬ状態で臨むことができると考えている。



#### (4) 部内組織

2年生に進級すると主将、副主将、会計（通称3役）新旧の交替が行われる。その他のすべての部員が道場整備部、安土整備部、芝管理部、的管理部、道具管理部、園芸部、HP作成部に分かれ、2年生が部長となり管理・運営を行う。このねらいは、引き継ぎを行うことで新旧部員のつながりを深め、次代へとつながりを継承していくことにある。また、個々が各々の役割を担うことによる責任感と自己有用感の育成につながると考えている。

#### (5) 合宿の実施

年2回実施している。夏合宿では3年生引退後、1年生の技術指導と来期インターハイを想定した宿泊を伴う練習を行い、精神的・肉体的疲労を経験させる。と同時に疲労をためない工夫をさせる。春合宿では、インターハイ予選を2ヶ月後に控えた強化練習と、他府県チームとの練習試合を実施する。また合宿以外にも、できる限り他校との練習試合を行い、実戦経験を通して経験値を上げることに努めた。

#### (6) 伝統の積み上げ

弓道は礼に始まり礼に終わる武道といわれている。それに加え、創部時からの部訓である「内志正しく外体直くしてその後弓を執るべし」を日々の学校内外での生活で実践するよう指導している。挨拶の励行、周囲への気配り・心配り、学習態度、生活態度など、日常生活全般の行いを整えた上で弓の稽古に励むことが重要であり、その上で稽古に励むことによって弓の上達、弓引きとしての人の成長につなげることを目標としている。また、部訓の教えの積み上げと同時に、日々の稽古の積み上げと技術指導の習得をも先輩から後輩へと引き継ぐことで競技成績の年々の向上も見られてきた。先輩が成し得た競技成績に到達する力を受け継ぎ、成績を上回ることが感謝の心を表すことにつながるという意識と目標。その気持ちを強く持たせることによって現在に至る。



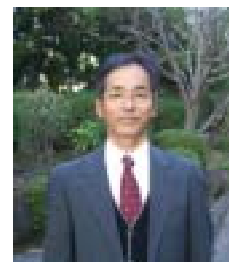
## 2 成果及び課題

弓道部主顧問に就いた H15 年度以降の全国選抜大会出場と結果は、H17 年度（福岡）女子団体、H18 年度（茨城）男子団体・個人1名、H19 年度（東京）女子団体、H20 年度（静岡）女子団体第3位入賞であり、インターハイ出場と結果は、H15 年度（長崎）女子団体、H16 年度（鳥取）女子個人1名、H17 年度（千葉）男子個人2名、H18 年度（大阪）女子個人1名、H20 年度（埼玉）男子団体、H21 年度（奈良）男子団体・女子団体・男子個人1名・女子個人2名、男子団体優勝・男子団体技能優勝校であった。

これまでの各先輩の積み上げてきた成果の上に部員達の意識と技術が向上し、全国制覇となって結実した。今後はこの結果の上に、大会の成績だけに限らない伝統を継承していきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立橿原高等学校ホームページ <http://www.kashihara-h.ed.jp/>



## 1 実践内容

私は高円高校に着任して10年目を迎えている。着任当時、一部生徒にだらしのない行動が見られ、外部からの評判も芳しくなかったが、よりよい教育を提供することを目指して、管理職を中心にして学校改革に取り組み始めた。数年間の取り組みの成果として、学校は落ち着きを取り戻し、生徒たちは楽しく充実した学校生活を満喫していた。ところが、新入生たちに入学前の高円高校の印象を聞くと、古い情報のみを知っており、あまりよいイメージを持っていない生徒が多かった。当時私は「高円高校将来構想委員会」の委員長を務めており、何とか高円高校のありのままの姿を発信していきたいと考えていた。そこに現在の町田校長が赴任され、我々教職員に広報活動の重要性を説かれた。以来、具体的な指導を受けながら、企画室長として広報活動の充実に取り組んできた。主に次のようなことに取り組んでいる。

### (1) 中学校への積極的な情報提供

中学校との連携に努め、中学生やその保護者、先生方に本校の現在の様子を知っていただくために、積極的な情報発信を行っている。生徒の活動の様子やクラブ活動、進路状況などの情報を公開し、進路選択の資料としていただけるよう心がけている。具体的には、昨年度より学校紹介パンフレットを16ページカラー刷りに刷新し、より多くの情報を伝えられるよう工夫するとともに、中学校で行われる学校説明会へ参加し、映像を利用したプレゼンテーションを行っている。また、学校見学の要請は先方の都合を第一優先とし、学校行事の日や休業日にも受け入れている。さらに、企画室を中心に4学科別学校見学会や4科合同オー



学校紹介パンフレット

### (2) 塾のネットワークを活用しての情報提供

本校に入学してくるほとんどの生徒が中学生時代に塾に通っている。高円高校をよく知ってもらうために塾へも積極的な情報提供をしている。学校紹介パンフレットの送付をはじめ、休日に塾主催で行われる学校説明会へも都合をつけ積極的に参加している。また、個人塾が参加しているネットワークにも働きかけ、生徒対象の説明会はもちろんのこと、塾長との懇談会にも参加し、高円高校の様子を知っていただくための関係づくりに努力している。

### (3) Webページの活用促進

高円高校の教育活動の様子をより多くの人々に知っていただくため、Webページの更新回数を増やすことに努めている。簡単に更新できるよう専用のソフトウェアを導入し、職員研修を行うことにより、すべての職員が情報発信できるよう条件整備に

心がけている。また、各学校行事には記録係をつくり、行事終了後2、3日でWebページ上にて情報発信を行っている。当初、教職員は学校行事を記録し、広く情報発信していくということに慣れておらず、とまどいも見られたが、徐々に浸透し、ごく当たり前の活動となりつつある。

#### (4) 学校行事の積極的活動

外部の方々にご来校いただく機会を増やすため、従来は文化祭の一コマとして上演していた「高円高校ミュージカル発表会」を昨年度から9月第2土曜日に公開している。このミュージカルは美術科・デザイン科が舞台装置を、普通科が受け付け等を担当し、音楽科が演じるという全生徒がかかわる催しである。対象者は本校の保護者はもちろん、中学生及びその保護者、



ミュージカルの一場面

中学校の先生、周辺住民、学校評議員の方々である。当初、教職員からは公開することについて生徒指導面で心配する声もきかれ、その点も含めて可能な限りの準備も行ったが、要らぬ心配であった。昨年度、本年度とも300名を超えるの方々にご来校いただくことができた。公開することによって生徒も励みになるとともに、高円高校の教育の様子を知っていただく絶好の機会として定着しつつある。

## 2 成果及び課題

広報を担当するものとして、多くの中学生諸君が高円高校の教育内容をよく知った上で、本校を目指して受験してくれることは喜ばしい限りである。しかしながら、いくら広報活動を充実させても生徒が生き生きと活動している学校でなければ、内容が伴わない広報活動になってしまう。ありのままの高円高校の様子を知っていただく広報活動を充実させる前に、高円高校の教育活動を充実させることが何より大切なことは言うまでもない。幸いなことに、最近高円高校の教職員に広報に値する質の高い教育を提供する意識が芽生えてきている。まさに、外部からの目により高円高校は鍛えられていると感じている。全教職員の理解と協力を得ながら、さらなる情報発信と教育水準の向上を目指して、取り組みを続けていきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立高円高等学校ホームページ <http://www.nara-takamado-hi.ed.jp>